

第5章 出土遺物

本古墳の出土遺物は、きわめて簡素である。中心主体出土の鉄器2、ガラス小玉1と境外石積み内堀見の有孔円板を含む玉類4点である。

1. 中心主体副葬品(図99、図版74)

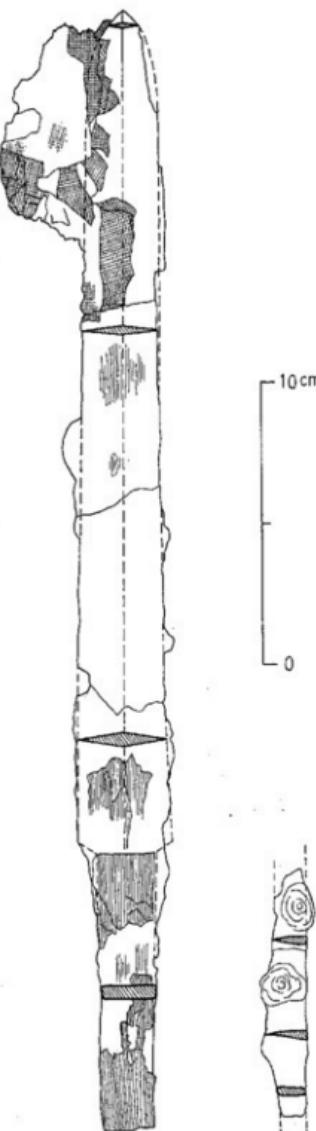
棺床面の東枕石に接して発見された剣1と、ガラス製小玉1、西枕石に接して発見された刀子1である。

剣は錆化が著しく4片に折損して出土したが、その原形はよくとどめている。全長39.6cmのものである。刃部は圓部から切先になるにつれて漸次細まり薄くなる形式のもので、中央に第2有しその断面は菱形を呈する。圓部は判然としないが、鈍角の段をもって茎に続いている。刃部長29.8cm、圓部巾3.4cm、同厚0.6cm、切先から3cmの巾2.8cm、同厚0.4cmを測る。茎は圓部付近巾2.3cm、基部巾1.9cm、厚さ0.5cm、茎長9.4cmを測る。基部に近づくにつれて漸移的に細まるが、厚さはほぼ一定で断面は長方形を呈する。

剣が供獻されていた際、下方となっていた面には水銀朱とともに木棺材と思われる板目の木質が最大巾6cmにわたって付着遺存していた。また上方面には織布痕が鉄錆に置換してよく遺存しており、多いところでは6重まで数えられる。もと織布に包んでの供獻と考えられる。織目は細く小さい。圓部から茎にかけては表裏両面とも木質部が遺存し、柄部の木質と考えられる。そのため茎に通常見られる目釘穴についての確認はできなかつた。

刀子は錆化が著しく、やっと刀子と判定できる程度の遺存で全形は不明である。現存長8.7cm、刃部長6.8cm程度の小形品である。刃部断面は二等辺三角形、茎断面は長方形を呈するつくりである。

ガラス製小玉は剣の鉄錆に付着して検出され、破碎片となって図示できないが、前期古墳に通常見られる青色をした推定約4mm、同厚さ約2mmの小粒のものである。やや歪をみせるが平面形は円、側面形は太鼓胴を思わせるものである。



第99図 第7号墳出土鐵器実測図

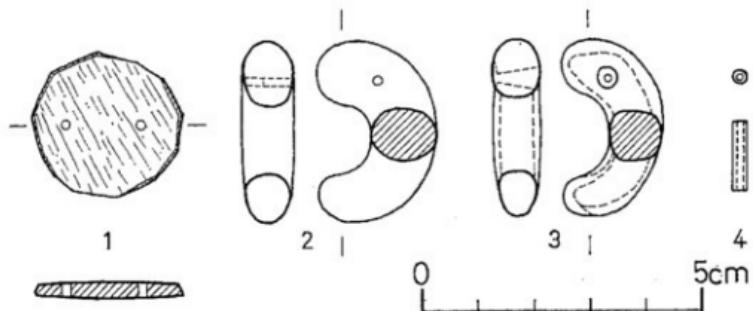
2. 石積み遺構出土玉類 (図100, 図版7)

緑泥片岩製双孔円板、瑪瑙製勾玉、碧玉製管玉各1の計4点の出土である。いずれも石積み遺構の下部から遊離した状態で発見された。

緑泥片岩製双孔円板は長径2.7cm、短径2.4cm、厚さ0.28cmのやや歪みをもった楕円形を呈する薄い板状の円板で、両面にすり痕を残す。長軸中心線上に1.55cmの間隔をもって、直径0.15cmの2個の円孔があけられたものである。鏡の石製模造品とする説もあるが、その実際は不明である。岡山県総社市隋庵古墳出土のものと類似するが、岡山市高島祭把跡などからも出土が知られている。

碧玉製勾玉は均整のとれた丸みをもったC字形勾玉である。青灰色を呈しよく研磨されにぶい光沢を有するが皮に近い部分と思われ、顕微鏡観察によると、石材中に気泡が多く軟質である。器高3.18cm、巾2.05cm、頭部厚0.92cm、尾部厚0.89cmを測る。貫孔は一方からなされ、径は上下とも0.15cmと一定である。瑪瑙製勾玉はC字形を呈するがやや縦長の感じである。したがって全体のつくりが少し細長く見える。いわゆる瑪瑙色を呈し光沢をもつ。紐とおしの貫孔はC字形において逆方向からなされているが、裏側からの迎え打ちが見られる。器高3.1cm、巾1.8cm、頭部厚0.8cm、胴部厚0.9cm、尾部厚0.7cm、貫孔径0.3cmを測る。

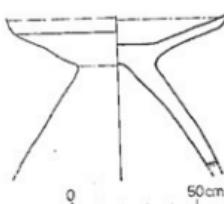
碧玉製管玉は、乳青色を呈するもので、器高1.22cm、直径0.22cmの細身小形のものである。貫孔は一方からなされ、径は0.1cmである。



第100図 第7号墳石積み遺構出土玉類

第6章 その他の遺構遺物

本古墳の周辺には先にも何回かふれてきたが、弥生時代集落址および平安時代窯址が所在していた。これらについては別に稿を改めて報告する予定であるが、本古墳墳頂北方約9mに営なされた竪穴式住居址は、墳外石積み遺構と同一立地に複合していた関係もあるため、その測量図を参考までに付記する。この住居址は5.03m×4.9m、深さ0.36cmの隅丸方形4本柱のものであるが、火災にあっ



第101図 第5土壙出土土器

第5章 出土遺物

本古墳の出土遺物は、きわめて簡素である。中心主体出土の鉄器2、ガラス小玉1と墳外石積み内発見の有孔円板を含む玉類4点である。

1. 中心主体副葬品 (図99、図版74)

棺床面の東枕石に接して発見された剣1と、ガラス製小玉1、西枕石に接して発見された刀子1である。

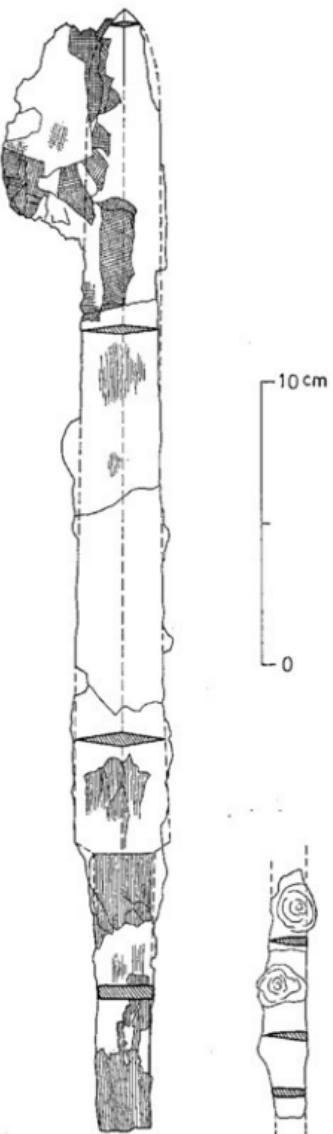
剣は銹化が著しく4片に折損して出土したが、その原形はよくとどめている。全長39.6cmのものである。刃部は関部から切先になるにつれて漸次細まり薄くなる形式のもので、中央に鎌を有しその断面は菱形を呈する。関部は判然としないが、鈍角の段をもって茎に続いている。刃部長29.8cm、関部巾3.4cm、同厚0.6cm、切先から3cmの巾2.8cm、同厚0.4cmを測る。基は関部付近巾2.3cm、基部巾1.9cm、厚さ0.5cm、茎長9.4cmを測る。基部に近づくにつれて漸移的に細まるが、厚さはほぼ一定で断面は長方形を呈する。

剣が供獻されていた際、下方となっていた面には水銀朱とともに木棺材と思われる板目の木質が最大巾6cmにわたって付着遺存していた。また上方面には織布痕が鉄錆に置換してよく遺存しており、多いところでは6重まで数えられる。もと織布に包んでの供獻と考えられる。織布目は細く小さい。関部から茎にかけては表裏両面とも木質部が遺存し、柄部の木質と考えられる。そのため茎に通常見られる自釘穴についての確認はできなかった。

刀子は銹化が著しく、やっと刀子と判定できる程度の遺存で全形は不明である。現存長8.7cm、刃部長6.8cm程度の小形品である。刃部断面は二等辺三角形、茎断面は長方形を呈するつくりである。

ガラス製小玉は剣の鉄錆に付着して検出され、破砕片となって図示できないが、前期古墳に通常見られる青色をした推量約4mm、同厚さ約2mmの小粒のものである。

やや歪をみせるが平面形は円、側面形は太鼓胴を思わせるものである。



第99図 第7号墳出土鉄器実測図

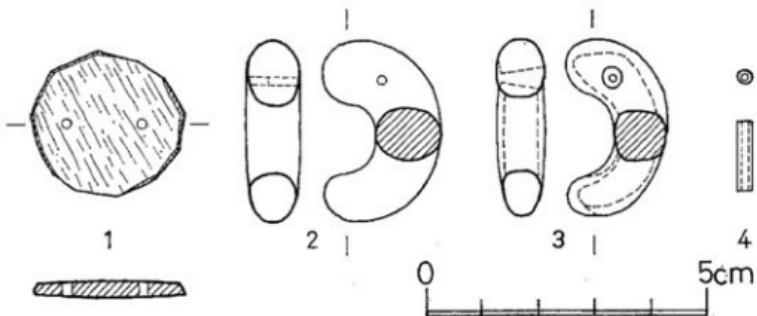
2. 石積み遺構出土玉類（図100、図版75）

緑泥片岩製双孔円板、瑪瑙製勾玉、碧玉製勾玉、碧玉製管玉各1の計4点の出土である。いずれも石積み遺構の下部から遊離した状態で発見された。

緑泥片岩製双孔円板は長径2.7cm、短径2.4cm、厚さ0.28cmのやや歪みをもった楕円形を呈する薄い板状の円板で、両面にすり痕を残す。長軸中心線上に1.55cmの間隔をもって、直径0.15cmの2個の内孔があけられたものである。鏡の石製模造品とする説もあるが、その実際は不明である。岡山県總社市隋庵古墳出土のものと類似するが、岡山市高島祭祀遺跡などからも出土が知られている。

碧玉製勾玉は均整のとれた丸みをもったC字形勾玉である。青灰色を呈しよく研磨されに近い光沢を有するが皮に近い部分と思われ、顕微鏡観察によると、石材中に気泡が多く軟質である。器高3.18cm、巾2.05cm、頭部厚0.92cm、尾部厚0.89cmを測る。貫孔は一方からなされ、径は上下とも0.15cmと一定である。瑪瑙製勾玉はC字形を呈するがやや横長の感じである。したがって全体のつくりが少し細長く見える。いわゆる瑪瑙色を呈し光沢をもつ。紐とおしの貫孔はC字形において逆方向からなされているが、裏側からの迎え打ちが見られる。器高3.1cm、巾1.8cm、頭部厚0.8cm、底部厚0.9cm、尾部厚0.7cm、貫孔径0.3cmを測る。

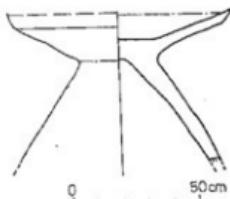
碧玉製管玉は、乳青色を呈するもので、器高1.22cm、直径0.22cmの細身小形のものである。貫孔は一方からなされ、径は0.1cmである。



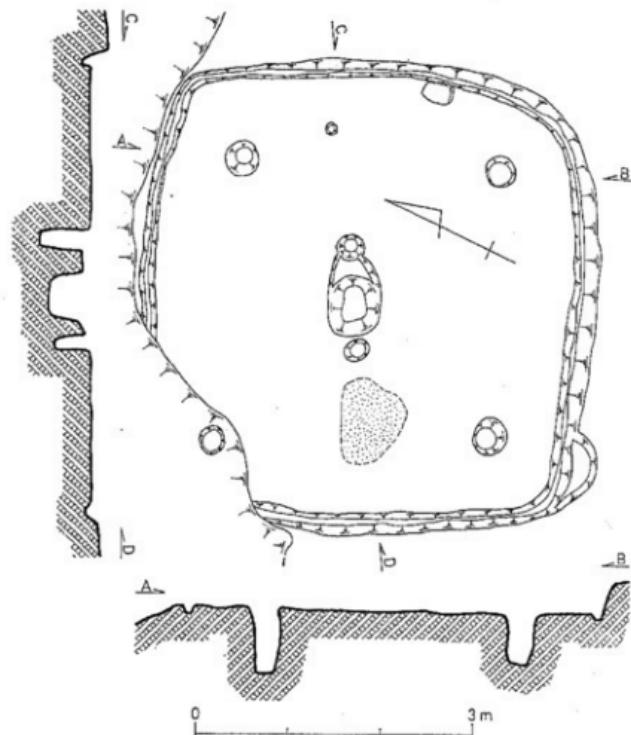
第100図 第7号墳石積み遺構出土玉類

第6章 その他の遺構遺物

本古墳の周辺には先にも何回かふれてきたが、弥生時代集落址および平安時代窯址が所在していた。これらについては別に稿を改めて報告する予定であるが、本古墳墳頂北方約9mに営なまれた竪穴式住居址は、墳外石積み遺構と同一立地に複合していた関係もあるため、その測量図を参考までに付記する。この住居址は5.03m×4.9m、深さ0.36cmの隅丸方形4本柱のものであるが、火災にあっ



第101図 第5土壙出土土器



第102図 第7号墳墳外発見堅穴式住居址

て燃え落ちたらしく、床面に炭化木材が多く遺存していた。住居並内および本古墳周辺部からは、弥生時代中期終末の土器片のほか、磨製鉈石斧1、サヌカイト製打製石錠9、サヌカイト剣片などが発見されている。なお境外第5土塙埋土中出土の高坏1点は、本墓群との関連性も考えられるので図示する。

第7章 築成年代

本古墳も築成年代を知る大きな手がかりとなる、伴出遺物が少ないと明確には規定できない。丘陵尾根を切って墳域を画した方墳立地、葬石の形状、中心主体の構造、劍の出土など、また支脈上に立地する類似古墳の第8号墳、第11号墳などを総合して、一応5世紀代、それも尾根主軸に所在する主系列より後出の、前期後半の所産と推定される。墳外石積み遺構の玉類は、本古墳築成よりも若干後出の可能性もある。

第8章 まとめ

1. 本古墳は、丘陵尾根主脈から分出した小尾根支脈突端部に立地する $16m \times 14m$ 、高さ約1.5mの規模をもつ截頭角錐形の方墳である。
2. 墳丘の築成は、丘陵尾根の自然地形の僅かな高まりを利用して、削平整地面をつくり、両端丘陵尾根部を掘りおろすことによって、墳丘の高さと幅員を増大させ、その土を削平整地面の上に巻き返して、高さ約1mを盛りあげて整形させたものである。
3. 外部施設は、墳裾部にのみ葺石を施しているが、丘陵谷斜面に面する東西両側部では、封土とともに流失が考えられ、詳細は不明である。
4. 内部主体は、墳頂中央部に尾根主軸と直交して、現表土下約60cmの墳丘盛り土中に掘り込まれた長さ4m、巾1.6mの長方形墓構内に納められた長さ3.3m、巾0.5mの平底形木棺の中心主体の他、墳外丘陵尾根上に6基の土塚墓が検出された。しかし墳外各土塚墓と本古墳との直接的な関係は明確にできなかった。
5. 本古墳の副葬遺物はきわめて簡素である。中心主体発見の劍、刀子、ガラス小玉各1の計3点のみである。
6. 本古墳の墳外約9mの丘陵尾根平坦面に、 $1m \times 2m$ の範囲の石積み遺構があり、その間に緑泥片岩製双孔円板1、勾玉2、管玉1の玉類4点が発見され注目された。本古墳との直接的な関係は不明であるが、墳外祭祀の可能性も考えられるのである。
7. 本古墳の築成年代についても、明確にすることはできなかった。立地、形状、埋葬主体等の特徴から、前期後半の所産と推定される程度である。

註

- 1) 新宅山遺跡、報告書未刊、本調査概報第6集に集録の予定
- 2) 三藏塙遺跡、報告書未刊、本調査概報第6集に集録の予定
- 3) 錦木義昌他「隨庵古墳」総社市教育委員会、1968年

用木古墳群第8号墳

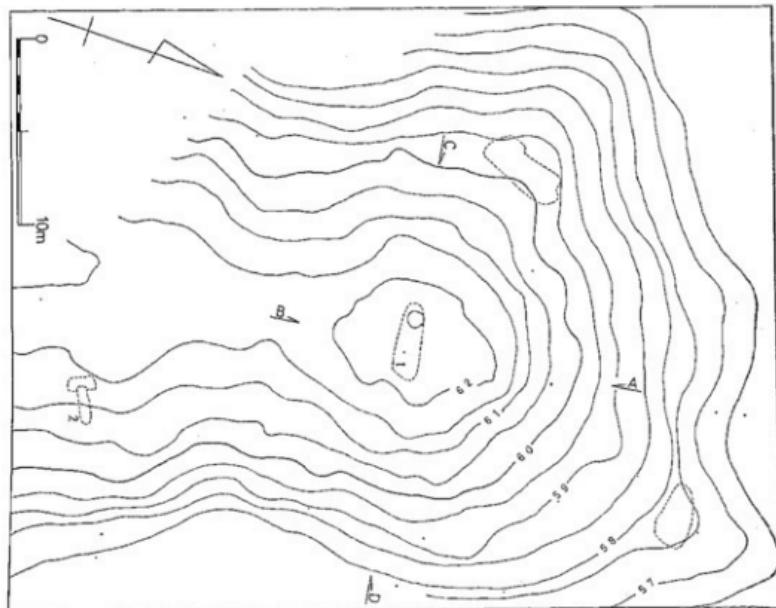
第1章 序 説

用木古墳群第8号墳（略記号A8）は、岡山県赤磐郡山陽町河本字野山65番地の、丘陵尾根支脈の突端に所在する小円墳である。

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業にともない、用木古墳群15基とともに発掘調査の対象とされ、昭和45年7月22日から同年8月31日までをかけて、山陽町教育委員会が発掘調査を実施した。発掘調査は用木古墳群全城にわたる一括継続調査のため、本古墳調査の前半は第4号墳、後半は第11号墳の発掘調査と一時重複した。さらに本古墳および周辺丘陵上で、弥生式土器片が散見され構確認のトレンチ試掘を実施した結果、第9・10・14号墳が新たに発見され、同時に併行しての発掘調査となつた。そのため本古墳の調査期間は、規模の割りには長期におよんだのである。

本古墳は発掘調査終了後の昭和47年3月31日、住宅団地造成工事によってその基盤である丘陵もろとも削平整地され、永遠にその姿を消し去つた。

第2章 立地と調査前の概況

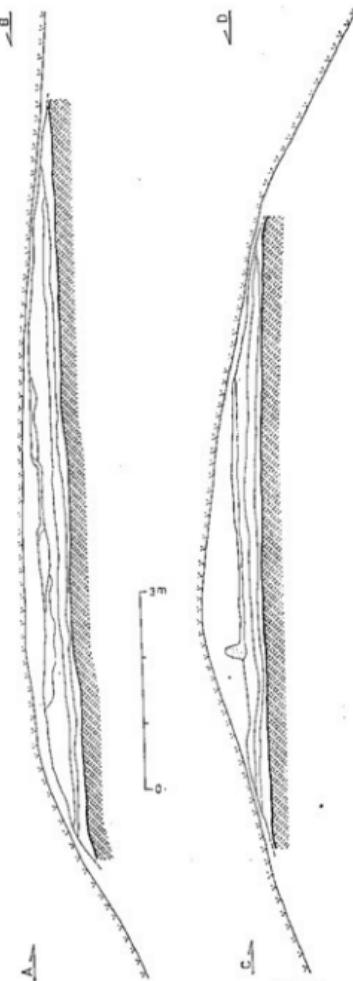


第103図 第8号墳外形図

用木山頂から北東に向て、緩やかな起伏をもつて下降してのびる、丘陵尾根主脈上に立地する第2号墳と第3号墳の中間付近、標高80mのあたりから北に向て分出する小尾根支脈が形成されている。本古墳はその谷水田に面して張り出した尾根支脈の突端部に所在する。そこは標高62m、眼下の谷水田との比高は約30mで、谷水田全域とその北方に広がる埋積平地の耕地を、眺望できる立地を占めている。

本古墳は地形的に用木古墳群16基として、まとまりをもった一群を構成しているが、同時にまた中池を含む谷水田を取り囲むように谷に向て張り出した丘陵支脈の突端に点在する用木第7・11号墳、野山第13号墳、四辻第6・7号墳、使木山古墳群などと共に、ほぼ同巧同大の規模と立地をもって、相対応する位置を占めているのである（図2）。

本古墳は丘陵尾根支脈突端の自然地形の高まりを利用して、若干の削平整形と埴丘盛り土を施した程度の築成と推察される。埴丘も自然地形の隆起部に近い形状を示し、埴端部も判然としないため、当初の分布調査では松林が繁って見とおしきかないこともある。古墳とは気づかなかったほどである。立木を伐採した後の外形測量時の観察では、尾根部に接する埴端部に削平整形を施した痕跡のはかは、葺石や埴輪などの外部施設は何も検出されなかった。埴端内に盗掘痕もなく、等高線に若干の乱れをみせる程度で、ほぼ原況に近い未掘墳と推定された。現況での径約14m、埴高約2mの小円墳と推定された（図103、図版50）。



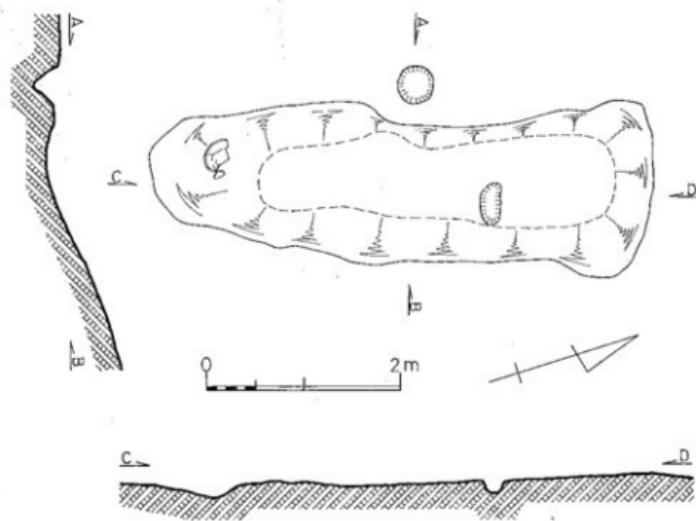
第104図 第8号墳埴丘断面図

第3章 外形と外部施設

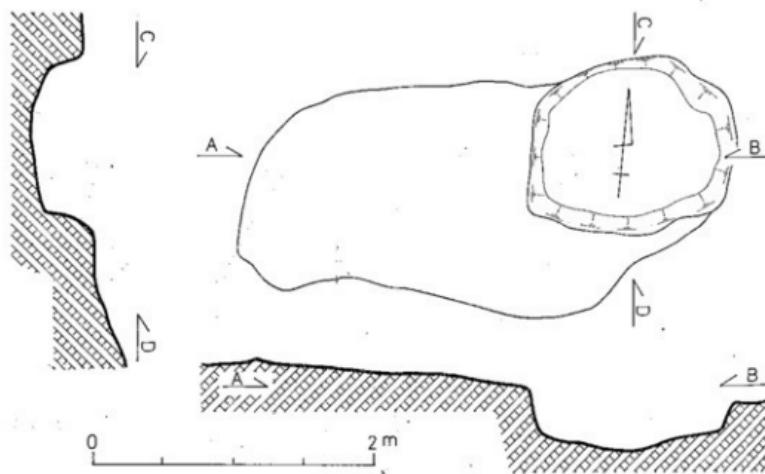
発掘調査の結果、本古墳の外形は発掘前の予想どおり、葺石および埴輪等の外部施設をもたない小円墳であった。

丘陵尾根支脈突端が僅かに隆起をみせ、そこからさらに小支脈を分出して谷に面もうとする肩部

の、自然地形の高まりと尾根巾の広がりを利用して構成されている。墳丘の断面観察（図 104）によれば、本古墳の構造は封土を盛る前に、尾根主軸に沿って長径をもつ $11.2m \times 9.4m$ の、整然と



第105図 第8号墳西墳端溝部実測図



第106図 第8号墳北墳端溝部実測図

した梢円形の水平面を削平整地して、これを基準として墳丘の盛り上と整形がなされている。封土の盛りあげは現墳頂部で約1mである。

地形の高い南尾根と接する墳端は、尾根主軸と直交する形で削平されているが、周辺状の溝とはならず、尾根部に小規模な平坦面をつくりだす形となっている。また地形の低い北と西の尾根の墳斜面と墳端部では、墳形に合せて突出部を削り落して整形し、墳端外方には、小規模の浅い構造溝を残す程度の段状部となっている(図105, 106, 図版53)。先の調査略報において、この溝状造溝底を誤認して、境外墓地として報告しているが、ここで改めて訂正したい。本古墳の墳端は、立地する地形的制約のため、高さは一定でない。現墳頂との比高は南墳端約1m、北墳端3.5m、西墳端2.6m、見せかけの平均高で約2.5mを測る。

以上を総合して本古墳の規模と外形をまとめると、本古墳は、尾根主軸に沿って長径をもつ22m×18mの梢円形プランの円墳で、墳高は約2.5m、主軸方位は北9度西を示す。

第4章 埋葬施設

本古墳の埋葬施設は、墳頂中央部の中心主体のみである。他に境外南方約10mの尾根上に土塚墓1基が発見されたが、後述の第9・10号墳等の例もあり、本古墳とは別個の独立した埋葬主体とも考えられるが、近在しているため、ここで取りあげ記述することにした。

1. 中心主体(図107, 図版52)

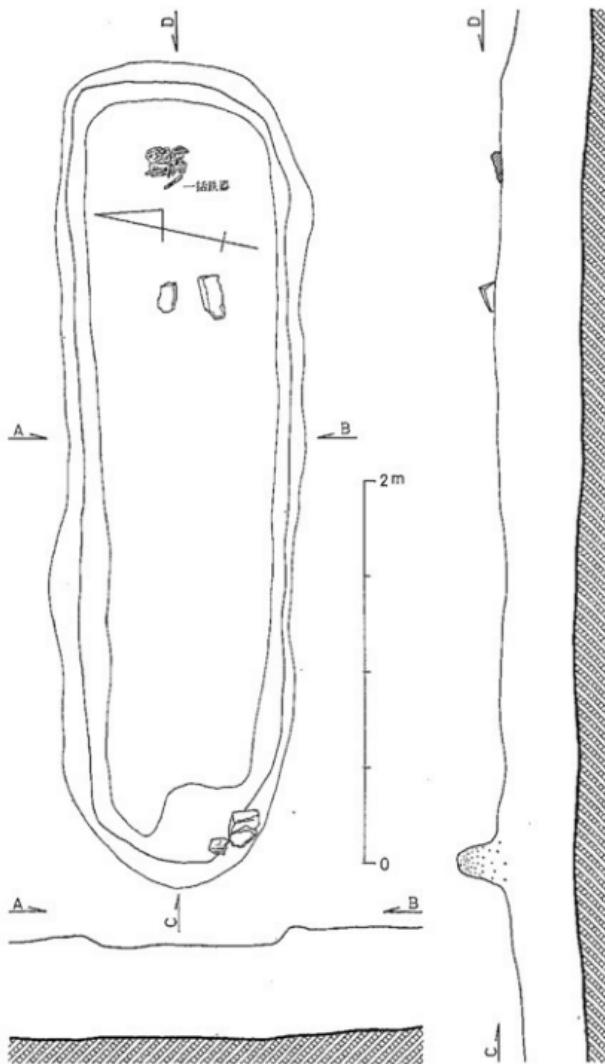
墳頂中央部に尾根主軸に直交して埋葬されている、木棺直葬の内部主体である。現墳頂下約60cmの墳丘盛り土層内に、赤色顔料の検出によって床面が直接発見された。墓壙の掘り込み線は、平面掘りさげ中もまた墳丘断面にも検出することができなかった。

主体床面は、僅かに遺存する赤色顔料の広がりと1対の枕石の存在から、それと確認できる程度である。床面はほぼ水平な面を保ち、そのまわりを僅かな高まりをもった土手状に固められ、部分的に青白色の粗雑粘土が用いられていた。なかでも床面西小口部には、高さ巾とも約20cmの青白色粘土が、棺小口部を囲むように盛られていた。床面の形状は長梢円形を呈し、棺側隆起帯を含む全長4.3m、同巾1.28m、床水平面長3.84m、同東小口巾0.98m、西小口巾0.76m、平均巾0.9mと東小口がやや広い。棺床面の長軸中心線は北79度東を示す。床面長軸中心線上の東小口から約1mの床上に、花崗岩割り石2個を用いた枕石1対が置かれ、その東約70cmの床上に鉄斧や鉄鎌など括鉄器5個体分が剖露されていた。

本主体床面は、墳丘築成前の地山削平整地面上方約47cmの墳丘盛り土層の中にある。墳丘断面観察では、主体床面の高さまでは、水平位を保って段状に順次盛りあげられ、主体床面とはほぼ同じ高さで一時中断されて、整地された痕跡をとどめ、主体上方は一気に地山マサ土をもって墳頂部まで盛りあげ、整形をして完成させている。主体上方の封土内には墓壙掘り込み線等は認められず、本古墳築造の過程での埋葬が考えられるのである。

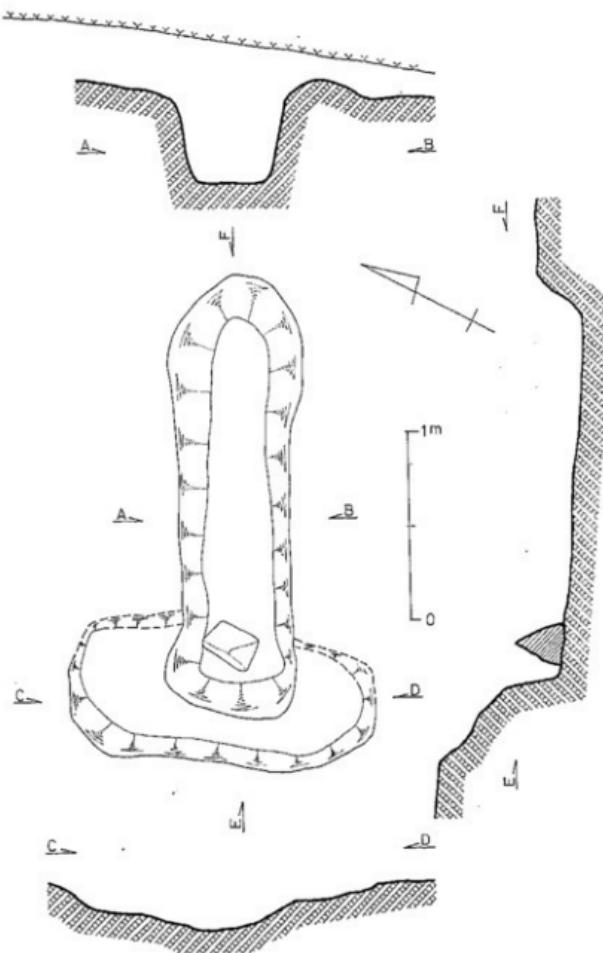
2. 境外土塚墓(図108, 図版53)

本古墳の南墳端が丘陵尾根に接する部分から、さらに南約10mの丘陵上に所在する土塚墓であ



第107図 第8号墳中心主体実測図

る。そこは尾根稜線から東へ約6m寄った、東面する谷斜面に臨む肩部の緩傾地である。本土墳は等高線に平行する浅い小土塁と、それと直交する土塁の二つが、T字形に切り合った形で検出され、2土塁の切り合い複合の可能性もある。しかし等高線と平行する土塁は、掘り込みも浅く床面



第108図 第8号墳 墓外土壌実測図

も不整然で、等高線に直交する土壌が傾斜面に位置するため、それとの均衡上地形の高い西小口部を削平整地した跡とも考えられる。

浅い床面の土壌は、掘り方上端の確認できる現地山上端長163cm、同巾76cm、床面長150cm、同巾60cm、深さは最深部で20cmを測る。土壌平面形は橢円形を呈すが、床面は不整然で安定しない。長軸中心線の方位は南20度東を示す。

深い床面の土壤は整然とした剛丸長方形のプランを呈し、掘り込みの角度も垂直に近く、床面もほぼ水平な面を保つ。長軸中心線の方位は北83度東を示し、掘り込み上端の長さ222cm、同巾60cm、床面長193cm、同巾は平均35cm、東小口巾30cm、西小口巾43cmと地形の高い西小口の方が広い。西小口墓域内に後から落ち込んだ形状で、24cm×25cm×18cm大の花崗岩山礫が1個検出された他は、赤色顔料や供獻遺物等は何も検出されなかった。したがって本土旗の築成年代をはじめ、本古墳との直接的ななかかわりはすべて不明である。

第5章 出土遺物

本古墳の副葬遺物は、中心主体発見の一括鉄器5点のみである。ほかに墳丘および周辺丘陵で遊離検出された弥生式土器片が若干あるが、いずれも細片で計測困難化も困難である。いずれ稿を改めて隣接して所在する弥生時代集落址・用木山遺跡の報告の際言及する予定である。中心主体鉄器についてだけ記述したい（図109、図版75）。

鉄器類は中心主体東小口に近い床面に一括供獻されていた鉄斧、劍、刀子、尖根式鐵鎌、平根式鐵鎌各1の計5点である。

鉄斧は鋒化はしているがほぼ原形をとどめている。鑄は左右からつき合せているが、袋とならず上面で僅かの隙間をもっている。平面形は胸郭のくびれた鼓形、頭部断面は楕円形、刃部は外ふくらみの円弧状となっているが、裏面中央に透しのある片刃である。全長10.25cm、刃巾5.7cm、頭部巾5.35cm、頭部厚3.0cm、斧身部厚平均1.2cmを測る。

劍は鋒化が著しく3片に折損した刃部のみの検出である。現存長11.3cm、刃部巾2.6cm、同厚0.6cmを測る。中央に鈎を有し、断面菱形で両刃、鍛造によるつくりであることから劍と確認できる程度の遺存で、詳細は不明である。

刀子も鋒化が著しく一部分のみの遺存である。現存長7.8cm、刃部巾1.55cm、同厚0.3cmを測るが、かなりやせていて原寸ではない。茎部が一部残存し断面形が二等辺三角形を示すことから、刀子と確認できる程度である。

尖根式鐵鎌は、鋒化して4片に折損し、矢先部を欠失しているが、ほぼ原況に近い遺存である。現存長15.4cmを測るが元16cm内外のものであろう。矢部は鋭く尖り細身のものであるが鋒化欠損のため、かえりの有無等については不明である。現状での刃巾0.8cm、同厚0.4cmである。柄は断面が正方形に近い棒鉄で、基部のみがやや細まる。柄部巾0.6cm、同厚0.45cmである。

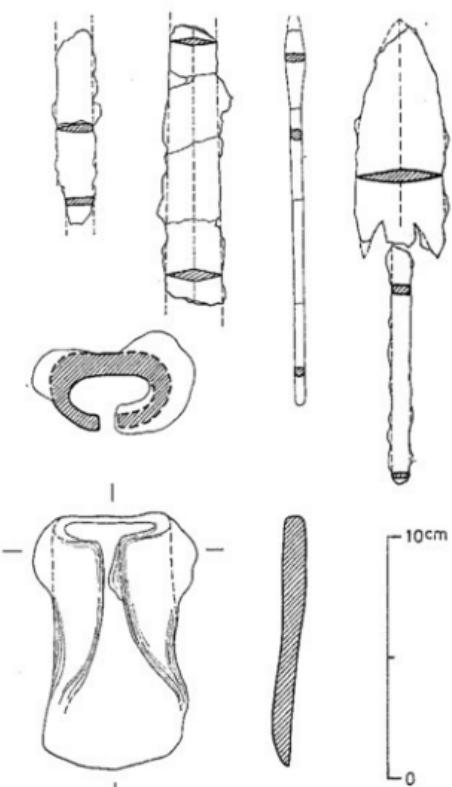
平根式鐵鎌も鋒化して折損はしているが、ほぼ原況をとどめている。巾広大形の鐵鎌である。刃部先尖はやや丸みをもった二等辺三角形状を呈し、基部は左右対称にかえりをもつ。刃部中央に鈎は認められないが、その断面は菱形に近い凸レンズ状を呈する。現存全長18.7cm、刃部長8cm、柄部長10.7cm、刃部最広部巾3.8cm、同厚さ0.7cm、柄部刃端巾1.1cm、同基部巾0.75cm、同厚さ0.4cmを測る。柄部は断面長方形の板鉄であるが、巾は基部に近づくにつれて漸移的に狭まる形を示す。

第6章 築成の年代

本古墳の築成年代を知る大きな手がかりとなる伴出遺物も少なく、明確にすることはできないが、同様立地に所在する隣接の第7号墳および第11号墳等の対比、内部主体の構造、副葬遺物に劍を有することなどから、前期古墳、それも5世紀代の所産と推定される。

第7章 まとめ

1. 本古墳は谷水田を臨む丘陵尾根支脈の突端部に立地する小円墳である。
2. 墳丘の築成は自然地形の高まりを利用して、若干の削平整形と封土の盛りあげを施すことによって構築されている。地山削平整地面と、現墳頂との盛り土高は約1mである。
3. 本古墳の規模は、墳端高が一定でないため正確には計測できないが、長径22m、短径18mの椭円形プランの円墳で、平均高2.5mを測る。なお葺石や埴輪等の外部施設はともなわない。
4. 内部主体は、墳頂中央に尾根主軸に直交する、木棺直葬の主体1基である。粘土質の床面に枕石1対と若干の赤色顔料を遺存する。副葬品は鉄斧など一括供獻された鉄器類5点である。
5. 中心主体床面は、墳丘盛り土層中におきその上方に基壙掘り込み線を検出できない。墳丘築成の過程での埋葬が考えられる。
6. 本古墳の築成年代は、伴出遺物が少なく明確でないが、前期古墳それも5世紀代の所産と考えられる。



第109図 第8号墳出土鉄器実測図

用木古墳群第9・10・14号墳

第1章 序 説

用木古墳群は、16基の古墳で構成される古墳群であるが、当初からすべての古墳が確認されていなかったわけではない。岡山県営山陽新住宅市街地開発事業の計画段階の分布調査では、当該地はまだ立木も繁り見通しもきかないこともあって、尾根主脈上に所在する第1号墳から第6号墳までの、6基の古墳を確認していたに過ぎない。その後立木が伐採され丘陵地が裸となつた時点で、尾根支脈上に第7号墳と第8号墳が発見され、そのほかにも古墳らしい隆起部が何か所か指摘された。また丘陵表面に弥生式土器片および土師器片が散見され、古墳以外の遺跡が存在する可能性も強くなつた。そのため用木古墳群の発掘調査を実施するにあたつて、周辺丘陵上全域にトレンチまたはグリットを設けて、関連遺跡の探査を試みることにした。ここに報告する用木古墳群第9・10・14号墳も、こうしたトレンチ調査の結果、新たに発見されたのである。

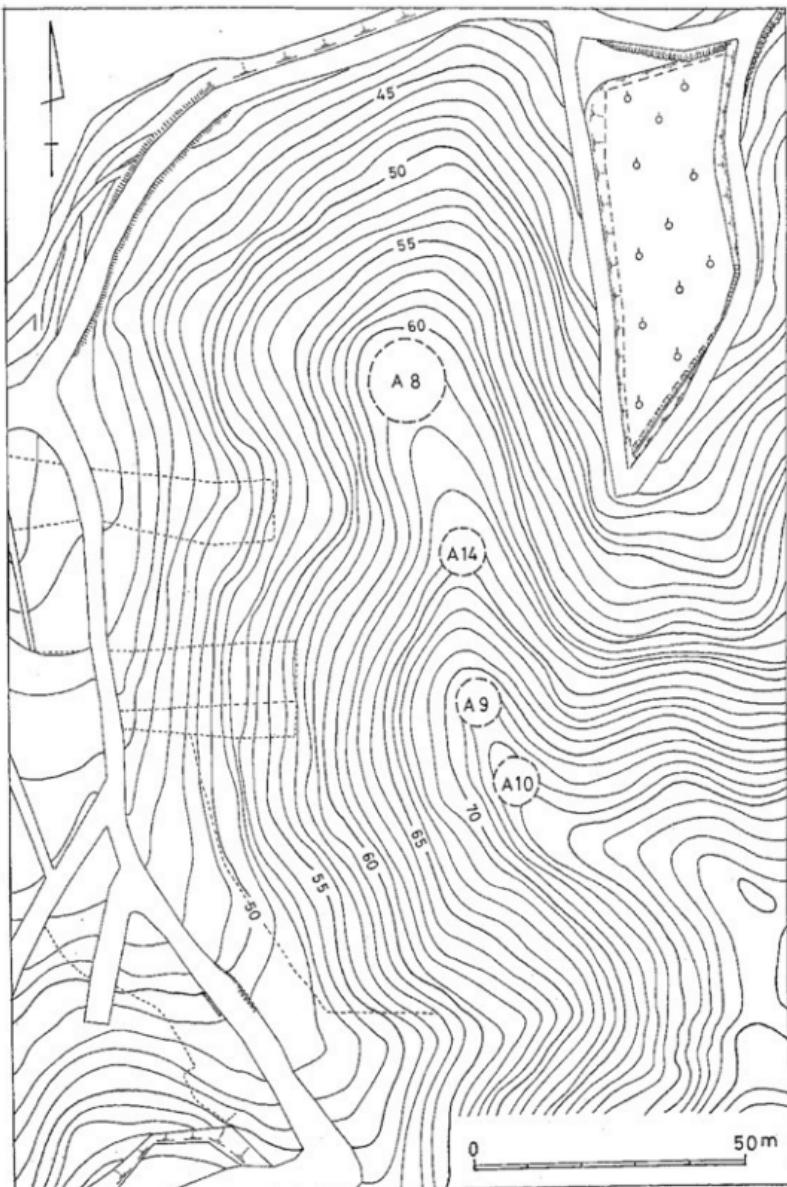
昭和44年12月、第3号墳の発掘調査に併行して、隣接した第8号墳の立地する丘陵支脈の稜線に、トレンチ調査を実施した結果、封土を全く流失しているものの、土壙墓を主体とした第9・10・14号墳が発見されたのである。直ちに発見届を県教育委員会ならびに工事主体者である県土木部に提出し、保存協議にかけられたが、発掘調査の対象となり、山崩地埋蔵文化財発掘調査第2次委託契約に含められ、第8号墳の発掘調査と併行して、昭和45年7月23日から同年8月18日までをかけて、発掘調査を実施した。なお本古墳3基も、発掘調査終了後の昭和47年3月31日、住宅団地造成工事によって削平整地され、第8号墳などと共に消滅したのである。

第2章 立地と調査概況

用木山頂から北東に向って、緩やかに下降してのびる丘陵尾根主脈上に立地する、用木第2号墳と第3号墳の中間付近、標高80mあたりから北方の谷水田に向けて分岐する、丘陵尾根支脈が形成されている。この尾根支脈は稜線の幅員も殆んど認められないほどの、やせ細った馬の背尾根で、長さも180mと小規模であるが、その突端には第8号墳が立地している。

尾根支脈の分岐点から第8号墳の立地するところまでの、尾根稜線上約120mに巾1mのトレンチ試掘を行なった結果、封土を流失した土壙墓主体3グループが発見された。各中心間距離で、尾根支脈分岐点稜線の西北西約50mの標高74mに第10号墳、そこから北北西約15mの標高71mに第9号墳、第9号墳の北方約26mの標高64mに第14号墳がある。そしてさらに北方30mの標高61mの尾根支脈突端に第8号墳が所在するのである（図110）。

いずれも表面観察では全く認知することができず、トレンチ調査の結果、丘陵尾根の地山に直接掘り込まれた土壙の検出によって、はじめてその存在を知つたのである。外見上の墳丘は全く認められず、したがつて外部施設の有無についても不明である。周辺古墳に多く見受けられる、尾根に



第110図 第9, 10, 14号填周辺地形図

直交する溝状造構の検出に努めたが、第10号墳の南東尾根、主体掘り込みから約4mにそれらしい痕跡が僅かに認められるのみで、確信できるほどではなかった。もともと墳丘をもたない墓群かも知れないが、谷斜面が急なやせた尾根で、現状での表土層の深さ10cm内外の状況から、こうした墳丘封土の流失も考えられるのである。墳丘封土を有する古墳と仮定した場合は、第10号墳の溝の痕跡および、第9号墳と第10号墳の墳頂距離15m等を考慮して、径約10m前後（あるいは1辺）の低平な円墳もしくは方墳であったろうと推察される。

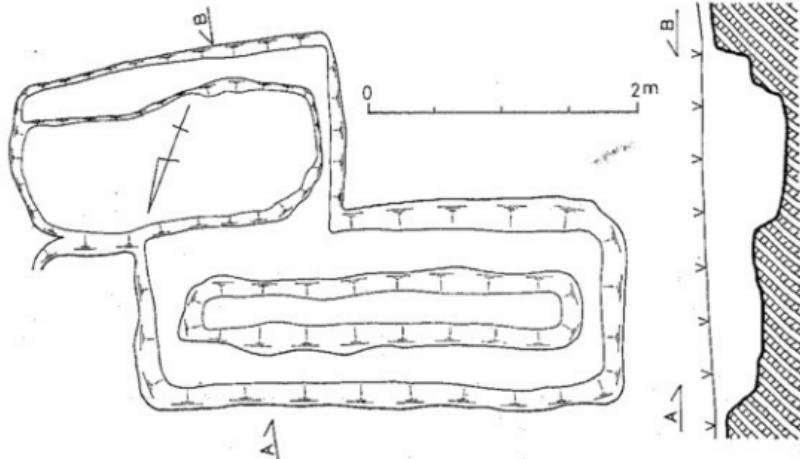
第3章 用木 第9号墳

尾根主脈分岐点から北西へ約65mの巾狭な尾根支脈上に、尾根主軸に直交して掘られた2基の土塙墓が、その一部を切り合った形で並存する。尾根主軸に中心を置く大形土塙墓を第1主体、その南にあって東小口を約1m東方に置く小形土塙を第2主体とした。いずれも丘陵地山に直接掘り込んだ素掘りの土塙墓で、掘り込みの確認できる現地山生き土上端は現地表下約10cmである。現在は封土等は全く認められず、したがって蓋石や埴輪等の外部施設の有無も不明である（図111、図版54）。

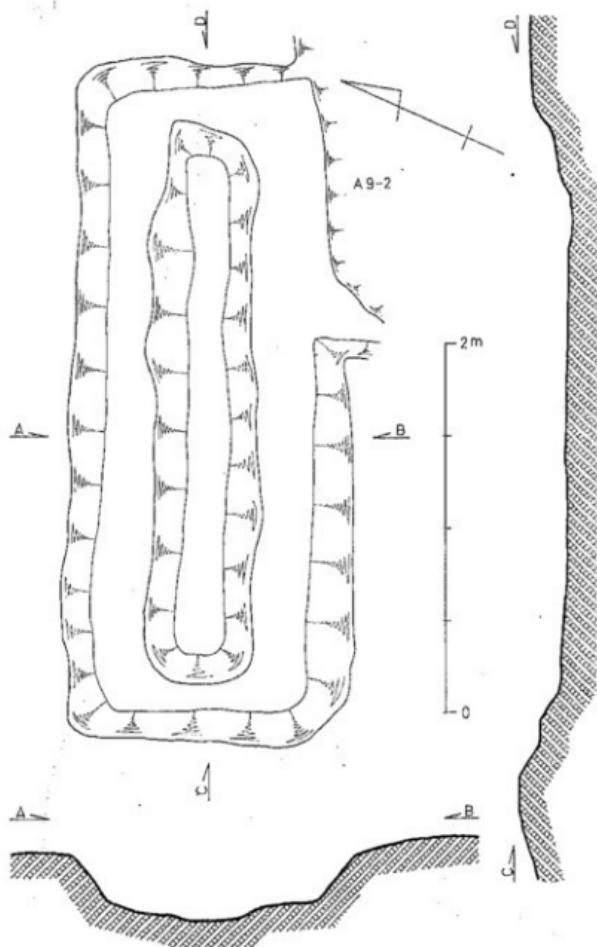
1. 第1主体（図112、図版55）

尾根主軸線上に中心を置いてそれと直交して掘られ、長軸中心線の方位は北67度東を示す。東小口から約1.9mの南東側壁部を第2主体によって切られている。

土塙は比較的整然とした隅丸長方形に掘られているが、底面中央に溝状の二重掘り込みを有し、そのまわりに棚状の段をもつ。底面の長軸方向はほぼ水平であるが、横断面は上向きの円弧状を示す。土塙掘り込みの確認できる現存地山生き土上面プランでは東小口155cm、西小口140cmと東がや



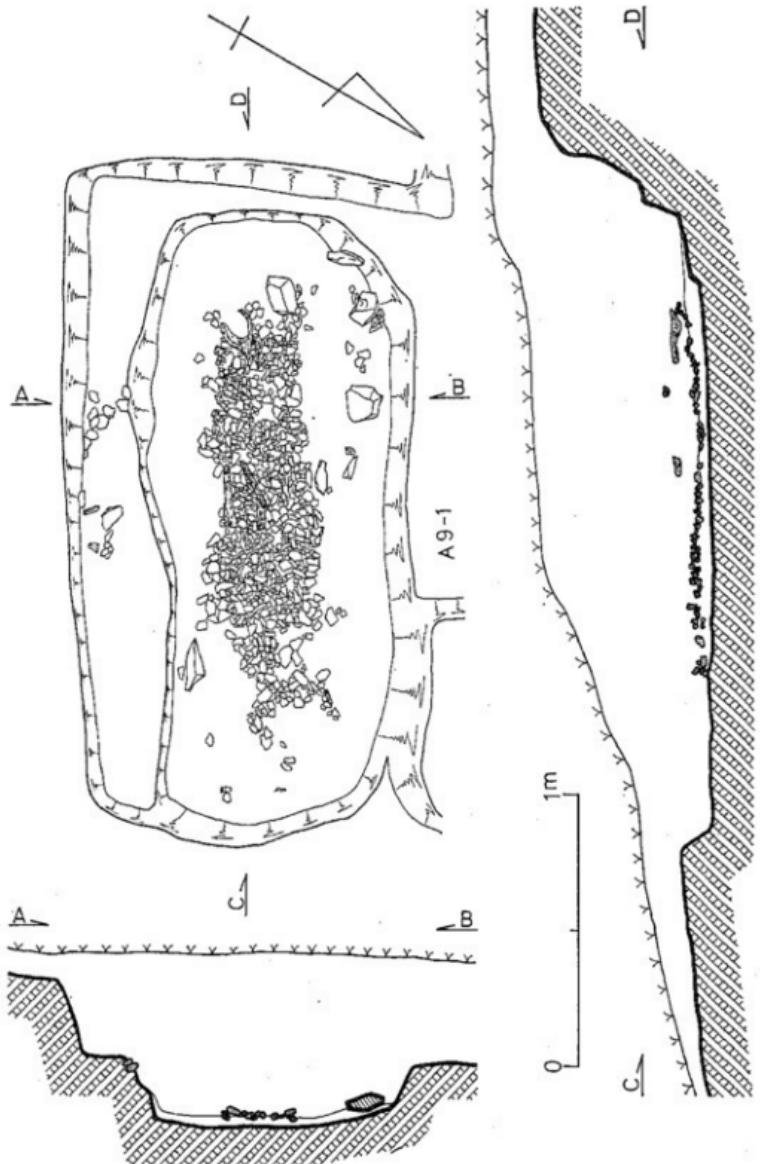
第111図 第9号墳第1、2主体出土状況図



第112図 第9号墳第1主体実測図

や広い。段状部床面長 336cm, 同平均巾 112cm, 二重掘り方上端の長さ 304cm, 同平均巾 56cm, 底面長 270cm, 同平均巾 24cm, 棚部巾は平均 30cm, 掘り込みの平均の深さは段状部まで 22cm, 中央部最深底で 34cm を測る。

墓壇内に枕石および赤色顔料の遺存等は何も認められない。墓壇東小口から 24cm, 長軸中心線から 22cm の段状部底から 12cm 上方の, 墓壇埋土中に鉄錆 1 点が遊離検出された。棺外供獻の副葬品と推定される。



第113図 第9号墳第2主体実測図

2. 第2主体(図115、国版55図)

第1主体の南に接して土壇側壁の一部を切るようにして並存する。第1主体より東方へ約1mずれて、尾根稜線に西小口を置いて位置するが、尾根巾が極めて狭いため傾斜地となっている。土壇は隅丸長方形を呈すが、地形の高い西と南は2段に掘られ、途中に棚状の平坦部をもつ。底面はほぼ平らな水平面を保ち、中央部に鶏卵大の円礫および花崗岩角礫を混じた礫床を長さ107cm、巾40cmの長方形に敷いている。

礫床西小口に下顎骨、ほぼ中央部に大腿骨の遺体と、下顎骨の下方にガラス小玉1個が検出され、その周辺には僅かではあるが赤色顔料の遺存が認められた。遺体は京都大学理学部池田次郎教授の御教示によれば、下顎骨には右第1・2大臼歯、左第1・2切歯が遺存し、咬耗が弱く第3臼歯が未萌出であることから壯年、大腿骨が頸丈であることから男性と推定されることがある。

また土壇埋土中および底面等に、花崗岩割り石若干数が遊離検出されたが、意図的なものかどうかは不明である。

土壇の規模は、掘り込みの確認できる現地山生き土上端長250cm、同巾132cm、段状部長235cm、同巾97cm、段平均巾約25cm、底面長223cm、同平均巾85cmで西小口がやや広い。掘り込みの深さは地形の高い西小口59cm、反対の東小口10cmと差が大きく、横断面は隣接の第1主体と段状部高を揃え、床面比高は地形の高い側の本主体の方が逆に15cmも低い。地山現存表土層の深さは平均15cm、主体長軸中心線の方位は北60度東である。

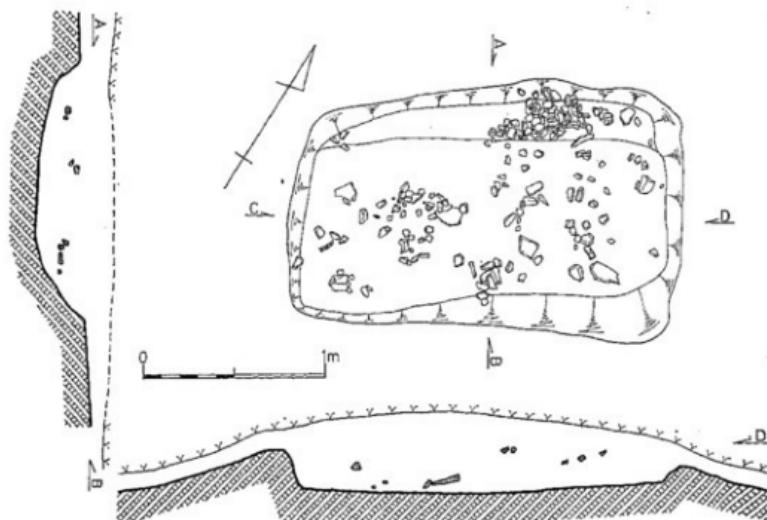
第4章 用木第10号墳

第9号墳の南南東約15m、標高73mの緩傾斜の尾根支脈上に、尾根稜線に直交して丘陵地山に直接掘り込まれた単独土壇である。封土等は全く検出されず、葬石や埴輪の外部施設も不明である(図114、国版56)。

尾根上を小規模ではあるが水平に削平整地して、その中央に隅丸長方形の上塙を掘っている。しかし尾根部は直交する土壇の長さ約2mの西小口外方が、直ぐ急斜面となるほど巾が狭く、現存表土層も約10cmと土壇墓の上部も含めて、かなりの風化流失が推察される。土壇墓の掘り込みはかなり整然とし、底面もほぼ水平な面を保ち、花崗岩角礫を用いた礫床が検出されるが、遊離散逸した形状を示す。礫床部の西小口に近い長軸中心線周辺に、鉄鎌、管玉、ガラス小玉各1の計3点が発見された。土壇墓規模は、掘り込みの確認できる現地山生き土上端長215cm、同平均巾127cm、床面長194cm、同巾82cm、掘り込みの深さ約20cm、現地表から床面最大深42cm、長軸中心線の方位は北57度東である。

第5章 用木第14号墳

第8号墳と第9号墳の丁度中央あたりの尾根上に、図示したように3基の土壇墓が隣接して所在する(図115)。かなりの傾斜地にあたるため、封土は流失して認められず墳形も定かでない。第



第114図 第10号墳土壇実測図

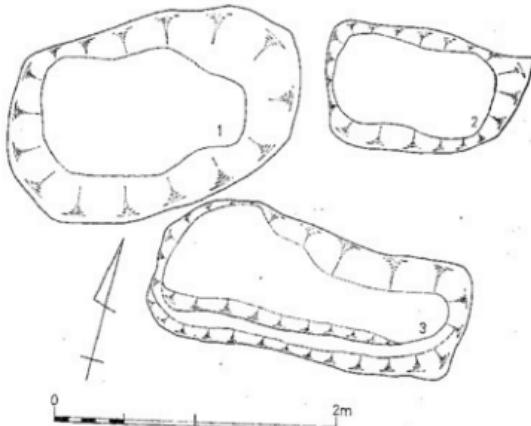
3 主体壇土中に数片の土師器小片が検出されたほかは、何も認められず築成年代についても不明である。

1. 第1主体(図116、図版57)

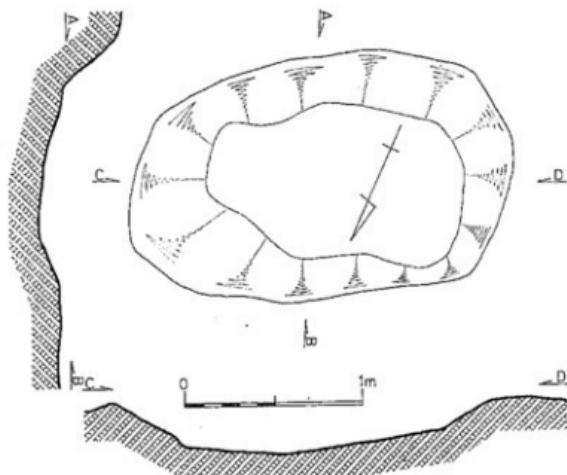
不整楕円形の素掘りの土壇墓である。掘り込みの上部は流失しているらしく浅い。底面も一定でない。現状での上端長214cm、同巾133cm、底面長143cm、同巾84cm、深さ22cm、長軸中心線の方位は北65度東を示す。

2. 第2主体(図117、図版58)

第1主体の東に接して並ぶ楕円形の小土壇墓で、地形の低い北側は底面の一部も含めて流失している。現状での掘



第115図 第14号墳土壇配置図

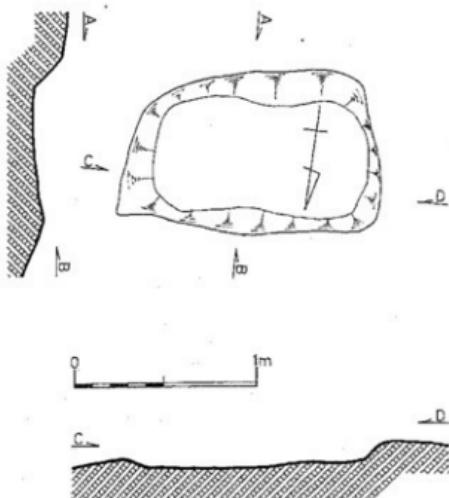


第116図 第14号墳第1土壇実測図

り込み上端長135cm, 同巾85cm, 底面長113cm, 同巾55cm, 深さ平均8cm, 長軸中心線の方位は北85度東を示す。

3. 第3主体(図119、図版58)

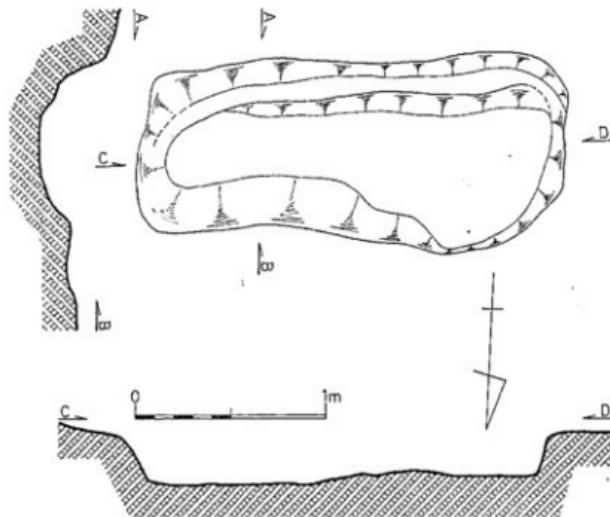
本土墳群中では最も整然とした卵円長方形の土壇墓である。底面は長軸線は水平、横断面は円弧状を呈する。地形の高い側の南は2段掘りとなり段をもつ。現況での上端長223cm, 同巾90cm, 底面長198cm, 同巾40cm, 長軸中心線の方位はほぼ東西である。土壇埋土中で発見された土器片は磨耗の著しい小片で、器形および年代とともに不明である。



第117図 第14号墳第2土壇実測図

第6章 出土遺物

第9号墳第1主体の鎌、第2主体ガラス小玉、第10号墳内部主体の鎌、管

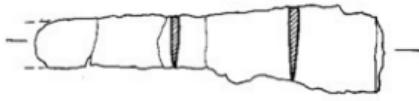


第118図 第14号墳第3主体実測図

玉、ガラス小玉各1の計5点である。年代や形式共に共通性をもつため一括して概述する。

1. 鉄鎌 (図119、図版75)

いずれも銹化が著しく正確な計測はできないが、巾2.2cm～2.4cm、厚さ0.3cm～0.4cmほどの薄い平板鉄の一端を折り曲げた鎌である。第9号墳鉄鎌は、少し内湾傾向をみせ、先端になるにつれてやや巾狭となり、断面は二等辺三角形を呈する。先端部を欠損しているが現存長13.2cmを測る。第10号墳鉄鎌は、長方形の鉄板で、断面も薄い長方形を呈し古式の形態を示す。先端部を折損しているが現存長9cmを測る。



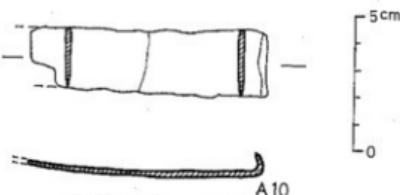
A9-2



A10

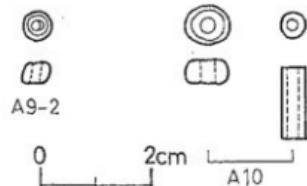
2. 玉類 (図120、図版76)

第9号墳第1主体のガラス製小玉は、青色で径0.52cm、高さ0.31cmの小粒。第10号墳のガラス製小玉は緑色で径0.7cm、高さ



第119図 第9、10号墳出土鐵器実測図

0.4cmである。風化が進み脆くなっているが、第5号墳出土のものと類似する材質である。ともに平面はやや歪円形、側面は太鼓胴形を呈する。管玉は薄緑色の碧玉製で、径0.45cm、高さ1.3cmと細目の小形品である。貫孔は一方からなされ、孔径は上下とも0.1cmを測る。手ずれによる磨耗痕を残す。



第120図 第9, 10号墳出土玉類

第7章 まとめ

1. 用木古墳群第9・10・14号墳は、尾根支脈稜線状に直列状に立地する、小規模墳である。
2. いずれも外見では封土を有しない。流失によるものか、あるいは当初から埴丘をもたないものかも不明である。したがって葺石等の外部施設についても不明である。
3. いずれも尾根主軸に直交して、直接丘陵地山生き土層に掘り込まれた土壙墓を内部主体とする。第9号墳2主体、第10号墳1主体、第14号墳3主体で構成される。なかでも第9号墳第2主体、第10号墳内部主体は共に碌床を有し、第9号墳第2主体に遺存する被葬者は壯年男性と推定された。
4. 各主体の副葬品はきわめて簡素である。第9号墳第1主体は鉄鏃1点、第2主体がガラス小玉1点、第10号墳鉄鏃、ガラス小玉、碧玉製管玉各1点、第14号墳は、副葬品は皆無である。
5. 本古墳の築成年代は明確ではないが、出土した鉄鏃の特徴等から推して、前期古墳としての可能性が強く、5世紀代の所産と考えられる。ただし、第14号墳については不明である。

用木古墳群第11号墳

第1章 序 説

用木古墳群第11号墳（略記号A11）は、岡山県赤磐郡山陽町河本字野山65番地の、丘陵尾根支脈上に所在する小規模な方墳である。岡山県営山陽新住宅市街地開発事業とともに、用木古墳群15基とともに発掘調査の対象とされ、山陽町教育委員会が、昭和45年8月8日から同年9月4日までをかけて発掘調査を実施した。しかし今次発掘調査は、用木古墳群全城にわたる継続調査のため、作業段取りの都合もあって、本古墳の発掘調査も第8号墳および第5号墳等の調査と、一時的には重複しての併行調査となった。本古墳は発掘調査終了後の昭和47年3月31日、住宅用地造成工事によって消滅した。

第2章 立地と調査前の概況

用木第4号墳が立地する丘陵主脈から、北に向けて分岐する尾根支脈がある。この小尾根支脈は当初はかなりの傾斜で下降するが、途中標高62mあたりで傾斜を緩め、尾根巾の狭い舌状となっている。本古墳はその舌状部稜線上に立地する。そこは谷水田に面して張り出した標高58m、谷部との比高約25mで谷水田全城と、その東北方に拓けた埋積平地を望見できる位置を占める。第4号墳の北約40mにあたるが、この尾根支脈の東西には、同規模の尾根支脈が約100mの距離をもって並列し、それぞれの尾根上に本古墳と同巧同大の規模と立地をもった第7号墳と第8号墳が、指呼の間に所在している。

当地は古墳も含めて尾根稜線を境界として土地所有者が異なり、その様相も違っていた。東半部は雑木林で自然地形を保つが、西半部は山麓から稜線部まで開墾されて果樹園となり、かなりの削平を受け原形を損なっていた。

果樹園表面に円筒埴輪片が散見され、地形の高い南墳端の尾根部に周溝状の溝の痕跡が認められることから古墳と推定した。しかし溝部埋積部と現墳頂部の比高差もなく、ほぼ平坦であり、開墾によって切り込まれた墳丘断面でも封土があり認められず、現況では古墳というよりも、自然地形に近い形状を示している。したがって、地形測量時の計測は墳端も判然としないため、長径12m、短径10m、墳高約1m程度の低平な円墳または方墳と推察した。外部施設として埴輪の存在は認められたものの、葺石その他については不明である。

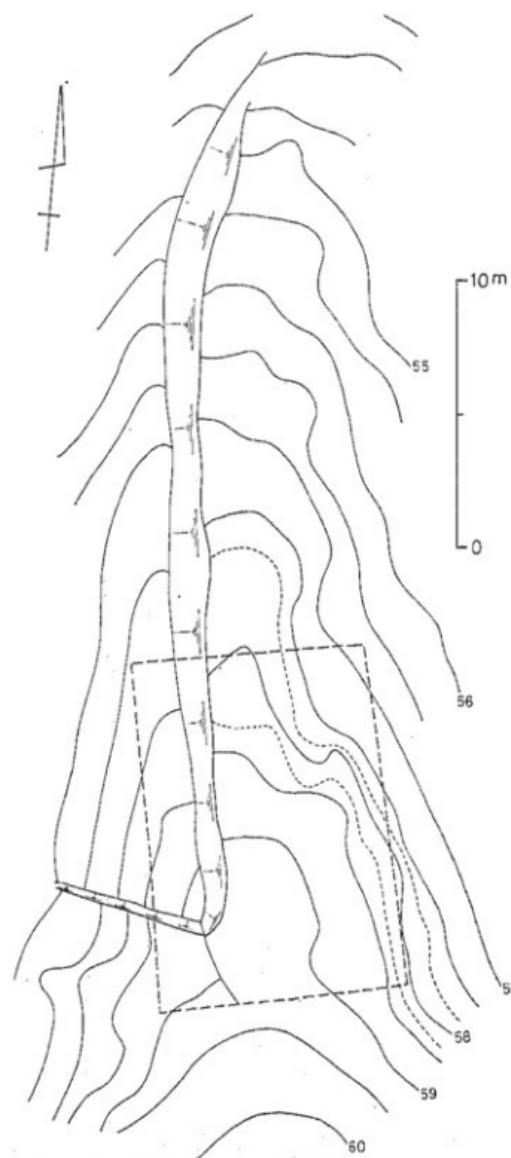
第3章 外形と外部施設

本古墳の外見は、発掘調査の結果方墳であった。地形の高い南墳端は尾根主軸に直交する深い切り通し溝を掘って、墳域を画するとともに、墳丘の高まりと幅員を増大させ、地形の低い北墳端は、墳斜面形に合せて尾根を削りおろして整形し、その外方に小テラス状の平坦部をつくりだして

いる。墳丘部は築成前の丘陵地形の削平整地などの施行は見られなかった。墳端溝部等の掘りあげ土を巻き返した程度の盛り土と、整形が施された程度の築成と考えられる（図122、図版59）。

南墳端部の溝は、掘り込みの確認できる現存地山生き土上面での巾3.5m、底面長約10m、地形の高い南丘陵尾根部の掘り込みは急で、深さ1.15m、平均深さ0.8mと墳丘規模に比べてかなり大がかりである。溝の縦方向の底面はほぼ水平、横断面は底部に約1m巾の平面をもつ上向きの合形を呈し、尾根主軸に直交した切り通し溝となっている。溝の墳丘斜面にあたる部分から溝底にかけて、埴輪片が上方より転落した形で遊離検出されたが、発見総数502片と少なく、その面積密度は粗いものと推察される（図版61）。埴輪のほか甃石の存在などについては認められなかつた。

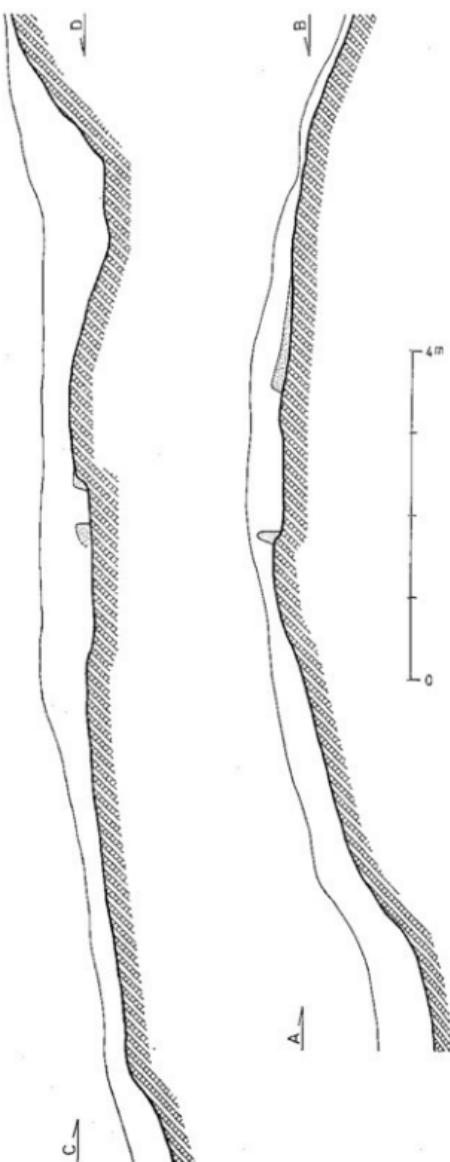
この溝遺構は、発掘調査前の状態では、やっとその存在を知ることがわかるほどまでに埋没し、現存墳頂比高は殆んどなく、自然地形の平坦地に近い形を示していた。ここは風化した花崗岩礫乱土層で形成され、流れやすい地質の



第121図 第11号墳調査前外形状図

うえ、傾斜をもった馬の背尾根である。そのため本古墳の封土も、流失とともに二次堆積の可能性も考えられるのである。したがって墳形も変容し原形をとどめず、墳端も判然としない。墳丘築成時の丘陵尾根削平部をもとに本古墳の規模を推定すると、尾根主軸に沿って長辺をもつ、 $13m \times 10m$ 、高さ 1.5m 程度の方墳となる。

発見された埴輪片はすべて小破片で、接合による復元も不可能で原全形を知ることはできない。また墳表土全面にわたる剝土調査を試みたが、原位置をとどめる基底部は、一ヵ所も検出できなかった。埴輪片はその形状やカーブから推定して、器高40cm、口縁部径25cm～30cm、基底部径15cm～20cm程度で、3条のタガをもつ通常に見られる小形の円筒埴輪が多いが、円筒状に立ちあがるものと、基底部から上方に外傾して立ちあがる2種類がある。また破片中に朝顔形埴輪および器種は不明ながら器材埴輪片1を含む。総体的に赤褐色の明るい焼成で、胎土に石英などの砂粒を多く含む。器底の貫孔は検出される限りではすべて円孔である。タガは下方第1段は不整形な張りつけとなるが、第2段以上は鋭い稜をもつ断面台形状をなすが、張りつけはさして強くない。器表の整形は基底部は縱方向への荒いへら削り、胸部は板目、口縁部は横方向へのなでおよび刷毛目調整が多い(図124)。当山陽団地内の径12m～18m

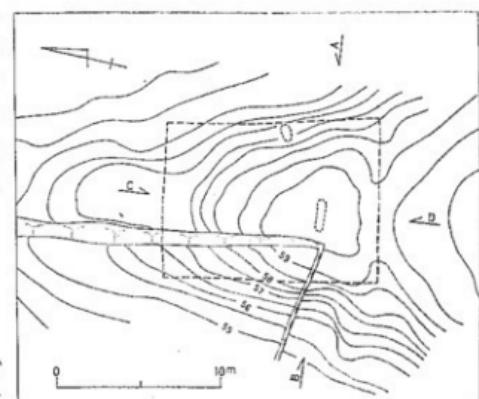


第122図 第11号墳 墳丘断面図

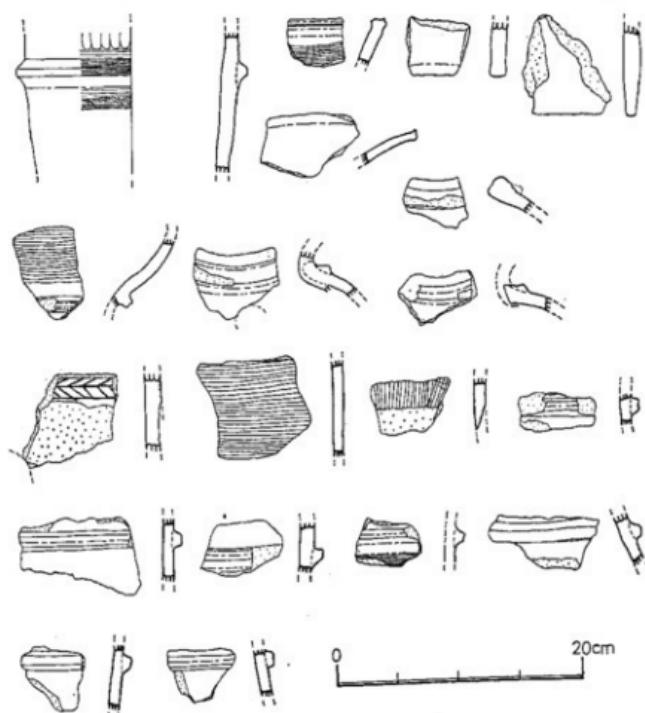
他の小形墳の中にこうした器材埴輪を含む多種の埴輪をもつ古墳が多いのである。便木山7号墳(帆立貝形), 宮山4号墳(方墳), 四辻1号墳(円墳)四辻5号墳(円墳), 岩田1号墳(円墳), 岩田3号墳(方墳)などがそれである。

第4章 埋葬施設

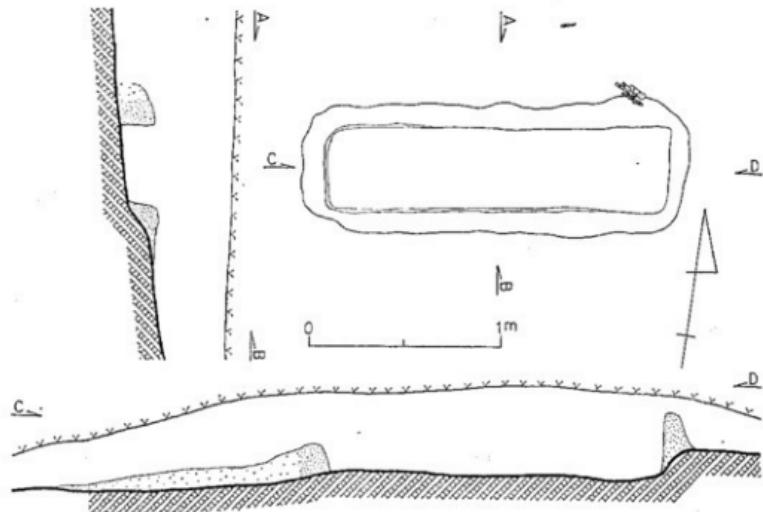
本古墳の埋葬施設は、墳頂部の中心主体のほか、東墳斜面で検出された土壙1基である。ただし斜面検出の土壙



第123図 第11号墳調査後外形図



第124図 第11号墳出土埴輪実測図



第125図 第11号墳中心主体実測図

は伴出遺物もなく、また形状も貯蔵穴状の形態を示すため、本古墳との直接的なかかわりは不明である。

1. 中心主体(図125、図版60)

墳頂部の長軸線上に直交して、南へ約1m片寄った、現表土下約50cmに主体床面を置く粘土帯である。墳頂中央部の埴丘下地山上面に東西1.7m、南北2.1mの長方形に掘りくぼめた削平整地面をつくり、本主体はその南半を占める形で位置している。

主体床面を直接地山削平面に置き、棺側を帶状に取り囲むような形に青白色粘土で固めている。したがって粘土は棺側に近い内側に高く、端部になるにつれて低くなる堤状となっている。粘土外法長は199cm、巾65cmの隅丸長方形プランを示すが、西小口部のみ、さらに外方に向けて粘土帯が約1mものびていた。また粘土は棺側にだけ用いられ、棺の直上および直下には用いられず、当山陽団地内四辻第1号墳内部主体と類似する。

棺はすでに腐朽消失しているが、床面は水平を保ち、粘土壁が側壁、小口壁ともほぼ垂直に近く整然としていることから、平底箱形木棺の使用が推定される。現況での粘土帯上方での長さ178cm、同巾43cm、床面長176cm、同巾40cm、粘土の高さは最も高い東小口部で31cm、長軸中心線の方位は北82度東を示す。この計測数値が棺外法長に近いものと考えられる。

棺床面は若干の赤色顔料の遺存が認められたほかは、枕石をはじめ副葬遺物は何も発見されなかったが、棺外供献としての一括鉄器が、棺東小口に近い北側粘土帯の上方約15cmの封土中に発見さ

れた。鎌、鉄鎌等を含む5個体分である。出土の状況からみて、棺埋土の過程での棺小口直上に供獻されたものと考えられる。

本主体が地山整地部および墳頂中心部より南にずれているところから、その南に並存する主体の存在が予想され、精査を試みたが検出されなかった。また本古墳の築成と本主体埋葬の関係は、主体部上方に基壠掘り込みの跡が認められないこと、粘土帯の西小口外方の地山削平面上に載って、粘土が続いていることなどから、本古墳築成過程での埋葬と考えられる。

2. 墳外土壠(図126、図版62)

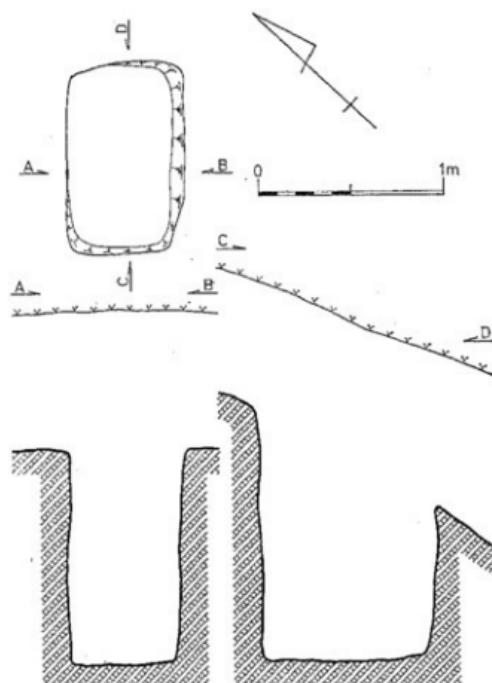
本古墳東墳端部の南北中心付近の、丘陵地山に直接掘り込まれた土壠である。隅丸長方形の掘り方プランをもって、ほぼ垂直に深く掘られ、底面も水平な面を保つ。傾斜面に位置するため深さ等は一定でないが、掘り込みの確認できる現地山生き土上面での長さ102cm、同巾66cm、底面長97cm、同巾58cm、深さは地形の高い側で136cm、低い側で80cm、平均105cmを測る。長軸中心線の方位は北47度東を示し、尾根主軸に対してはやや斜交するものの、当該地における等高線に対しては直交している。墓壠とするよりも貯藏穴風のピットという感が強いが、伴出遺物もなく、詳細は不明である。

第5章 出土遺物

中心主体棺外供獻の一括鐵器群である。いずれも銹化が著しく、欠損部も多いが、鉄鎌、平根式鉄鎌、尖根式鉄鎌、刀子、刀、のみの柄状鉄器各1の計6個体分の発見である(図127、図版25)。

鎌は厚さ0.4cm、最大巾3.3cmの鉄平板の一端を直角に折り曲げたものである。銹化によって欠失部もあり、細部については不明であるが、刃部は内湾し現代の草鎌に近い形態を示している。刃部の現存長は10cmを測る。

平根式鉄鎌は、左右対称のものでかえりをもつ。現存全長9.4cm、刃部長5.5cm、刃部最広巾2.5cm、同厚さ0.4cmで断面形は凸レンズ状を呈する。茎は断面長方形の平



第126図 第11号墳外土壠実測図

板で現存長3.9cm、茎巾1.15cm、同厚0.4cmを測るが、茎端部で段をもってさらに細まる傾向をみせている。尖根式鉄鎌は柄部のみの残存である。現存長10.3cm、巾0.7cm、厚さ0.5cmの断面長方形の棒鉄で、基端になるにつれて漸次細まるものである。その形状から尖根式鉄鎌の柄部と推察した。なお本鉄器と鋒化症着した同形状の棒鉄約3cmのものがあるが、あるいは、先述の平根式鉄鎌の柄末端かも知れない。

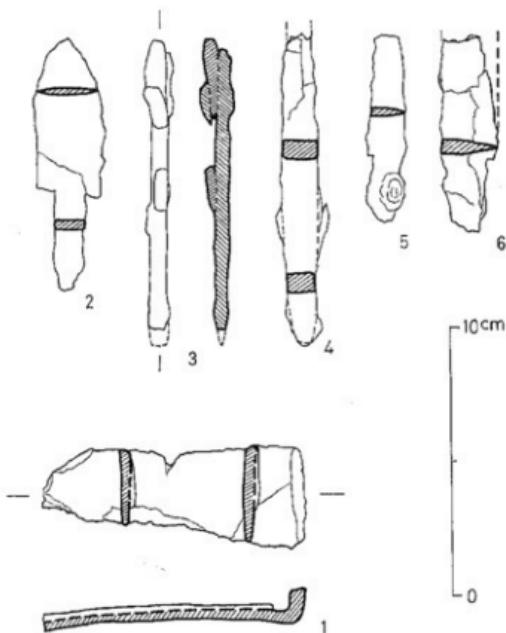
のみの柄状鉄器は先端部を折損しているが現存長11.5cm、巾1.3cm、厚さ0.7cm、断面長方形の棒鉄である。全長11.5cmのうち、基部の3.5cmほどは巾0.9cm基部端巾0.7と細まり柄状となる。刀子および刀はいずれも鋒化が著しく、断面二等辺三角形となることなどから、それと推察できる程度の遺存である。刀子の現存長6.9cm、刃部巾1.4cm、厚さ0.3cm、刀の現存長7cmを測る。

第6章 築成の年代

本古墳の築成年代は、中心主体棺外供獻の鉄器のうち、鎌がやや内湾していること、および埴輪の特徴などから、ほぼ前4期、5世紀後半の所産と考えられる。本用木古墳群16基のなかで、築成年代の比定ができるもののうちでは、最も後出のものであろう。なおこの時代の小規模墳は供獻遺物も簡略で、なかなか具体的な築成年代の比定が困難であるが、内部主体が類似する四辻1号墳は、古式須恵器を墳外葬石中に置き、器材埴輪の共通する岩田3号墳、富山4号墳など、近在類似古墳の資料の増加と分析が進めば、さらにより具体化された編年の足がかりとなると期待されるのである。

第7章 まとめ

1. 用木古墳群第11号墳は、丘陵尾根支脈上に立地する、尾根主軸に沿って長辺をもつ13m×10m



第127図 第11号墳中心主体出土鉄器

- ・高さ約1.5mの方形墳である。
2. 本古墳は、外部施設として埴輪を有するが、圍繞の状況は不明である。通常の円筒埴輪の他に、朝顔形円筒埴輪、さらに器形は不詳ながら器材埴輪片も検出された。
 3. 木古墳の内部主体は、箱形木棺の棺側のみに青白色粘土で囲んだ粘土構である。墳頂のほぼ中央部、現墳頂表土下55cmの丘陵地山生き土上面に、直接棺底をおいていた。
 4. 供獻遺物は棺外副葬の鉄鎌等一括鉄器6点のみで簡素である。
 5. 本古墳の埋葬は、墳丘築成完了後に改めて墓壙を掘りおろすものではなく、古墳築成の当初またはその過程の中での埋葬と思われる。
 6. 本古墳の築成年代は、埴輪の特徴ならびに中心主体出土の鎌の内湾の状況から、5世紀代後半の所産と考える。

用木古墳群第12・13号墳

第1章 序 説

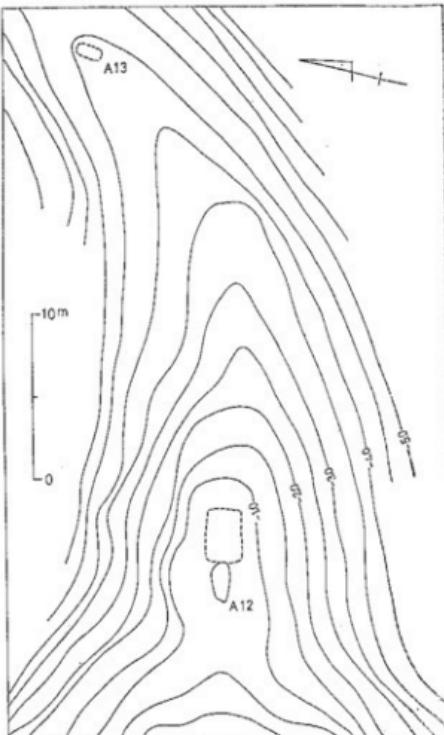
用木古墳群第12・13号墳（略記号A12・13）は、ともに岡山県赤磐郡山陽町河本字野山65番地の、丘陵尾根上に存在する小古墳である。

両古墳とも当初の分布調査の段階では、その存在を知ることができず、岡山県営山陽新住宅市街地開発事業とともに、用木第4号墳の発掘調査の際に、第4号墳から北東の第6号墳が立地する尾根突端部までの、約100m間の丘陵尾根稜線を、トレンチ調査することによって新たに発見されたのである。岡山県教育委員会はじめ関係機関で協議の結果、「記録保存」と決定され、第4号墳の発掘調査と併行して、昭和45年3月3日から同年4月8日までをかけて、山陽町教育委員会が発掘調査を実施した。その後昭和48年1月23日、住宅団地造成工事によって、第4号墳などと共に、丘陵もろとも削平整地されて、本古墳2基もその姿を消し去ったのである。

第2章 立地と調査前の概況

第4号墳が立地する尾根支脈分岐地点から北東にのびる尾根主脈は、当初は傾斜角度21度で急下降するが、標高72mのあたりで下降傾斜を緩め、小規模な台状部を形成したのち、第6号墳が立地する尾根突端部までの約80mは、巾狭ながらもなだらかな馬の背尾根となっている（図3）。

第12号墳は、第4号墳の北東斜面の標部に形成された台状部である。第4号墳発掘調査前の外表観察のとき、当該地も立木を伐採して観察したのであるが、第4号墳の墳端整形時の外方削平地または造り出しな付帯設備の可能性があるものの、第4号墳頂との比高が約7.5mもあるため、さして留意されなかった場所である。台状部中央に小盗掘らしい跡と、花崗岩礫が若干検出される程度の認識であった。ところが前章でも述べたように関連遺跡確認のためのトレンチ調査



第128図 第12号墳調査前外形図

によって、当該地に尾根主軸に直交する溝と葺石が検出されて、独立した古墳とわかったのである。墳丘規模は尾根主軸に沿って長辺をもつ、一辺 $16m \times 12m$ 、高さ1m弱の方墳と推定される。

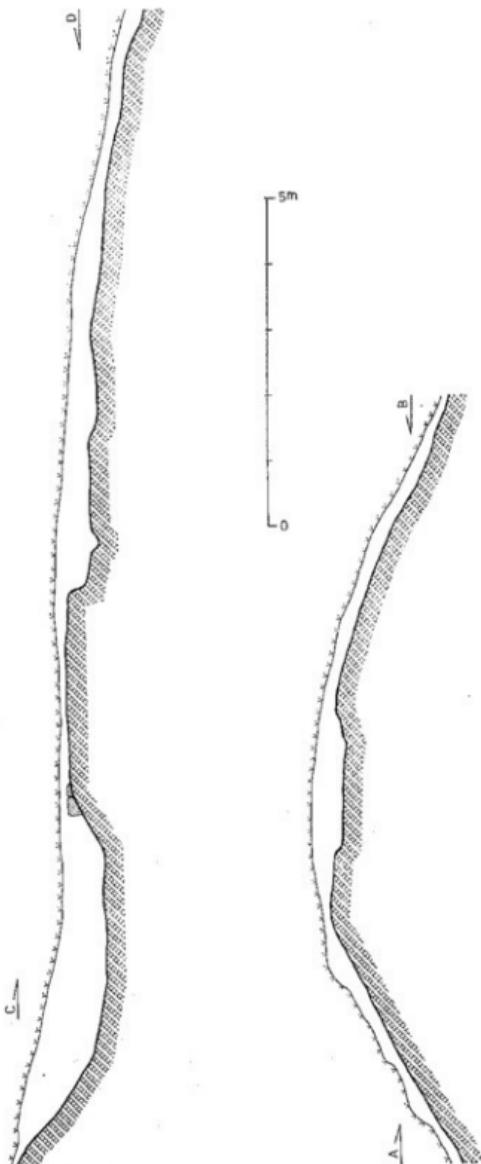
第13号墳は、第12号墳の北東約22mの尾根上に、トレンチ調査によってはじめて確認された土壙墓である。墳丘状の高まり等も認められず、自然地形そのものであった。北東にある第5号墳との距離も約20mである。第5号墳および第12号墳の中間尾根上に、単基の土壙墓として所在し、しかもその形状はいわゆる古墳的でない。伴出遺物もともなわず前記兩古墳との直接的なかかわりも不明のため、一応独立墳として取り扱かうこととした。

第3章 用木第12号墳

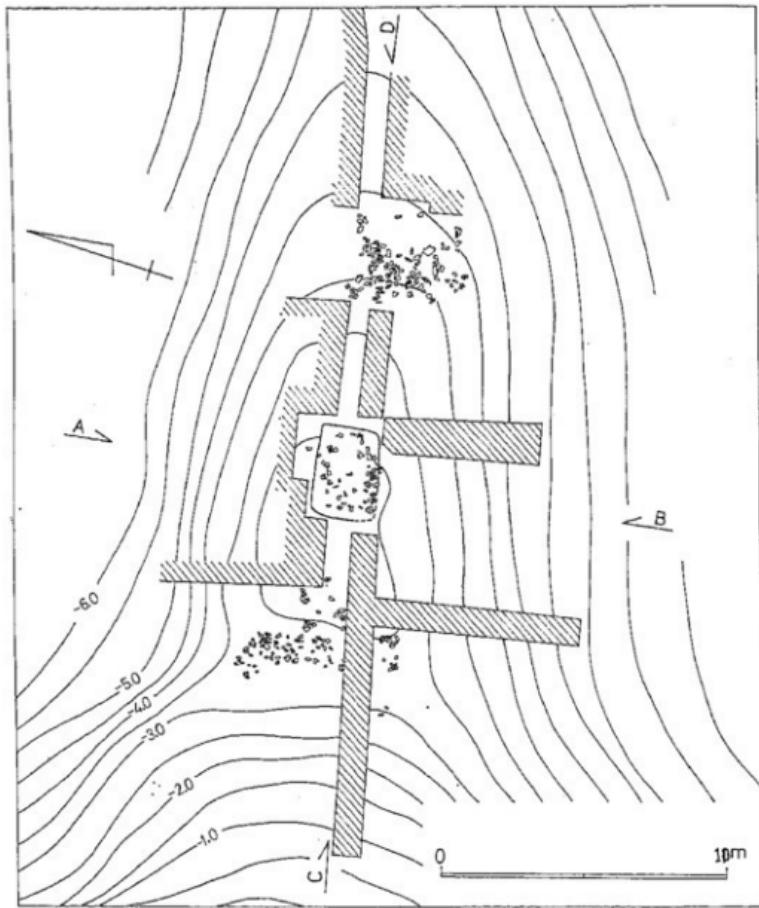
1. 外形と外部施設

巾狭な丘陵尾根稜線の自然地形の高まりを利用して、小規模の削平整形と墳丘盛り土を行なった程度の小方墳である。

古墳の立地する部分の丘陵尾根主軸はほぼ東西を示すが、地形の高い西墳端は尾根主軸に直交する切り通し溝、地形の低くなる東墳端は、墳形に合せて尾根主軸に直交する削平整形、両側の谷斜面部も削平整形であるが傾斜度は強い。墳丘部は丘陵尾根部を一度削平整地して、その中央に墓壙を掘った後、若干の盛り土



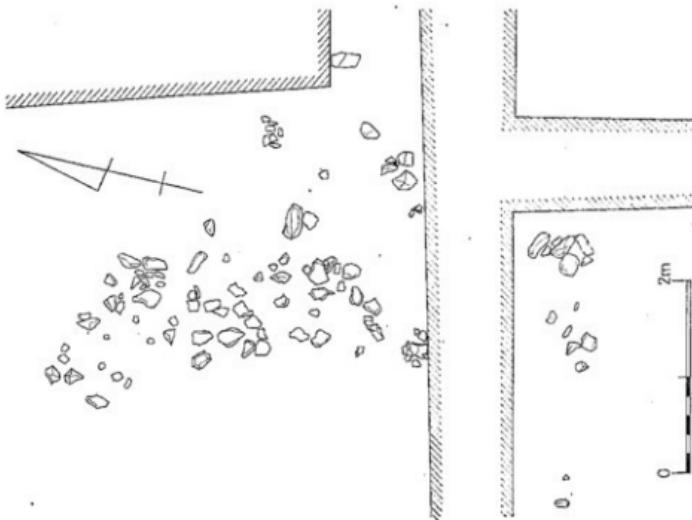
第129図 第12号墳 墳丘断面図



第130図 第12号填調査後外形図

と整地が行なわれたと考えられるが、現況では封土は流失しているらしく、現存填頂表土は直接地山層である。葦石は丘陵尾根を切った東西両小口斜面にのみ検出された。なおこの葦石面のはば中央部、填丘長軸中心線上に夫々1個の、底部を貫孔された二重口縁の土師質壺が置かれているが、破碎検出された(図129, 130, 図版63)。

南填端部の溝は尾根主軸に直交して、上端の巾5.6m、底部巾3.2m、深さは地形の高い西上端から1.4m、平均0.8mとかなり大規模な底面長約9mの切り通し溝となっている。溝底は尾根に対し直交する縦方向はほぼ水平、横断面は上向き台形状を呈する。葦石は5.8m×2.6mの範囲に遊離



第131図 第12号墳西斜面葺石実測図

した状態で検出された。現墳頂と溝底との比高は0.8m、東墳端との比高は1.8mである。

本古墳の外形および外部施設は、尾根主軸に沿った北77度東に長辺を置く底辺長16m×10m、高さ約1.5mの方墳で、尾根に面した墳斜面にのみ葺石と、その中央付近に墳外供獻の土師器壺を各1個置く古墳である。

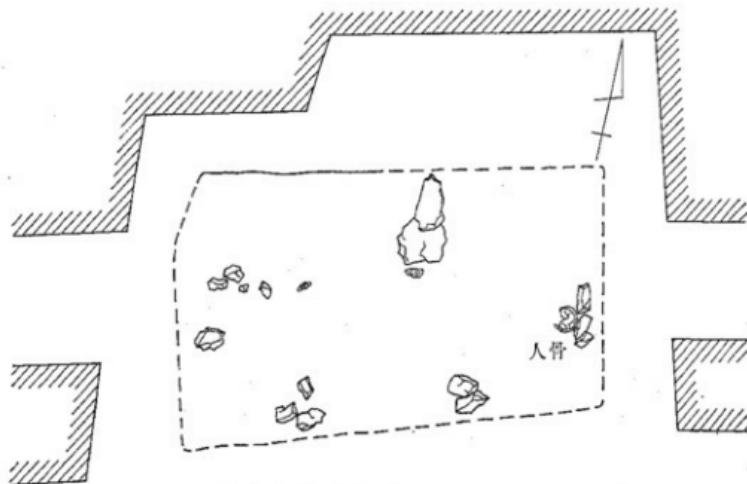
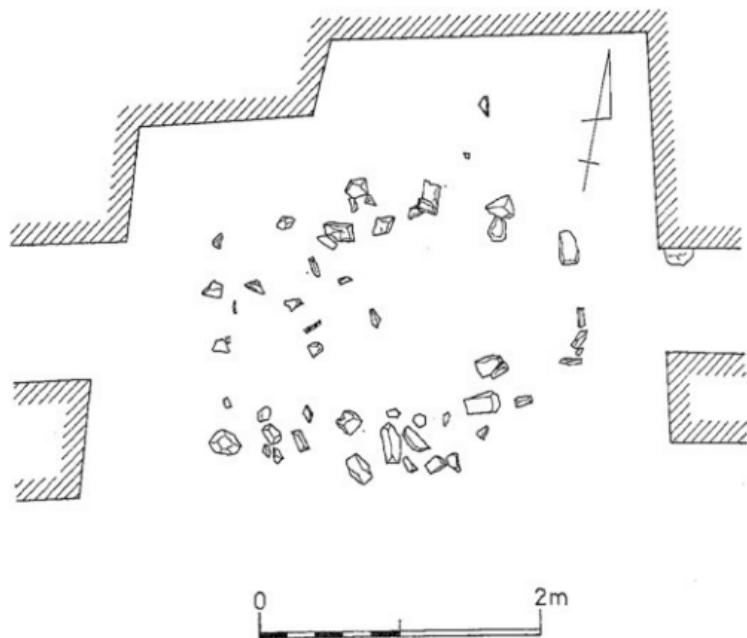
2. 埋葬施設(図133、図版4)

本古墳の内部主体は、墳頂中央部に埋葬された中心主体のみである。しかし本主体は、後世に掘り返されたことがあるらしく、墳頂表土層からすぐに、擾乱された状態で花崗岩角砾が多数検出された。これらの石材は掌大から見頭大程度の大さきの割り石で、総数約90個である。何らかの目的で葺石石材を持ち運んだものか、小石室を組んでいたものかは不明である。石材は2.8m×2.2mの範囲にわたって散在していたが、その石材の間に、牛の左上腕骨、中足骨、鱗骨等が検出された。後世の家畜牛の埋葬も考えられ、地区民への聞き込みを試みたが、そうした事実や伝承は得られなかった(図133上)。

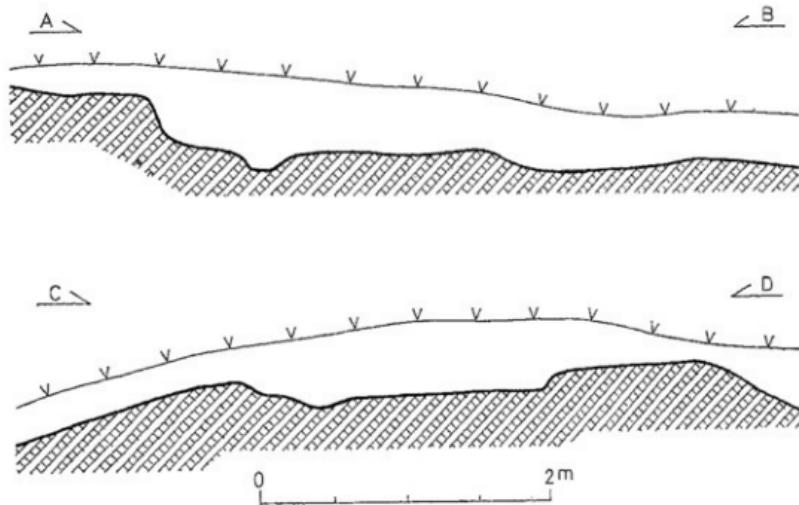
遊離石材を取り除き地山削平整地面まで掘りさげたところ、その輪郭は判然としないけれども、尾根主軸に沿って長辺をもつ、3m×1.85mの長方形で深さ約10cmの、墓壙状の掘り込みが検出さ



第132図 第12号墳東斜面葺石



第133圖 第12號墳內部主體實測圖



第134図 第12号墳内部主体断面図

れ、その東南隅に原位置を保つと思われる遺体頭顎骨の一部と、石材3個、それに接して南側に刀1振りが発見された（図133下）。原況の具体的な形状は不明であるが、丘陵頂を削平整地して、墓壇を掘って埋葬し、その後墳丘を盛って整形完了の手順を経ての本古墳築成の過程が推察されるのである。

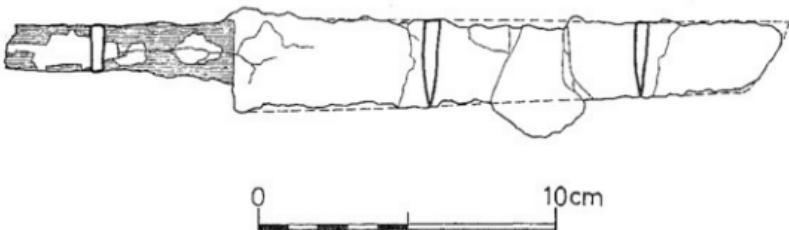
人骨は京都大学理学部池田次郎教授の御教示によれば、後頭骨とそれにつながる左側頭骨の一部で、外後頭隆起が著しく強く人字縫合が癒着しているため、熟年以上の男性の可能性が高いとのことである。

3. 出土遺物

本古墳の出土遺物は、中心主体副葬の鉄刀1点と、東西両葬石のはば中央に置かれた土師器壺各1の2個体分である。

〔鉄刀〕（図135、図版74）

鏽化が著しい鉄刀である。5片に折損されて発見され、欠損部もかなりあるが、接合による復元の結果はほぼ原形を知り得た。現存長25.7cm、刃部長18.2cm、刃巾3.2cm、背厚0.5cmと刃巾にくらべて刀身が短い鍛造のつくりである。刀部断面は二等辺三角形を呈するが、鍔の有無は不明である。刃の刃部は直角に段をもって茎に続くが、背部は不鮮明である。茎は現存長7.5cm、平均巾1.5cm、間厚さ0.5cmで基部になるにつれて漸次巾狭となる。断面は長方形を呈する。茎全体に縦方向に木目の走る木質が付着しているが、目釘穴の存在は不明である。



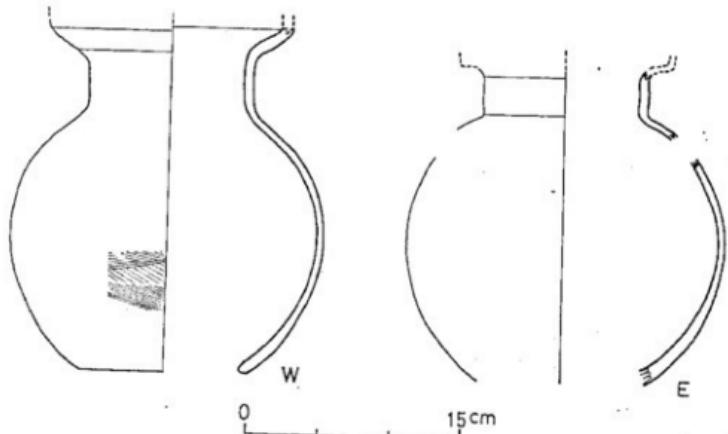
第135図 第12号墳出土鉄器実測図

〔壺形土器〕(図136, 図版79)

東西の両葺石間に置かれていた土師器壺は、いずれも破片となつて検出されたが、接合による復元によつて、その概要を知ることができた。両者ともほぼ同巧同大のものである。

球形に近い器胴から直口して立ちあがる短い頸部がつき、二重口縁となる壺形土器であるが、底部は焼成前に大きく貫孔されている。頸部までの残存で全高は不明であるが、西葺石間出土のもので、現存高22.6cm、器胴部高19.1cm、頸部高3.1cm、胴部最大径18.8cm、頸部径8.5cm、底部貫孔外法径11.4cmを測る。

色調は全体としては明るい黄褐色を呈するが、器胴下部及び内壁部は、暗灰黒斑が見受けられる。焼成は普通で、胎土に石英質の砂粒を多く含み、大きいものでは5mm大のものもあるが、胎土は精選されている。整形後の仕上げ調整は、器表の磨耗が著しく詳細は不明であるが、器胴外表は縦方向へのへら削りの後荒い刷毛目、頸部は横なで、器胴内面は指圧などでによるものと考えられる。



第136図 第12号墳外表土器実測図

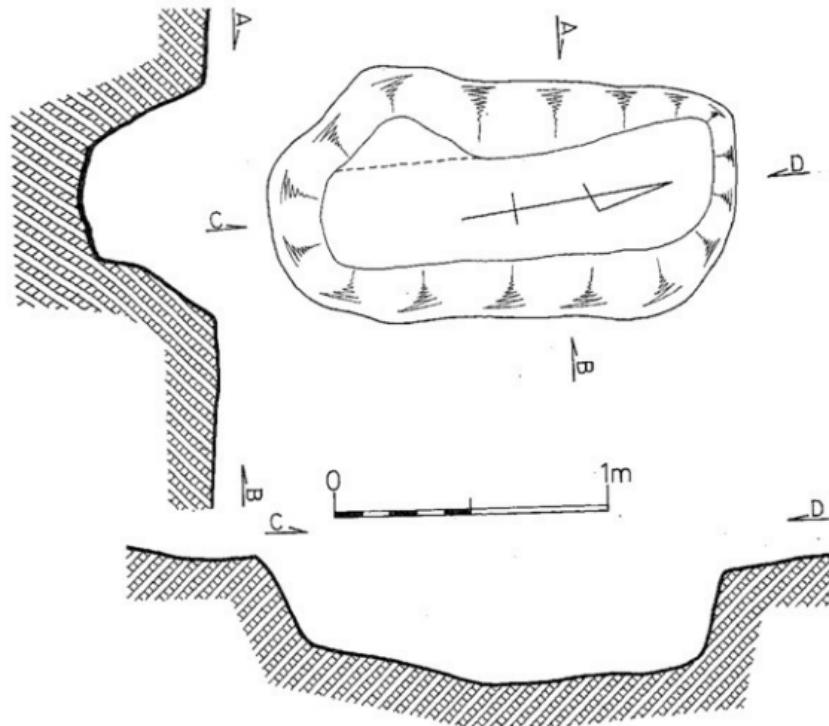
4. 築成年代

本古墳の築成年代も伴出遺物が少なく、具体的に明確にすることは困難である。墳外表の葺石間供獻土器の特徴と当地域における編年網から、笠岡市高島王泊り遺跡第6層の土器に類似するため、本古墳群中最も古式の分類に比定できるものと思われる。

第4章 用木第13号墳

第12号墳から北東の第5号墳へ向かう丘陵尾根稜線上に設営した、トレンチ調査によって、現表土下約20cmの地山生き土層に直接掘り込まれた土壙墓が検出された。これが第13号墳である。尾根稜線からやや北にはずれた、丘陵尾根肩部に立地し、長軸中心線をほぼ南北におき、尾根主軸に斜交する。隣接する第5号墳および第12号墳にともに約20mの距離をもつ、中間に位置している。

土壙は、掘り込みの確認できる現地山生き土上端長170cm、同巾85cm、底面長144cm、同巾平均37cm、掘り込みの深さ平均34cmの歪形円形プランを呈する素掘り土壙墓である。底面も一定せず、縦



第137図 第13号墳 土壙実測図

黄断面とも上向き抛物線を呈し、枕石、赤色顔料、副葬遺物等何物も検出されなかった。したがって本土塗の築成年代についても不明である。本用木古墳中には多数の土塗墓が検出されているが、比較的床面は水平な面を保つものが多く、本土塗と類似するのは第3号墳墳端葺石面下に発見された第3主体のみである。本古墳群と直接かかわりのない、年代を異にする所産とも考えられるのである。

現況では墳丘封土を全く有しない。丘陵尾根が急傾斜面に臨む肩部に立地しているため、封土流失も考えられるが、もともとそうした施設をともなわない、単基土塗墓と推察される。

第5章 ま と め

1. 用木第12・13号墳は、ともに当初の分布調査の段階では確認することができず、丘陵尾根上にトレンチ調査を実施することによってはじめて、検出された古墳である。
2. 両古墳とも、標高約70m、眼下の谷水田との比高約50mの、尾根巾のきわめて狭い馬の背丘陵尾根に所在する。
3. 第12号墳は、丘陵尾根の自然地形の高まりを利用して、小規模の削平整形と墳丘盛り土を施した、底辺長16m×10m、高さ約1.5mの方墳である。
4. 外部施設は尾根部に面した墳端斜面にのみ葺石を有し、その中央部に底部を貫孔した古式土師器壺各1点を墳外表供獻土器として置き注目された。
5. 内部主体はすでに盜掘破壊され、詳細は不明であるが、古墳築成前の地山削平面にまでおよぶ墓壙を掘り、若干の石材を用いた小石室を構築していたものと思われる。副葬品は簡素で、現況で鉄刀1点のみを検出した。また遺存人骨は熟年男性と判別される。
6. 古墳築成完了後の埋葬とするよりも、墳丘築造のそれも早期の過程での埋葬と考えられる。本古墳群中小規模墳には、こうした古墳築造過程での埋葬が多いのが特徴である。
7. 第13号墳は、トレンチ調査によってはじめて発見された、単基土塗墓である。盜掘円形を呈する長径170cm程度の小土塗で、現況では墳丘封土は検出されなかった。もともとそうした施設をともなわないものと推察された。伴出遺物をともなわず、年代等一切不詳である。

用木古墳群第15・16号墳

第1章 序 説

用木古墳群第15・16号墳（略記号A15・16）は、ともに岡山県赤磐郡山陽町河本字野山65番地の、丘陵尾根末端部の稜線上に近接して所在する小古墳である。

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業にともない、用木古墳群15基とともに発掘調査の対象とされ、山陽団地埋蔵文化財発掘調査第11次委託契約に基づいて、山陽町教育委員会が発掘調査を実施した。発掘調査は前述の第7号墳の発掘調査に引き続いだ、昭和49年7月22日から同年8月16日まで実施したが、周辺丘陵上に弥生集落址・三歳烟遺跡が発見されたため、当調査期間の大半はそれらの調査と重複した。なお三歳烟遺跡の調査報告については、別に稿を改めて本報告集第6巻において取り扱う予定である。第15・16号墳も発掘調査終了後の、昭和50年2月15日、住宅団地造成工事によって、第7号墳および三歳烟遺跡などとともに、消滅したのである。

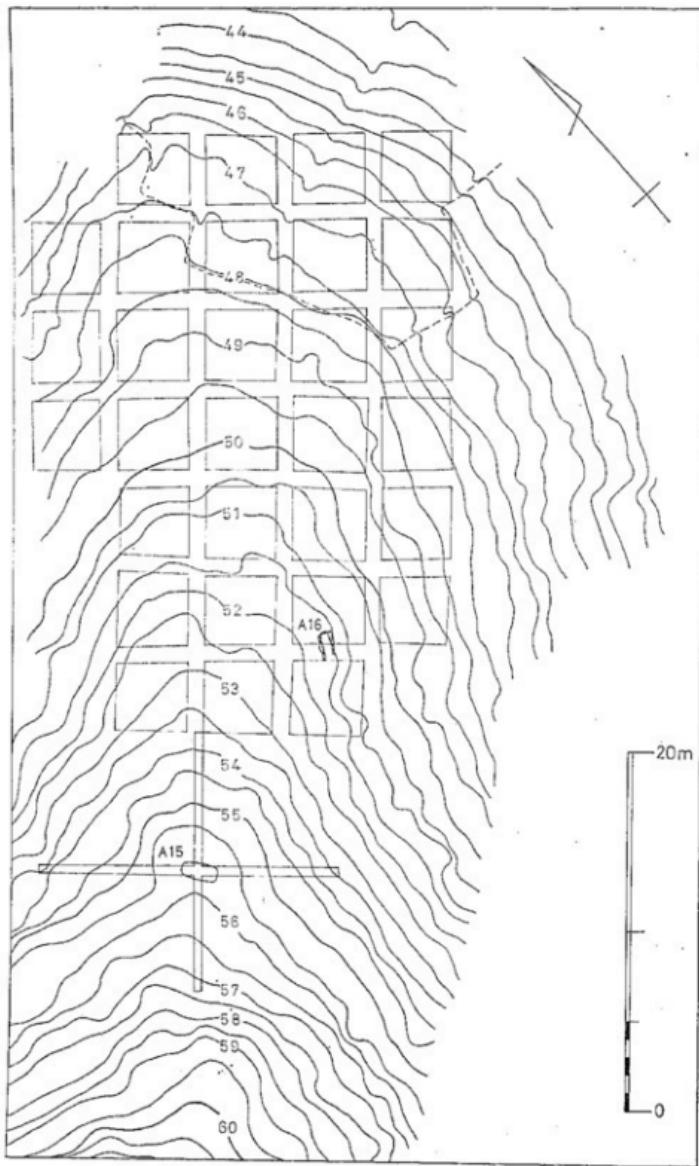
第2章 立地と調査前の概況

用木第15・16号墳は、用木山から谷水田の南縁に沿って、北東に向かって緩やかな起伏をみせながら下降する。丘陵尾根突端部にあたる尾根上に近接して立地する。そこは第6号墳が立地する丘陵尾根支脈の分岐地を突端部として、眼下の谷水田をY字状に2分する形で張りだした尾根斜面で、標高52mあたりを境にその上方は松林、その下方は一度開墾された後再び荒廃した雜木林となっていた（図138、図版66）。

第15号墳は、第6号墳の前方部前面から北東へ約15mの尾根上に立地している。そこは第6号墳の前方部も含めて、狭い尾根稜線を階段状に3段に削平された形状を示し、当初は第6号墳の外方に直列状に連なる、2基の小規模墳と推定した。しかし調査の結果、中央の段状部は第6号墳前方部前面の整形外方平坦面と、その下方に立地する第15号墳の溝造構の掘りこみによって生じた残丘部であった。

本古墳は標高55.5m、眼下の谷水田との比高約30mと、古墳立地としてはさして高い立地とはいえないが、門前池を谷口とする巾約200mの谷奥正面に位置し、その両翼の丘陵が低い舌状台地であることも重なって、谷水田とその前方にひろがる埋積平地一帯の耕地を、一望する立地を占めている。古墳がかなりの傾斜をもった尾根稜線上に位置するため、墳端の高位も一定でなくまた墳丘も流土の影響で判然としない。外表觀察では葺石や埴輪などの外表施設も検出されず、古墳と即断しかねる程の状況であった。しかし地形の高い南西墳端部の尾根に、馬蹄形状の周溝の痕跡を残すことから、一応径15m、墳高1.5m程度の円墳と推定したのである。古墳とすれば墳域内には盗掘痕も認められず、未掘墳と推察された。

第16号墳は、第15号墳の東北東約15m、尾根稜線の南東約7m、標高51.5mの傾斜面上に発見され



第138図 第15, 16号墳周辺地形図

た、組み合せ式箱形石棺の残骸である。当該地は戰時に開墾されて果樹園となり、その際に破壊削平されたらしく、現況では封土の高まりも全く検出されず、蓋石の全部と側壁の一部を持ち去られた状況で埋没していた。

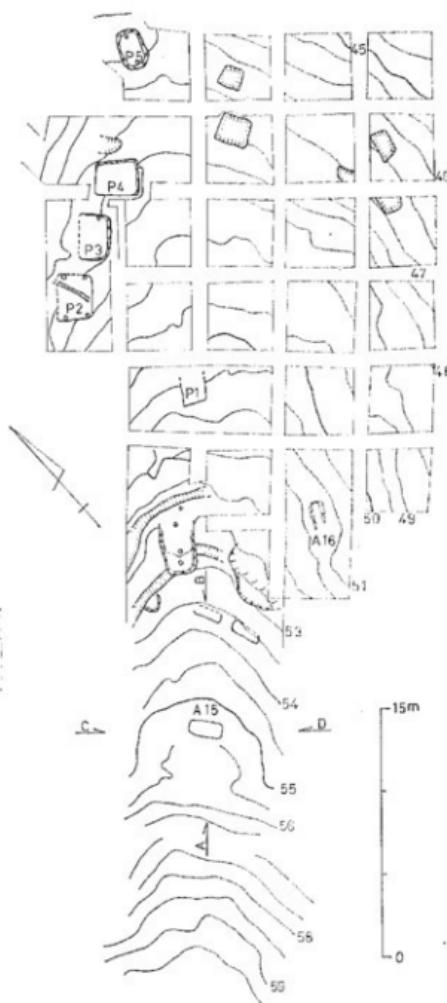
なお当丘陵上一帯から、弥生式土器片が表面採集され、関連追跡確認のために $4\text{m} \times 4\text{m}$ グリットを30区設営して、試掘を実施した結果、図示したごとく、ピット群が検出された。いずれ稿を改めて報告の予定があるので、ここでは図示するにとどめる(図139)。

第3章 用木第15号墳

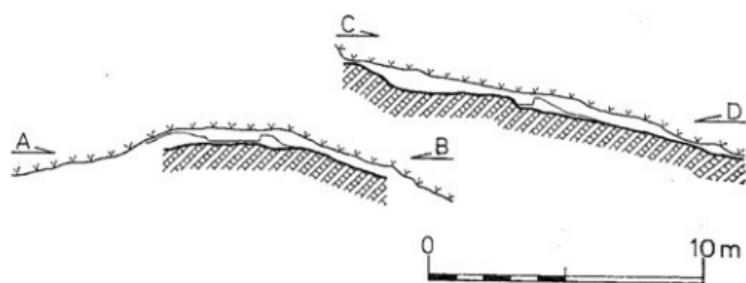
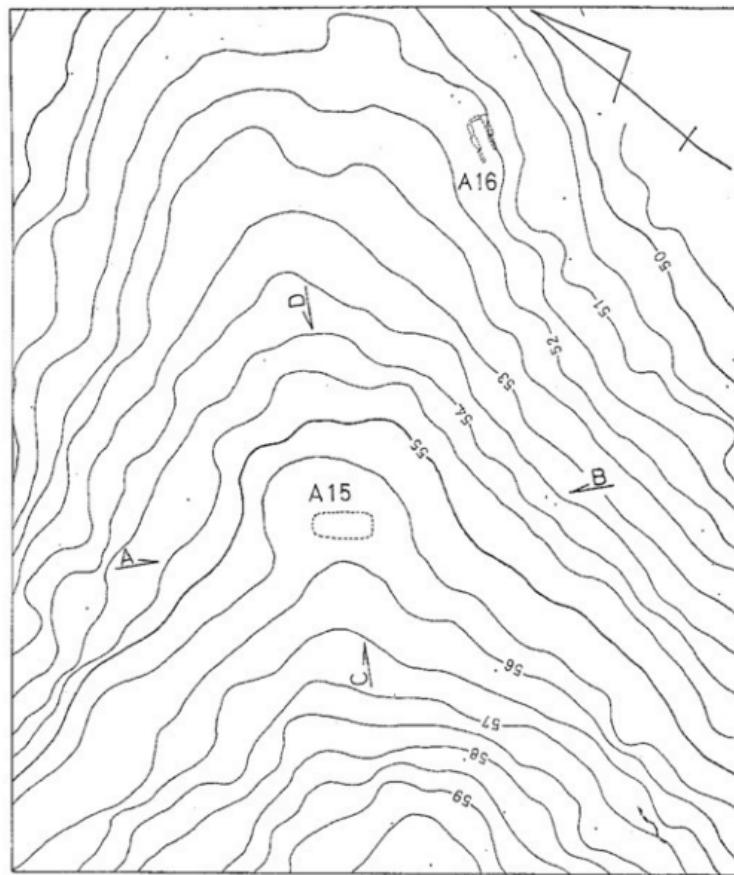
1. 外形と外部施設

本古墳の外形は、地形の高い南西墳端の尾根部にのみ、円弧状の周溝をもつ小規模な円墳である。墳丘封土のはとんどを流失し、おまけに現墳域部は上方からの二次堆積となって、墳丘規模も判然としない。周溝のカーブおよび北東墳端の整形面をもとに、本古墳の規模を推定すれば、当該地の尾根主軸に沿って長径をもつ、 $11.5\text{m} \times 9\text{m}$ の円墳となる。墳高は傾斜面に立地するため墳頂高位も一定せず、流土によって明確ではないが、地形の高い南西済底から現墳頂までの比高 0.1m 、地形の低い北東墳端からの比高 2.5m を測る。もとの見せかけの平均高約 2m 前後の円墳であったと考えられる。

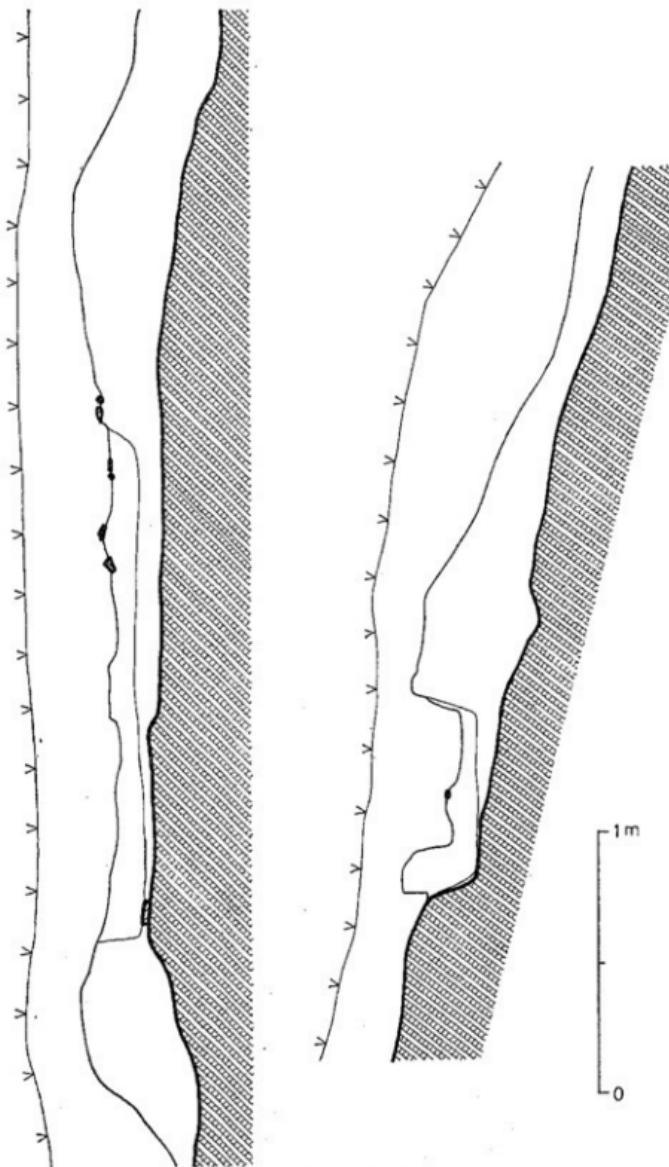
墳丘の断面観察から本古墳の築成を想定すると、地形の高い丘陵尾根部を深さ約 0.95m 掘り込み、そのまま地形の低い北東尾根を約 4m にわたって水平面に削平整地し、さらにその部分から再び 0.5m の深さで階段状に掘り降ろしている。古墳立地が傾斜面のため、墳丘築成前の整地面も、



第139図 第15, 16号墳周辺遺構配図



第140図 第15, 16号填外形図



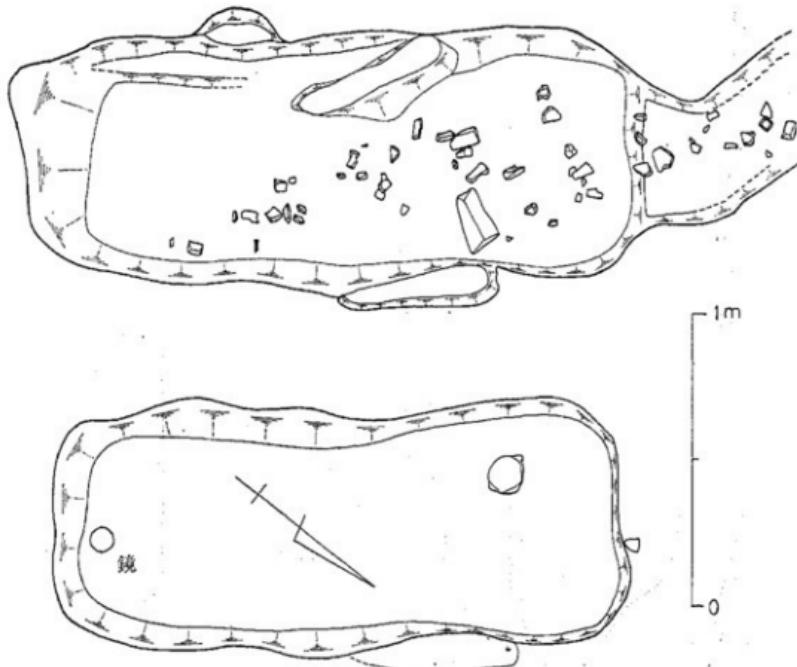
第141圖 第15號填填丘斷面圖

このように階段状とならざるを得なかったのか、あるいは複合する堅穴式住居の掘りこみであるかも知れない。内部主体は、この削平整地面の高さに合せて地形の低い部分に盛られた封土面から、段状掘りこみ線に沿って、尾根主軸に直交して埋葬された土壙である。したがって主体の南西側壁は、直接掘りこまれた地山生き土面であるが、他の壁面は盛り土面となり、床面は削平整地面上方約3cmに置いている。主体は墳丘の中央に位置し、その上方には墓壙の掘りこみ線は検出されない。被葬者の埋葬は墳丘築成の過程において行なわれたものと考えられる。

現況での墳丘盛り土の高さは、墳頂中央で地山整地面から約50cm、主体掘り込み上端から約15cmと僅かである。傾斜地に立地するため、封土の風化流失も十分考えられるが、もともと、封土を高く盛って墳丘を築成するというよりも、丘陵尾根部を利用して削平整形を主に、僅かの封土を盛って整形築成された古墳と考えられる。

本古墳の外部施設として埴輪はともなわないが、周壁内に花崗岩割り石十数個が一括して遊離検出され、葺石が施されていたことが想定される。しかし石材は他の部分で全く検出されず、その実際については不詳である。

2. 内部主体（図142、図版68）



第142図 第15号墳 内部主体実測図

墳頂中央部直下の丘陵尾根削平整地面に合せて、地形の低い北東半に盛られた墳丘封土中に、尾根主軸に直交して埋葬された木棺直葬の土塚である。墓壇の掘り込み上端を墳丘盛り土層中に置いているため、掘り込みプランは判然とせず、また墓壇内に土師器高坏1個体と花崗岩小礫が多数並び検出され、床床の可能性が推察された。

しかし発掘調査の結果、主体底面はほぼ水平な面を保ち、素掘りの土壙である。床面は部分的に赤色顔料が僅かに遺存する程度で、枕石等の施設は何も認められない。掘り方および床面とも隅丸長方形プランを示し、掘り込み壁面も比較的整然としていた。

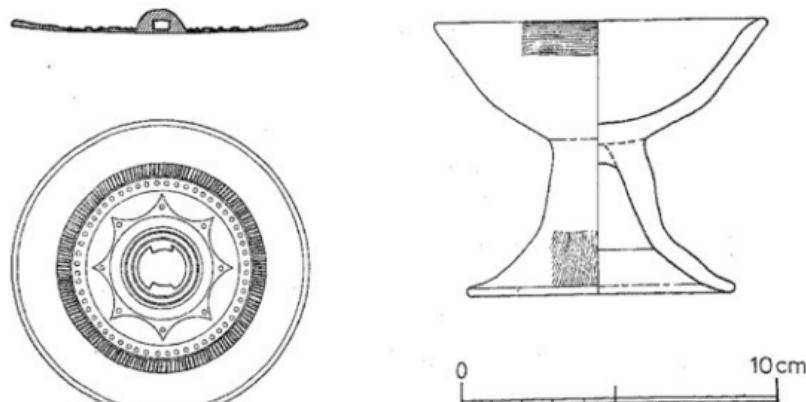
主体掘り込み上端長198cm、同巾82cm、床面長184cm、同巾62cm、深さ平均29cm、長軸中心線の方位は北36度西を示す。床面南東小口の長軸中心線上に銅鏡が一面副葬されていた他は、棺内供獻遺物は何も検出されなかった。

3. 出土遺物(図143、図版71)

内部主体内副葬の鏡1面と、墓壇内上端部で破碎検出された高环形土器1個体のみである。

鏡は平縁の斜行櫛齒文帶内行花文鏡である。直径9.2cm、縁端の厚さ0.3cmの小形品である。鏡面を上にして発見されたが、全面青銹でうすくおおわれ、銹の吹きだしあほとんどみられない。しかし、銅質が風化のためか艶くなり、大きくひび割れを生じて鏡全体にかなりの歪みをみせている。鏡面は僅かに凸レンズ状を呈し、そりは両端において0.3cmである。

背面を飾る文様は、巾約1.3cmの平縁に接した外区に同心円で区画された2圏があって外方は直行に近い斜行櫛齒文、内方は一列の珠文帯、内区には陽出した8弁の内行花文と、その谷部に各1点の珠文を配し、その内方に径3.2cmの無文帯を繞らせている。鉢は無文の半球形を呈する有闊円鉢であるが鉢座をもたない。鉢の外方に2圈を繞らせ、外圓円径2.3cm、内圓円径1.85cmの中央に、径1.5cm、高さ0.65cmの素円鉢がある。鉢とおしの貫孔は断面垂長方形を呈し、鉢孔巾0.5cm、



第143図 第15号墳出土遺物

高さ0.3cmを測る。

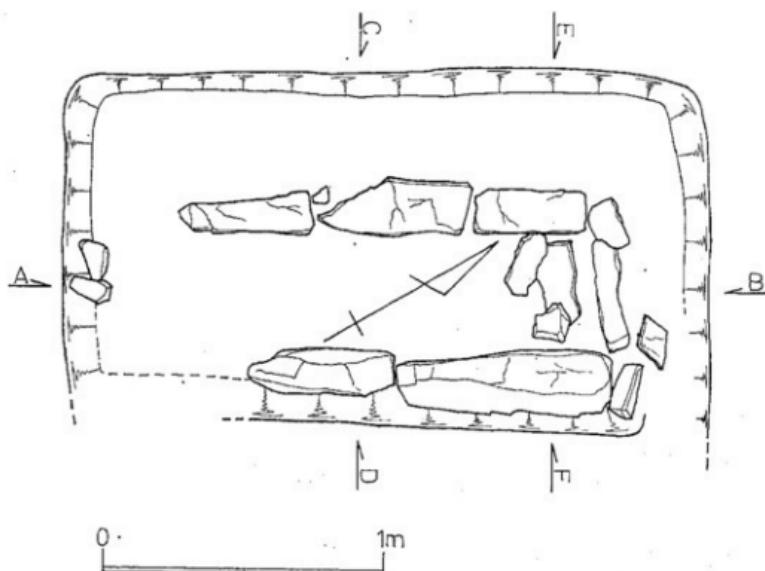
墓壙埋土中より検出の土師質高坏は、破碎していたが、接合による復元ではその全形を知ることができた。丸味をもった上施部にラッパ状の脚部のついた均整のとれた小形高坏である。器高8.8cm、上施部高4.3cm、脚部高4.5cm、口縁部径10.8cm、脚裾部径8.5cmを測る。坏部内面は横なので、坏部表面は横方向へら磨きの後の横なので、脚部外表は縦方向へら磨き、同内面はへら削りによって調整されている。明るい赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には石英質の砂粒を多く含むが、胎土は精選されて粒子が細かい。文様および稜線はともなわない。

4. 製造年代

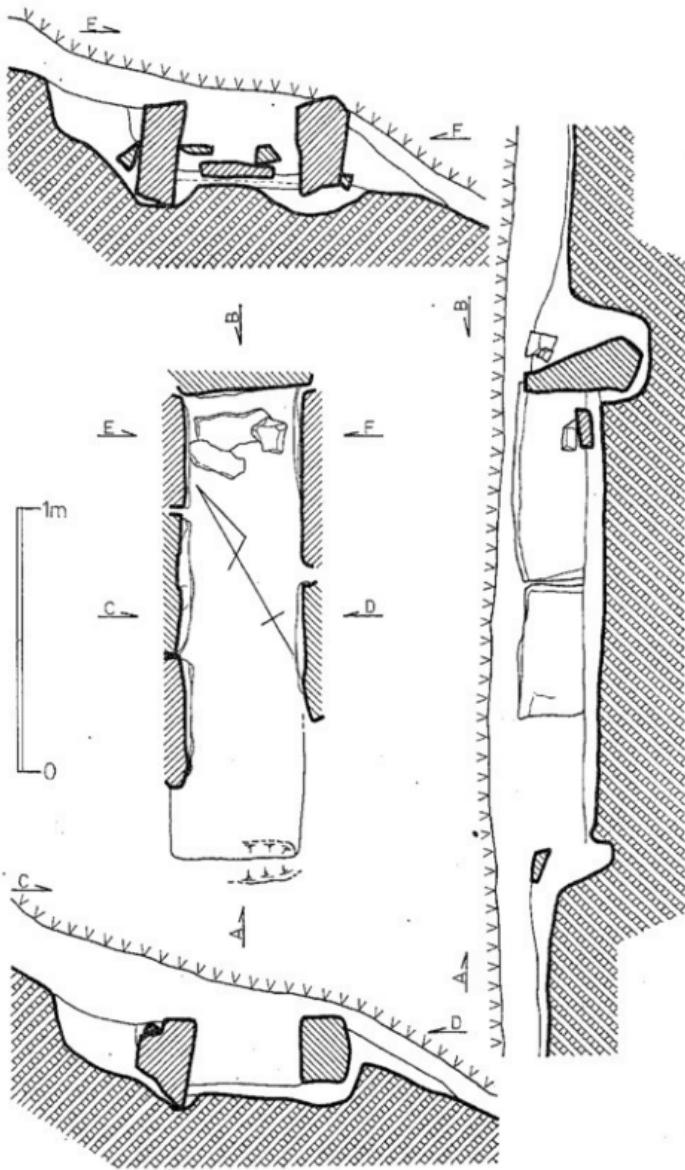
本古墳の築造年代については、伴出遺物も少なく、また墳形も判然としないため、明確に規定することは困難である。径11.5mの小円墳に小形内行花文鏡を副葬していることや棺外土師器の編年観、また周辺小規模墳等との比較検討から、前期古墳5世紀代の所産と推定されるのである。

第4章 用木 第16号墳

第15号墳の東北東約15m、尾根稜線から南東へ約7mずれた傾斜面に位置する。組み合せ式箱形石棺の残骸である。墳丘は開墾によって削平され、石棺も蓋石のすべてと南西小口の側壁3個を持



第144図 第16号墳石棺平面図



第145図 第16号 填石棺実測図

ち去られた状態で、現丘陵表土層に埋没していた。

現況では封土は全く認められず墳丘規模や形状は不明であるが、石棺から約3m南西の、現存地山生き土上面に、周溝状の整形面の痕跡が僅かに遺存することから、もとは径7m前後の円墳であったろうと推察できる程度である（図140）。

石棺は丘陵地山に直接掘りこまれた墓塚内に組まれている。墓塚の掘りこみ上端が確認できる。現存地山生き土面での観察では、等高線に沿って地形の高い西側壁部を大きく掘り込んで、底面を水平に削平した隅丸長方形墓塚の、東側壁面に接して箱形石棺を組んでいる。現存墓塚掘り込み上端長228cm、同巾124cm、墓塚底面長215cm、同巾105cm、深さは地形の高い西方約45cm、地形の低い東方約15cm、平均約30cmである（図145）。

石棺は前述もしたように、蓋石のすべてと南小口部の側壁の一部をすでに持ち去られていたが、ほぼその大要を知ることができた。石材は付近の丘陵に産する花崗岩の、面取りされた長方形板状の割り石を立て並べて構築している。側壁の天を據えるように、墓塚底面に溝を掘って固定している。原則的には小口板石を中心として、東側壁3枚、西側壁4枚で組みたて、その間隙は粘質土をもって充填している。床面は墓塚底面より約8cmの高さまでマサ土を埋めて水平面に整地して、北小口部に3個の花崗岩割り石を用いた枕石を1組置いている。棺内には枕石のほか赤色顔料の遺存とか、副葬品などは何も検出されず、したがって本古墳の築成年代も不明である。

石棺身部上端の外法推定長193cm、同巾78cm、棺床面推定長171cm、同巾47cm、深さ平均31cm、長軸中心線の方位は北30度東を示す。

第5章 まとめ

1. 用木第15・16号墳はともに、丘陵尾根末端の稜線上に近接して所在する小古墳である。
2. 第15号墳は、封土が流失して判然としないが、地形の高い尾根部に馬蹄形状の周溝をもつ、径11.5m、高さ約2m程度の小円墳であったと推定される。
3. 第15号墳の外部施設は判然としない。埴輪をともなわないことは明確であるが、蓋石はもっていった可能性が強いのである。
4. 第15号墳の内部主体は、墳頂中央部に尾根主軸に直交して埋納された、木棺直葬の墓塚と推定される。墓塚は長さ185cm、巾65cmの隅丸長方形のものであるが、南東小口床面に径8.2cmの小形内行花文鏡1面が副葬されていた。
5. 第15号墳の築成年代は明確に規定できないが、前期古墳5世紀代の所産と考えられる。
6. 第16号墳は、すでに破壊削平された、組み合せ箱式石棺である。用木古墳群16基のうち唯一の箱式石棺であるが、破損し伴出遺物もともなわず残念である。
7. 第16号墳は、地山生き土面に残る整地面の形状から、径7m前後の小円墳と推定され、石棺規模は床面外法長171cm、同巾47cm、深さ31cmである。

あとがきにかえて

用木古墳群は、当初の分布調査では 6 基の存在しか知られていなかったが、その後の調査によって 16 基の古墳で構成されることが明らかとなった。これらの古墳は東高月丘陵群のほぼ中央部にあって、しかも最高位をも占める用木山の頂から北東に向けて、なだらかな起伏をもって下降する全長約 400m の丘陵尾根と、その途中から北方へ分歧する 3 本の小丘陵尾根支脈の稜線上に群在する。そこは尾根巾が複せて狭いうえに、両側の谷斜面が急峻な馬の背尾根となって風化が進み、古墳の墳丘も流土や、二次堆積によって、かなり損なわれているが、盗掘等の被害を蒙ることもなく、大部分の古墳は未掘墳としてはほその原況を保っていた。

本古墳群のうち、丘陵尾根主脈に直列状に立地する用木第 1 号墳から、第 6 号墳へかけての数基は、当丘陵群に集中して所在する、8 支群 77 基の古墳のなかでも一際卓越して、立地や形状からみても主墳系列をなすものである。同時にまた当地域における弥生時代以来の伝統的な集団墓から、定形化した初現的な古墳への移行の過程を如実に示すものである。さらに丘陵尾根支脈上に立地する第 7 号墳、第 8 号墳、第 11 号墳などの小形古墳は、前述の主墳系列を発起的に引き継ぐ形で集成されているが、埋葬施設および副葬遺物共簡素な、發展期から転換期へかけての古墳である。先に刊行した第 2 集および第 3 集で報告の岩田第 3 号墳^①、官山第 4 号墳^②、四辻古墳群 7 基などとともに、当地域における前期小形古墳の諸形態と類形を知るうえで、好資料ともなるものである。

山陽住宅団地造成用地内における、過去 5 年余にわたる埋蔵文化財の発掘調査によって、用木古墳群に先行する弥生時代中期以降の、四辻土壙墓^③造跡などの集団墓と、官山方形台状墓^④などの方形特定墓の存在とその大要の系譜を知ることができた。また時代を降って横穴式石室を内蔵する岩田古墳群などの後期古墳群の所在も明確となった。すなわち弥生時代中頃から古墳時代のほとんど全期間にわたって、墓制の変遷を一括して見ることのできる地域なのである。したがって用木古墳群は、古墳の発生から發展への問題、換言すれば吉備の国における前期古墳の出現と歴史的過程を、一つの地域において一貫してとらえ得る遺跡群の一部を構成するものである。

用木古墳群の発掘調査報告にあたっては、これらの諸問題については、問題提起なり、考察を行なうべきであるが、現状では時間的制約に加えて、私たち調査員の非力のため、十分な討議と準備ができなかった。弥生時代の集団墓から古墳発生への事例については、本書「地理的・歴史的環境」の項 (P43~P53) で若干ふれているので、ここでは、用木古墳群を中心に、発掘調査のまとめを兼ねて、思いつくままに二、三の感想を列記することにより、あとがきにかえたい。

1. 土壙墓群・方形台状墓

東高月丘陵群における墓制変遷の一つの画期は、弥生時代中期後半にあると思われる。丘陵頂の尾根上に立地する四辻土壙墓群は、弥生時代中期後半を盛期とする 75 土壙墓 (内土器箱 3) で構成された集団墓であるが、その過程の中で方形台状墓の形式をとりいれ、集団墓の中央に 22 基の土壙墓を含む方形台状墓をはさむように、その両翼にあたる尾根上的一方に 19 基、他の一方に 32 基の土

横埋葬が行なわれている。その後この方形台状墓の系譜は、小規模ながらも単位集団の専有域として、四辻方形台状墓（弥生時代中期末）、宮山方形台状墓（弥生時代後期前半）、便木山方形台状墓^①（弥生時代後期後半）、愛宕山方形台状墓群（高島王泊第5層）へと続くのである。いずれも丘陵尾根の自然地形の高まりを利用して、尾根に直交する溝を掘って墓域を画し、台状部は若干の削平と盛り土整形を施す程度の1辻10m～15mと小規模のものである。埋葬様式は原則として直接丘陵地山に掘りこんだ墓壇内木棺埋葬で、被葬者数も古いものは1基6～7主体と比較的多く、世帯共同体単位での埋葬を思わせるが、時代が降るにつれて1基1～2主体となり、小規模ながらも共同体員からも隔絶されていく傾向を示している。またこうした築成の方法および埋葬の形態は、基本的には用木古墳群へそのまま引き継がれているのである。

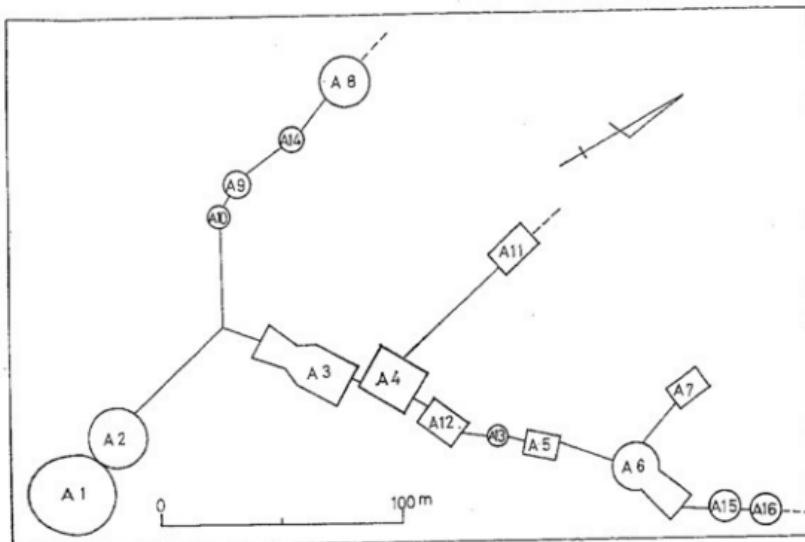
このような方形台状墓の系譜がたどられる一方では、土壙墓群という形での集団墓の系譜もまた続くのである。用木古墳群の東方に小谷一つへだてて隣り合う丘陵上に所在する愛宕山土壙墓遺跡は、弥生時代中期末から後期初頭へかけての、300基を越える土壙墓で構成される集団墓であるが、いくつかの単位集団を背景とする集団墓の中で、比較的個体差もなく、構成員みんなが平等に扱かわれている。ところが時代を降って古墳時代初頭の酒津式併行期の集団墓は、その様相を異にするのである。便木山遺跡は用木古墳群の北方、谷水田一つをへだてた低丘陵上に所在する、41土壙墓、6土器棺、4溝状造構で構成されるが、土壙墓の配置や形態から5群に分けられる。5群の埋葬には5単位集団がその背景として考えられるが、各単位集団間には大形墓壇内に配石を施すもの、小口に石積みをもつもの、二段掘り方をもつものなど他とくらべてより厚く葬られたり、また副葬品も、鏡やガラス小玉、あるいは鉄器類をもつ集団ともたない集団、またはより少ない集団など集団間の格差が顕著となるのである。

東高月丘陵群という方1km程度の单一地域において、こうした集団墓の系譜をたどるものと、小規模ではあるけれども、方形台状墓の系譜をたどる二つの流れが併行するのである。こうした埋葬様式の個体差は、出土遺物等からみても、時代差ではなくて、母体となる共同体構成集団の差と推察されるが、その確証はまだ明確でない。いずれにしても当地域において、弥生時代後半から終末にかけて、集団墓内の優勢な単位集団の成長と、さらには単位集団内においても、次第に共同体構成員から隔絶されていく個人の人格が顕著となり、やがて死ねば古墳に葬られるであろう人物が形成されつつあるのである。

用木古墳群は、こうした便木山遺跡の累積墓と、方形台状墓にみられる累世墓的な両者の形態とともに引き継ぐ形で、高塚古墳として発生してくるのである。すなわち集団墓+方形台状墓から、定形化された古墳への過渡的な特徴を示す古墳群といえるのである。

2. 用木古墳群

用木古墳群は、一つの小丘陵尾根上に直列状に所在する16基の古墳で構成される、古墳時代前期後半を盛期とする古墳群であるが、初期のものは、集団墓的な様相を強く残し、当地域における初現的古墳としての特徴を示す。



第146図 用木古墳群配置図

各古墳の時期は伴出遺物も乏しく、必ずしも明確ではないが、墳丘の切り合いの関係等から、笠岡市高島王泊第6層の時期から5世紀後半にかけて、4期ないし5期の段階にわたって継続的に築造されていると考えられる。用木古墳群全体が累世的に築造されるのではなくて、その立地や形状ならびに配置などからみて、大きく3つのグループに分けられ、尖々が互いに併行して並存しながら、世代を追うように順次築造したと推定される。すなわち、用木山頂に墳端を切り合うように隣接する第1号墳と第2号墳、それの約80mの北東に隣接する第3号墳と第4号墳、さらにまた80m離れて立地する第6号墳を中心としたグループがそれである（図146、表26）。

用木古墳群のなかで最も古い築造は第12号墳で、伴出土器の特徴から王泊第6層の時期と比定される。丘陵尾根上の自然地形の高まりを利用して、その両端部の尾根稜線に接する部分に、尾根走向に直交する溝を掘り、墳域を画するとともに、墳丘の高まりと幅員を増大させ、溝斜面の整形面にのみ葺石をふきその中央に供獻土器を置いている。墳丘は削平整地と僅かな盛り土整形を施す程度の尾根主軸に沿って長辯をもつ方形墳である。そして埋葬主体は墳中央の地山層に直接掘りこまれた土壤墓で枕石をもつ。葺石と境外供獻土器のありかたを除けば、基本的には従来からの伝統的な方形台状墓と、構造的にも方法的にも変わらないのである。眼下の谷水田との比高約45mの高い丘陵上に、一墳丘一埋葬という一被葬者による一定面積の占有を示す、高塚古墳として、築造されたことが注目されるのである。

次の第2～3段階の第4号墳と第3号墳、第2号墳と第1号墳の関係は、きめわて特徴的である。第6号墳においてもおそらくそうであろうと思われるが、現状保存のため未掘があるので、第

表25 用木古墳群の構成

号墳 形 式	墳 形 式	外 部 施 設	地 形 式	埋 葬 器		地 形 式	埋 葬 器	時 期	附 記
				品 目	出 現 場 所				
1 円 墳	31	埴輪一部瓦石	1 刺繡竹形木棺	圓筒鏡1、銅鏡37 鏡3、直刀1、鍔2、鏡1		2 土器陶2	ナシ		2号墳より後出
2 不定形	22	ナシ	2 平底組合せ木棺 土 壤 菓	方格規矩鏡1		7 土器陶4	小形内行花文鏡1 小鉄鋗片1、ガラス小玉1	高麗王治第5層	
3 沖方後方塹	42	埴輪瓦石	1 粘土椁	波文帶四瓣鏡1 鏡3、鏡1		2 土器陶2'	鉢1、刀子1、鉢2、 鏡1、刀子1、鏡2	4号墳より後出	
4 不定形	22×17	外抜抜取土器	3 土器陶	鐵鋗片1		11 土器陶10	劍2、刀子1、鏡2 刀子1、鏡1	高麗王治第5層	
5 方 墳	15×12.2	埴輪一部瓦石	2 木棺麻弊	劍1、刀子1 刀子2、小玉1、ガラス小玉28		1 土器陶1	ナシ		3-4号墳より後出か?
6 斜方後円墳	36	ナシ	—	—		—	—		不詳(現代保存)
7 方 墳	16×14	埴輪一部瓦石	1 土器陶	劍1、刀子1 刀子2、小玉1		6 土器陶6	土器陶6 石槌形邊磚	ナシ	5世紀代
8 円 墳	22×18	ナシ	1 粘土床	鏡斧1、劍1、刀子1 鐵錐2		1 土器陶1	ナシ		5世紀代
9 ?	(10)	?	2 土器陶	鉢樣1 ガラス小玉1		0			5世紀中葉か
10 ?	(10)	?	1 土器陶	鉢樣1 管玉1、ガラス小玉1	0				5世紀中葉か
11 万 墳	13×10	埴輪一部瓦石 埴 輪	1 粘土陶?	鉢樣1、鉢樣2 その他小鉄鋗片3		1 土器陶1	ナシ		5世紀後半か
12 方 墳	16×10	埴輪一部瓦石 外抜抜取土器	1 土器陶	劍1、	0				高麗王治第6層
13 ?	?	?	(1) 土器陶	ナシ	0				不詳
14 ?	?	?	(3) 土器陶	ナシ	0				不詳
15 円 墳	11.5	(瓦石?)	1 粘土陶?	内行花文鏡1	0				5世紀代?
16 円 墳	(7)	ナシ	1 箱形石棺	ナシ	0				不詳

4, 3号墳、第2, 1号墳について、順を追って略記してみよう。

第4号墳は丘陵尾根突端部の自然地形の高まりを利用して、地形の高い側の尾根墳端部に溝を掘り若干の削平整形によって築成された、不定形な見せかけだけの高塚である。したがって墳形および墳端も定かでなく、蓋石等の外表施設をともなわない。墓域の推定規模は 22m × 17m、高さ 3.5m である。埋葬主体は墳頂中央部に尾根走向に直交する 2 主体と、平坦部肩の小児埋葬を思わせる 1 主体、それに墳端から墳外丘陵上にかけて、土器棺 1 を含む 11 主体の計 14 主体の埋葬である。埋葬形式は土器棺を除く他はすべて素掘りの土壙墓で枕石を有し、特に墳頂第 1 主体 2 遺体、墳外第 4 主体に 4 遺体、第 5 主体に 3 遺体が検出されて注目された。また墳丘内 3 基の土壙墓には小鉢器片 1 点がともなうのみであるのに対して、墳丘外 11 基のうちの 3 基には剣、刀子、勾玉、管玉などをともない、墳丘内外被葬者間にさして差がないことを物語っていて、弥生時代以来の伝統的な集団墓の色彩が強い。強いてその違いをいえば、埋葬施設が墳丘中央部の高所と、墳裾部から墳外丘陵上の低所という立地関係ぐらいである。またこうした墳外埋葬施設をとりこんで同一墓域とすれば、墳外埋葬施設部はそのまま前方部的な形態を示し興味

表26 用木古墳群の関連

編年	岡山南部	山陽団地	
上 東 (古)		愛 宕 墓 遺 跡	宮 台 山 方 形 墓
上 東 (新)			便 木 山 方 形 墓
白 江 II	宇 立 伊 与 部 坂	總 社 市 宮 山	便 木 山 遺 跡
酒 津		銅 物 師 谷	
高 島 第 六 王 泊			用 木 12 号 墳
高 島 第 五 王 泊	都 月 1 号	金 藏 山 古 墳	用 木 2 号 墳
			用 木 6 号 墳
			用 木 4 号 墳
			用 木 3 号 墳
			用 木 5 号 墳
			用 木 7 ・ 15 号 墳
			用 木 9 ・ 10 号 墳
			用 木 11 号 墳
			用 木 8 号 墳
			野 山 古 墳 群
			四 辻 6 ・ 7 号 墳
			四 辻 1 ・ 5 号 墳
			岩 田 3 号 墳
			宮 山 4 号 墳

深いのである。

第4号墳の墳端の一部を切って世代を追うような形で築成された第3号墳は、その形態を一変するのである。丘陵尾根の自然地形を最大限に利用して、削平整形を主体とした築造ではあるが、全長42m、後方部高約5mの前方後方墳としての形式を整え、墳裾部には鉢巻状の葺石をめぐらしている。埋葬施設も墳頂中央部に尾根主軸に直交する長さ5.7mの粘土構の中心主体を置き、墳端より出し部に1基、墳裾葺石下に1基の計2基の土壙墓と、定形化された整った埋葬がおこなわれている。副葬遺物も中心主体には被文帶四獸鏡1、鉄斧3、劍1に対して、出し部主体には鉄斧1、劍3、刀子1、鉄鏡3の供獻である。

第2号墳は第4号墳と同様、丘陵頂平坦部の突端にあたる自然地形の高まりを利用して、地形の高い側の尾根墳端部にのみ溝を掘って墳頂を廻し、そのほかは削平整形しただけのみせかけの高塚である。したがって墳丘に盛り土を有せず、墳形および墳端ともに判然としない。延約22mの不定形な円墳といった感じで、葺石などの外表施設もともなわない。埋葬施設は墳頂中心主体の土壙のほか墳丘内に1基、墳裾から墳外丘陵上にかけて7基（内土器棺3）の計9土壙墓である。当該地が弥生時代の集落址と複合し、土器棺の中に弥生時代中期末のものを検出するため、一概にすべての土壤と直接結びつけることはできないが、これまた第4号墳と同様に集団墓的な様相を示すのである。副葬遺物は中心主体方格規矩鏡1に対して、墳外第3主体に小形内行花文鏡1、第5主体に小鉄器片1、第8主体にガラス小玉1の供獻である。

第2号墳の墳端の一部を切って築造された第1号墳は、もともと第2号墳より低位にあるにもかかわらず、約2.7mの高さの墳丘盛り土を行ない、径31m、みせかけの坡高約5mの截頭円錐形の古墳につくりあげ、墳裾には部分的にではあるが葺石をめぐらせている。

埋葬施設として、墳頂中央部に尾根走向に直交した長さ6.4mの墓擴を掘って、割り竹形木棺を納め、尚方作歌帶鏡1、銅鏡37、劍3、直刀1、鉄斧2、劍1の副葬品をもつ。墳外丘陵上に土壙墓2基を検出したが、副葬遺物をともなわず、本古墳との直接的な関係は明確でない。本来1墳1被葬者を目的として築造された古墳であり、丘陵頂の立地といい、その規模からみて、まさに定形化した、在地首長の古墳としてふさわしいものである。

第4号墳および第2号墳はともに高島王泊第5層の時期の土器棺を伴出し、ほぼ同時期に築造されたものと考えられるが、外觀上の高塚を丘陵尾根の高立地に築くという形を取り入れてはいるものの、その形状は不定形であり、埋葬主体も伝統的な土壙墓による集団墓の形態を残している。そしてそれらを世代を追うように引き継ぐ、第3号墳および第1号墳になって、はじめて墳形、埋葬主体、副葬品とも、定形化された古墳として形式を整えてくるのである。古墳は当地においては、異質の墓制として突然に出現するのではなくて、在地首長墓として漸移的に取り入れられたことを物語っている。

岡山県南部においては、すでに酒津式併行期あるいはその直後の時期に、總社市宮山遺跡や、鈎物師谷遺跡^⑨では古墳的な形態の中に弥生時代の伝統をもつ集団墓をもち、古墳の芽生えを見せていた。また一方では当地の南西約7kmの岡山市備前車塚は、全長49.5m、二段築成の前方後方墳としての形を整え、後方部頂に長大な堅穴式石室を1基のみを主体として、その中には三角縁神獣鏡を

含む船帆鏡13面のほか、多数の鉄器類などが納められていた。これらの先駆的な遺跡と比較すると当山陽町では、古墳の出現は少くとも数世代の遅れをみせることとなる。弥生時代以来の墓制の伝統を引き継ぐなかで、各地においてそれぞれ共通性をもちながらも、独自性をもった首長層の發展の系譜がたどられるのである。地理的・社会的な背景の相違によって、同一地域内にあっても、墓制の変化は格差があり、画一的には進歩しない。これらは単純に先進性とか後進性とかで割り切ることのできない問題を含むものである。このことはまた、最近調査された倉敷市王墓山遺跡群の報告においても指摘されているとおりである。

在地首長墓としての名実共に形を整えた第1号墳および第3号墳の、次の段階にあたる第5号墳および第7号墳は、いずれも尾根走向に沿って長辺をもつ $16m \times 12m$ 程度の小形方墳である。墳丘築成および埋葬主体ともに簡素であるが、依然として、墳丘内主体のほかに墳外埋葬を残し、次の第8号墳および第11号墳の段階になってようやく、墳丘内埋葬のみの形態を整えるのである。

しかしここで注目されることは、第2・4号墳から第1・3号墳へと、 $30m \sim 40m$ 級の在地首長墓の奥津城としての、規模と内容を整えてきた古墳を引き継ぐに際しては、第5号以下の中古墳はあまりにも貧弱である。また当丘陵群に群在する古墳群の大半は、これに類似した前期後半を盛期とした小規模墳である。したがって、用木第1・3号墳を引き継ぐ古墳は他に求めなくてはならないのである。当丘陵の南西にひらけた理賀平地の一角に展開される小山古墳、朱千駄古墳・廻り山古墳、両宮山古墳、森山古墳の全長 $100m$ 級の前方後円墳の系列が、それがあたると考えられるのである。そして丘陵内に築造されるこれら前期後半の小形古墳は、その母体となる、世帯共同体単位の小首長層の墳墓群として理解されるのである。

3. 前期小形古墳

発掘調査の結果、用木第1号墳～第4号墳の4基のほかは、いずれも $10m \sim 16m$ 規模の小形墳で、墳丘築成、内部主体、副葬遺物とともに簡素である。そして当初円墳と思われていたもののうち調査によって方墳となるものが多く注目された。

墳丘の築成は、先にも何回かふれてきたように、丘陵尾根部を削平整地し、その両墳端部にあたる尾根を溝または削りおとしして、墳域と墳形を整え、僅かの墳丘盛り土を施す程度の築造である。盛り土を施したものの中でも、その盛り土高が $1m$ を越える古墳は見当らず、平均 $50cm \sim 60cm$ を測る程度である。尾根巾のせまい稜線に構築するための、地形的な制約によって、必然的に方墳となつたものと推定されるが、一方においては、弥生時代以来の方形台状墓の系譜を引くことも見逃がせないのである。

古墳の外部施設として、葺石を有するものが多くそのすべてが方墳である。いずれも尾根部に掘られた溝造構等の削平された墳裾部だけに施されていた。第5号墳、第12号墳では、古墳主軸線上にあたる葺石中央部に古式土師器を墳外供獻物として置いていた。これは先に報告した四辻第1号墳、宮山第4号墳に見られた墳外須恵器と共通するものである。埴輪をもつ古墳は第11号墳のみで、それもほとんどが散逸して、小破片を僅かに検出したのみであるが、通常の円筒埴輪のほか

に、上部がラッパ状に開くまえに一度くびれる朝顔形埴輪や、器材埴輪も含んでいた。当丘陵群の小形古墳のなかで、埴輪をもつ古墳として、岩田第1・3号墳、四辻第1・5号墳、宮山第4号墳、便橋第7号墳が知られているが、いずれも共通した出土形態を示している。

内部主体の構造も簡素である。墓壇内木棺直葬を原則とするが、古いものは地山層に直接掘りこんだ土壙墓、時代を降るにつれて埴丘盛り土層に掘られた墓壇内埋葬となる傾向を示すが、細部については個体差をみせる。第5号墳は盛り土中に直接棺床を置き墓壇をもたない。第8号墳は粘土床、第7・11・15号墳は封土盛り土中に墓壇を掘った箱形木棺を納め、第12・13・14号墳は直接地山層に掘りこまれた土壙墓、第9・10号墳は土壙内深床、第16号墳は組み合せ式箱形石棺である。そのほとんどが床面に枕石をもち、なかでも第7号墳中心主体は複数埋葬である。これらの内部主体の埋葬について共通することは、墳頂部からの墓道掘りこみ線が検出されず、埴丘築成前の地山削平整地直後の段階、または埴丘盛りあげの過程のなかで埋葬が行なわれていたことである。

副葬品についてもきわめて簡素である。各古墳の出土品については表26に示したとおりであるが、小数の鉄器類と玉類を供獻する程度のものが多い。そのなかでも、剣と生產工具類の検出例が多いことが注目された。

吉備において、埴丘、埋葬主体、出土遺物などの簡素な前期小形古墳は、その量にくらべて調査報告例が少ないが、今次の発掘調査によって、本用木古墳群をはじめ、四辻古墳群、岩田第3号墳、宮山第4号墳、野山第2・5号墳など、多種の埋葬手法の資料を得ることができた。本古墳群を含む当丘陵群中のこうした小形古墳は、砂川流域および丘陵支脈間にひらけた、水田地帯を背景とした生産と分配を一単位とした、世帯共同体の墳墓群と推定され、こうした小共同体が5世紀代からすでに古墳を造り得るだけの、変質をとげつつあったことを示すのである。

註

- 1) 神原英朗「岩田第3号墳発掘調査概報」岡山県當山殷新住宅市街地開発事業用地内埋藏文化財発掘調査概報(2)1971年。
- 2) 神原英朗「宮山第4号墳・宮山方形合状墓」前掲調査概報(3)1973年。
- 3) 神原英朗「四辻古墳群」前掲調査概要(3)1973年。
- 4) 神原英朗「四辻土壤墓遺跡」前掲調査概報(3)1973年。
- 5) 註2に同じ。
- 6) 神原英朗「便木山方形合状墓」前掲調査概報(3)1973年。
- 7) 報告書未完、本調査概報第5集に俟る予定。
- 8) 註7に同じ。
- 9) 神原英朗「便木山遺跡発掘調査報告」前掲調査概報(2)1971年。
- 10) 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」昭和31年。
- 11) 岡山県南部における弥生時代後期から前期古墳期にかけての、土器編年は最近特に進められ、倉敷市王墓山遺跡群、山陽新幹線にともなう通町遺跡、上東遺跡の調査報告書でもとりげられている。山陽町においてはまだ十分な検討もできていない状況のため、本章の編年表については、間壁忠彦・間壁豊子「女男岩・辻山田遺跡の問題点」王墓山遺跡群、1974年の編年表を準用させていただいた。
- 12) 高橋謙「宮山墳墓群の調査から」岡山県総合文化センター館報39、昭和39年。
- 13) 春成秀齋、葛原寛人他「備中清音村舞物師谷1号調査報告」古代吉備第6集、1971年。
- 14) 間壁忠彦・間壁豊子「女男岩・辻山田遺跡の問題点」王墓山遺跡群1974年。
- 15) 本書「地理的・歴史的環境」の項を参照。

付・現状保存古墳外形測量図

現状保存古墳外形測量図

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業が進められている、山陽住宅団地造成用地内には、当初数基の古墳の存在が知られていたのみであったが、最終的には8支群77基の古墳の密集地域となった。これら77基の古墳は今次の開発事業にともなって、現状保存古墳29基、緊急発掘調査古墳45基、調査前既破壊消滅古墳3基に分けられるのである。

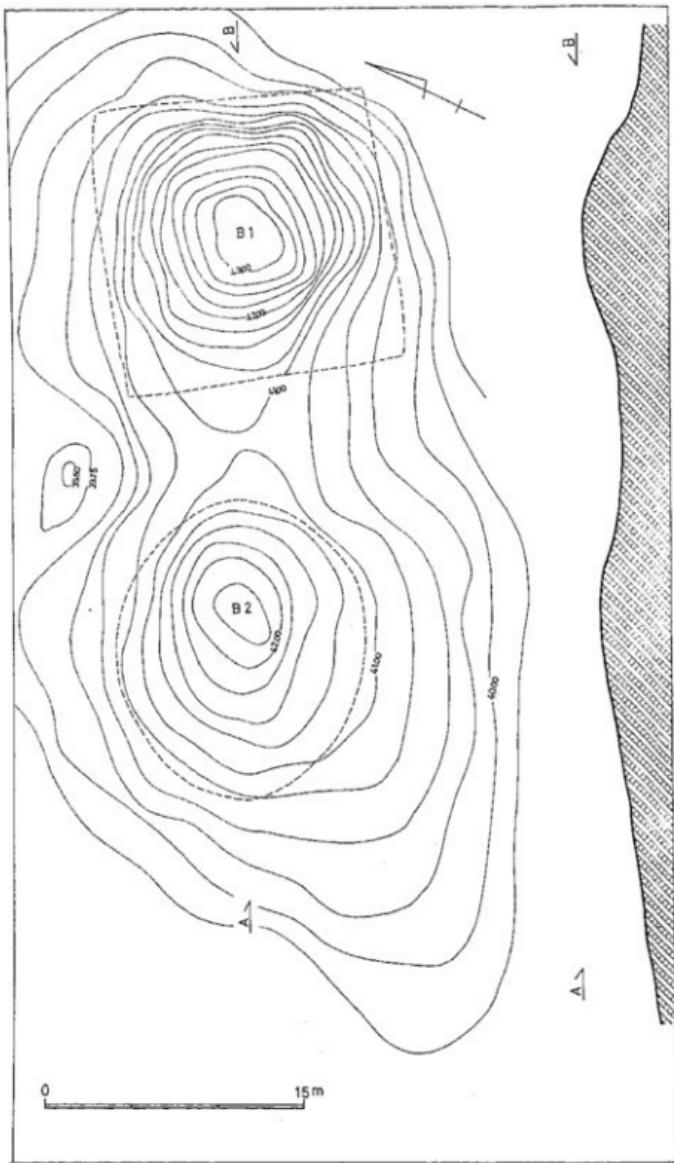
現状保存古墳は、岡山県教育委員会文化課および事業主体者である岡山県土木部住宅課等、関係機関の保存協議の結果、原則として支群ごとにまとまりをもった形で、公園や緑地内にとりいれて保存することになった。宮山古墳群6基中5基、野山古墳群13基中13基、便木山古墳群10基中8基の3支群がそれである。このほか用木古墳群第6号墳、岩田古墳群第2・4号墳を加えて計29基が現状保存されることになったのである。

古墳が現況で保存されることはいえ、丘陵地を削平整地して造成される大規模な住宅団地内の、見事公園や近隣公園または修景緑地等にとりいれての保存であってみれば、古墳そのものはともかくとして、それらが立地する基盤の周辺地域の地形が、大きく変容することはいなめない。そのため私たちは、造成工事が行なわれる前に、とりあえず保存古墳29基について、縮尺100分の1、25cmセンターによる外形測量を実施した。

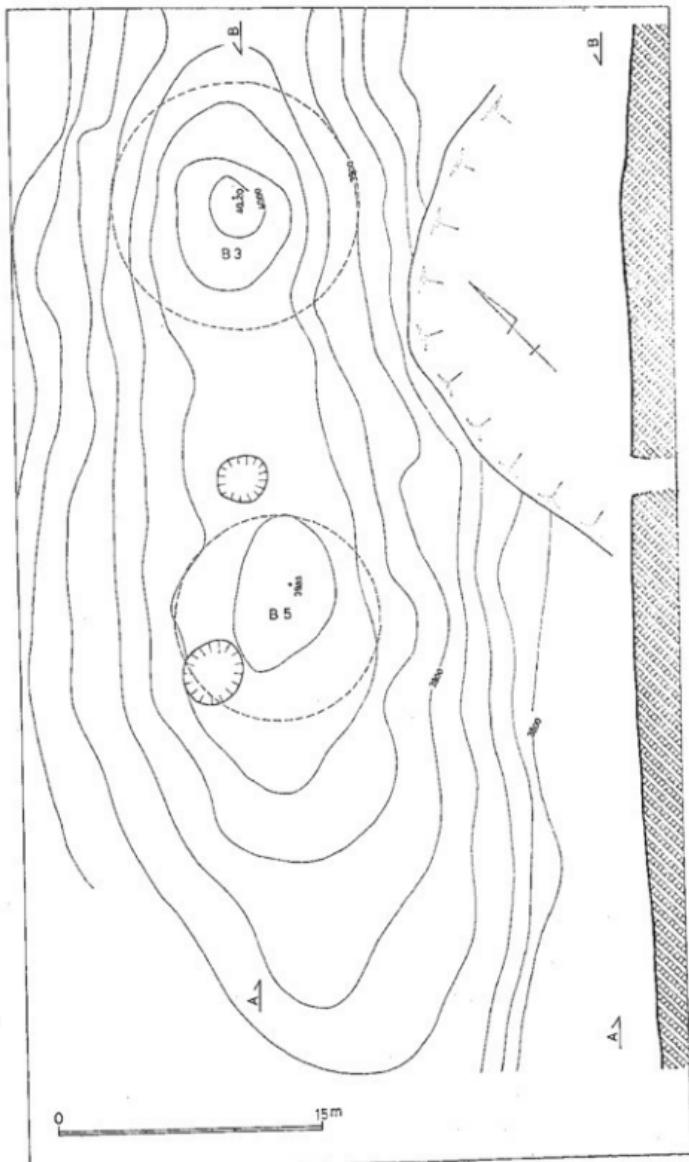
現在はまだ住宅地造成工事に重点がおかれ、公園等の整備計画や、古墳の保存方法ならびに活用計画は具体化していない。階段状に宅造された中に、ぼつんと取りのこされた残丘となっているのである。せっかく支群としてまとめて、自然地形に近い丘陵上に保存されるのであるから、周辺部をも含めての現状保存を強く要望したい。

本書が山陽団地埋蔵文化財発掘調査報告第1集として刊行され、用地内の全追跡概要を集成したのを機会に、これらの現状保存古墳の外形測量図も参考資料として紹介することとした。しかし、本書のスペースの制約もあって、単基づつの掲載ができず、数基をまとめての集成となり、縮尺も統一できなかったことを御了承賜わりたい。各古墳の素描ならびに計測値等については、本書に集成した「地理的・歴史的環境」の中の、山陽町遺跡一覧(P57、表1)、山陽団地用地内遺跡分布図(P70、第2図)、山陽団地内埋蔵文化財一覧(P71、表2)、などに表示しているので参照されたい。なお保存古墳のうち、用木古墳群第6号墳については、本書「用木古墳群」に稿をたてて記述しているので、ここでは割愛した。

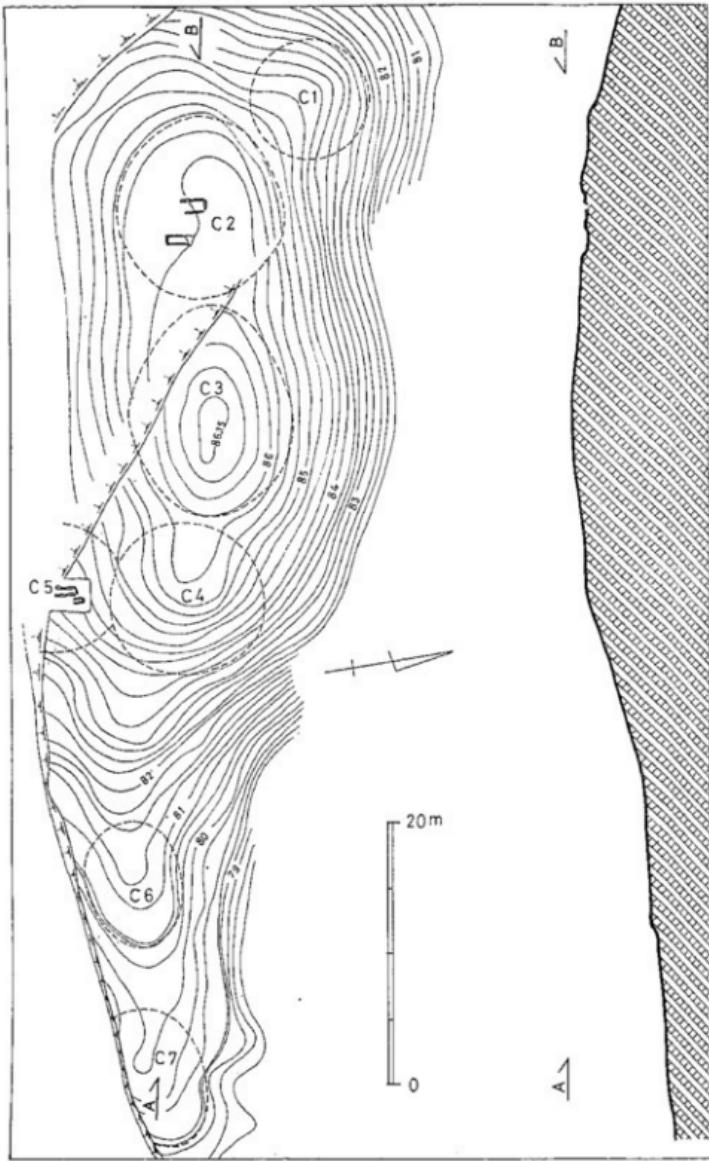
支群として保存される古墳は、いずれも丘陵尾根上に直列して群在する、径10m～18mの小規模墳である。丘陵尾根部の自然地形の高まりを利用して、尾根に接する墳端部の削平または溝の掘りこみによって、墳域を画するとともに、墳丘の高まりと幅員を増大させ、若干の封土の盛りあげと整形を施した程度の築造である。未掘墳が多くて主体構造等は不明のものがほとんどであるが、野山古墳群第2・5号墳ならびに便木山古墳群第3号墳は、組み合せ式箱形石棺を内蔵することが知られている。こうした箱形石棺あるいは木棺直葬の、発展期から転換期にかけての前期的様相を示す古墳群である。



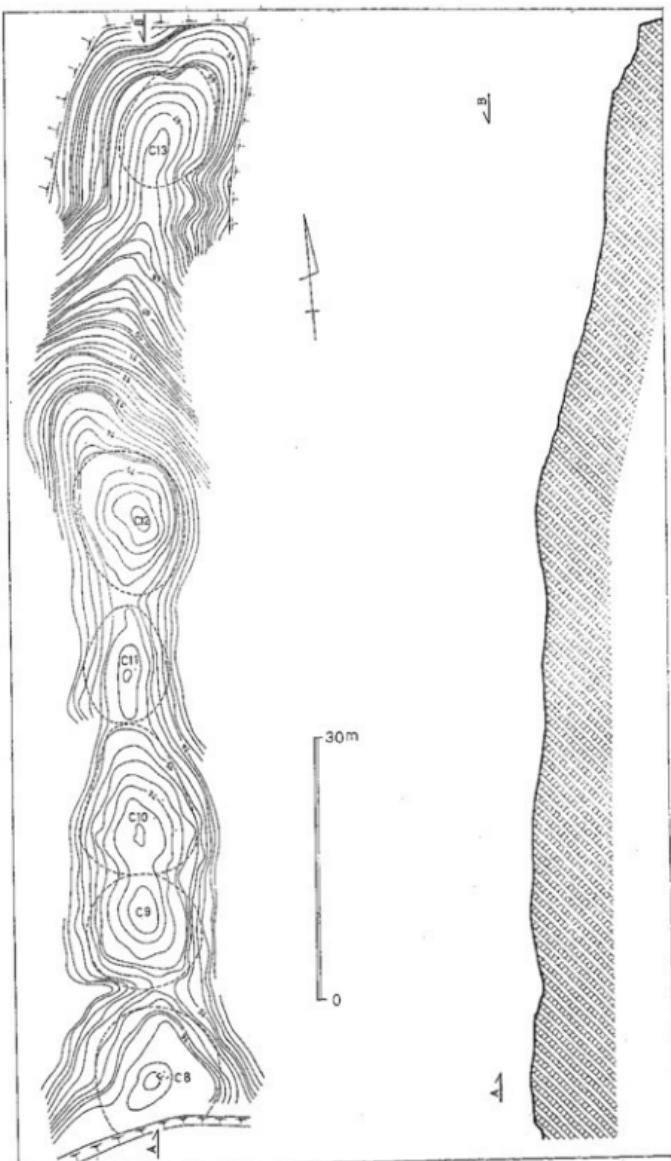
第147図 宮山 第1, 2号填外形図



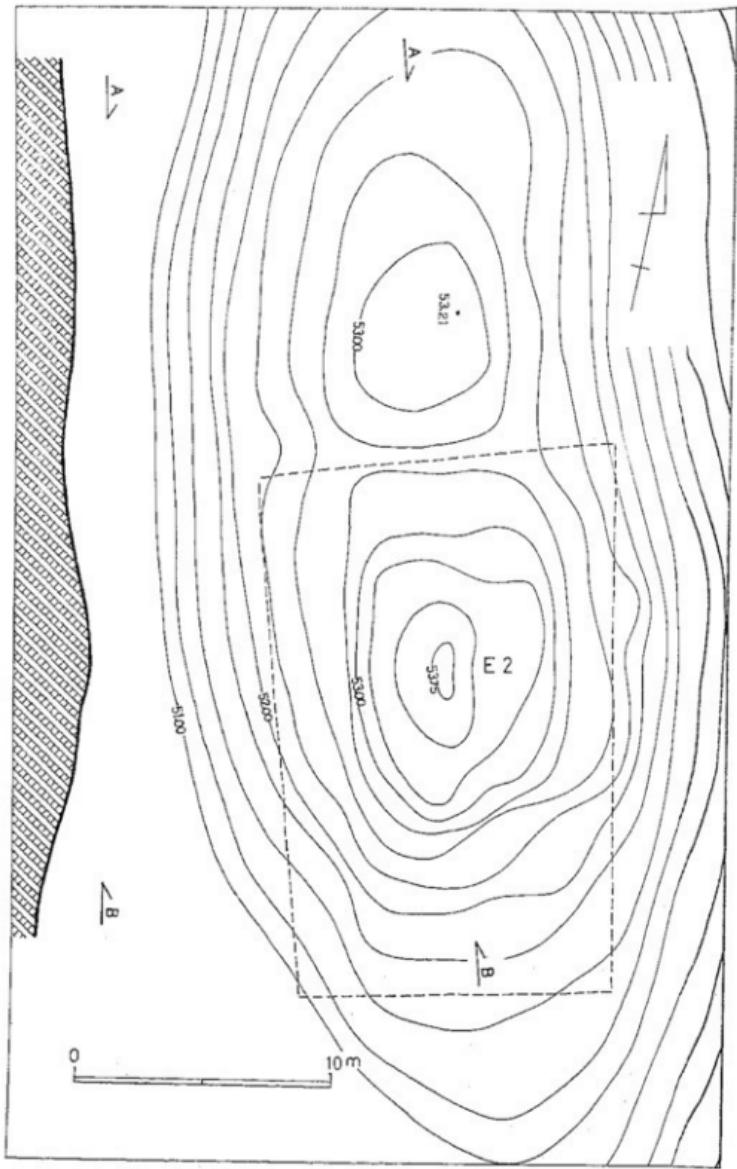
第148図 宮山第3, 5号墳外形状図



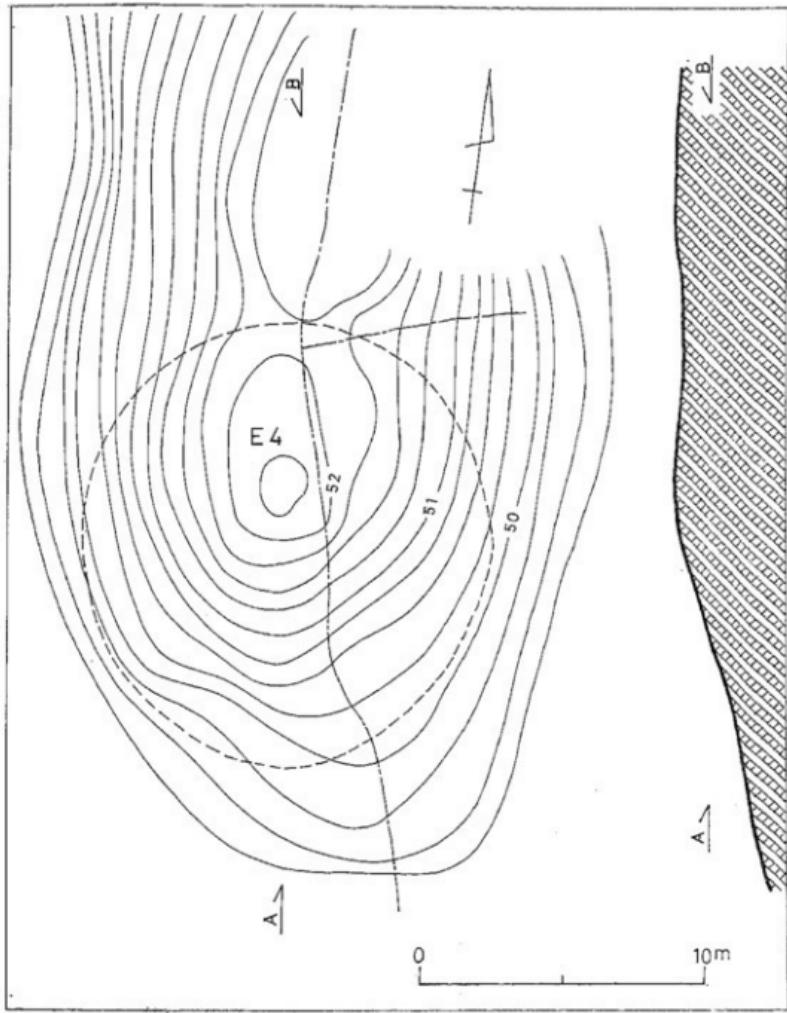
第149図 野山第1～7号墳外形図



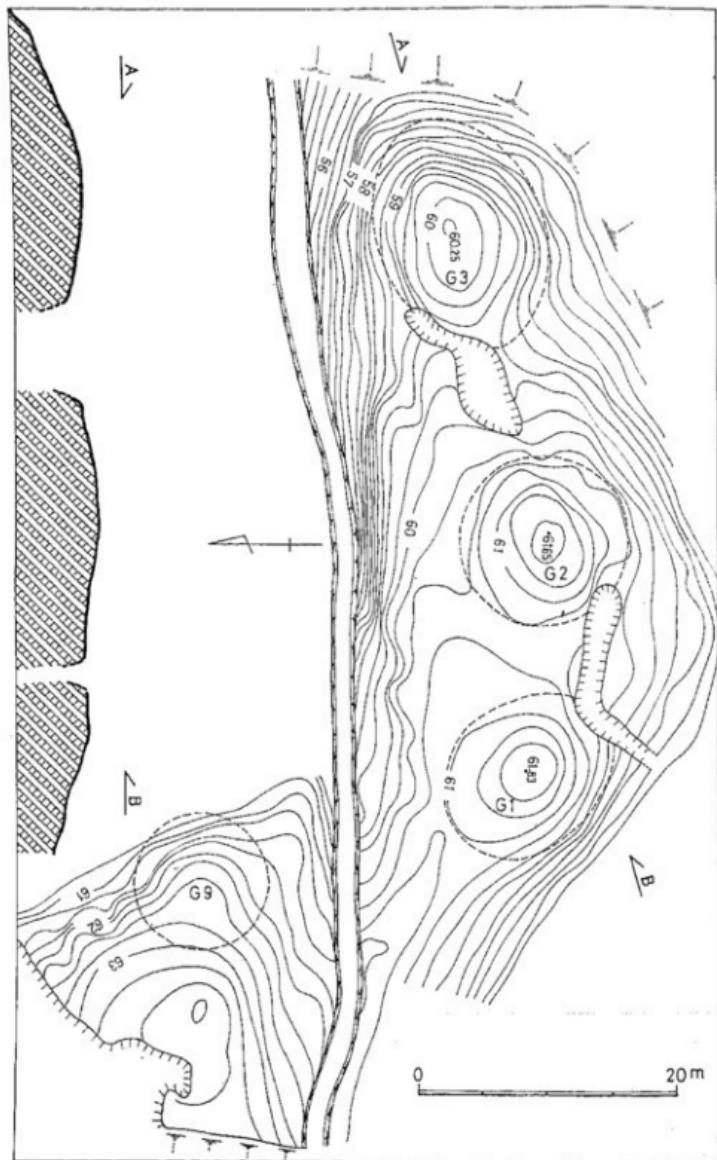
第150図 野山第8～13号墳外形図



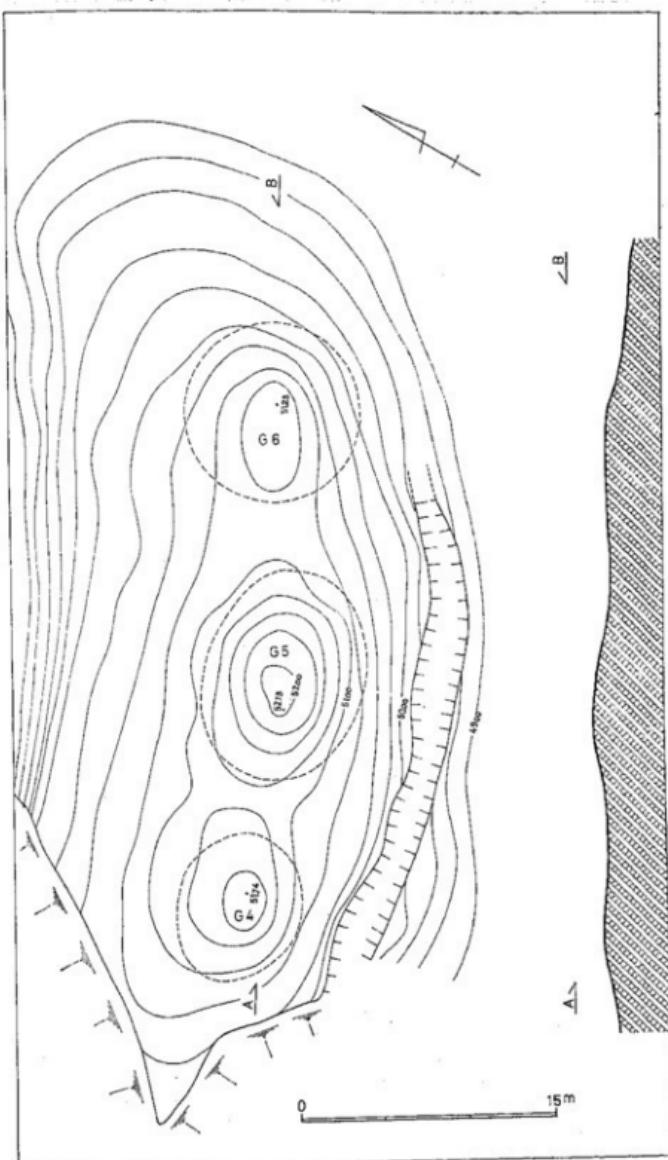
第151図 岩田第2号墳外形状図



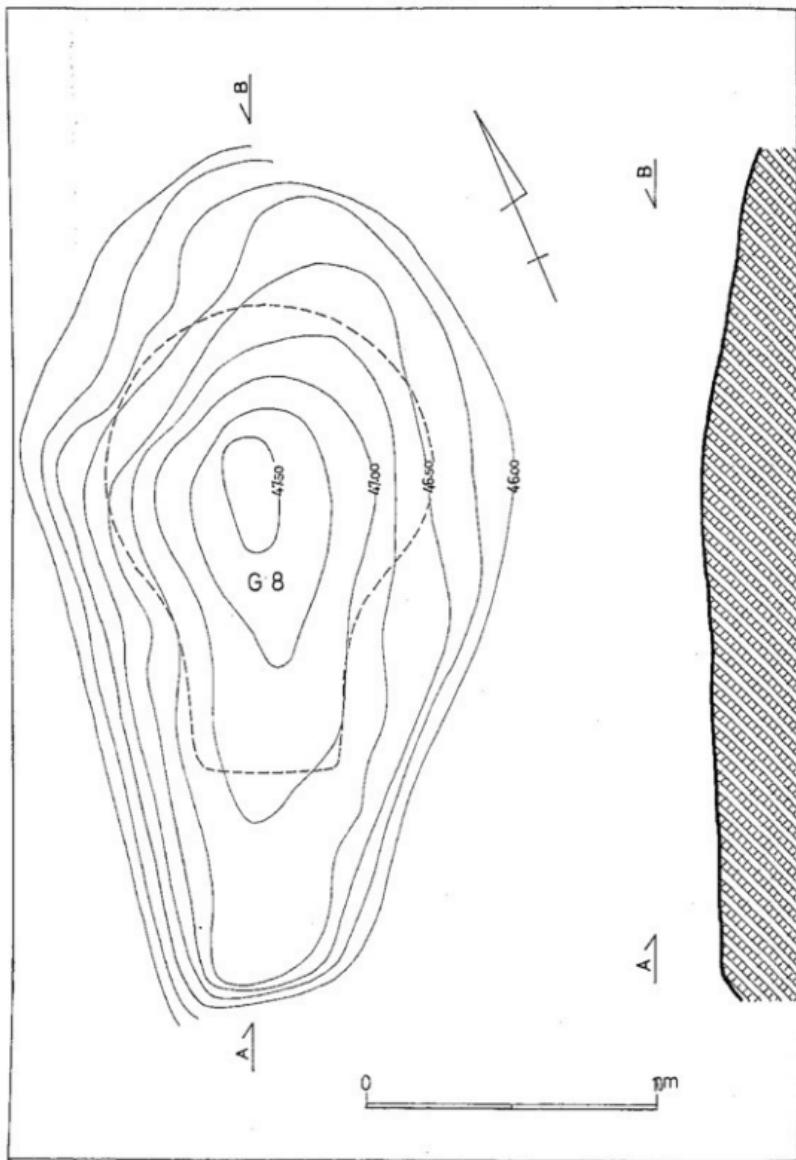
第152図 岩田第4号填外形図



第153図 便木山第1～3号填外形図



第154図 便木山第4～6号境外形図



第155図 便木山第8号墳外形図

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報

第 1 集

昭和 50 年 3 月 31 日 発行

発 行 山 陽 町 教 育 委 員 会

岡山県赤磐郡山陽町下市102

印 刷 西 尾 総 合 印 刷 株 式 会 社

岡山市津高 681

図 版

図版 1



1. 用木古墳群全景 (四辻 5号墳から)



2. 用木古墳群全景 (愛宕山から)

図版 2

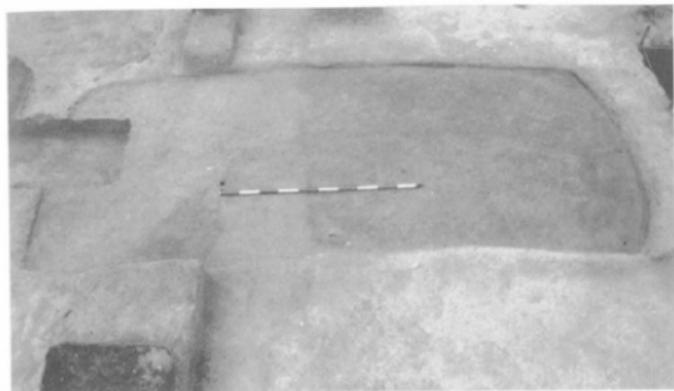


1. 第1・2号墳調査前外観 (左1号墳・右2号墳)

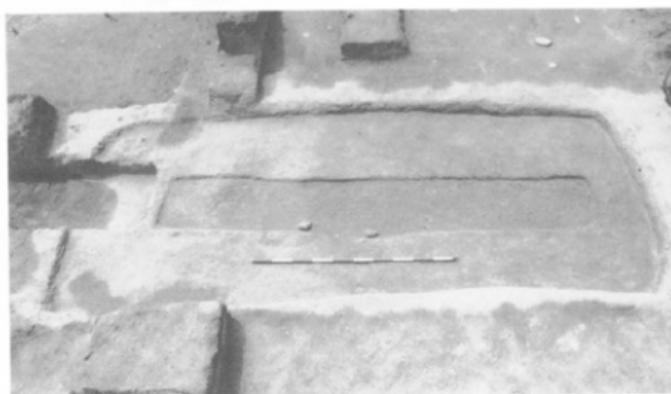


2. 第1号墳調査前外観 (南尾根から)

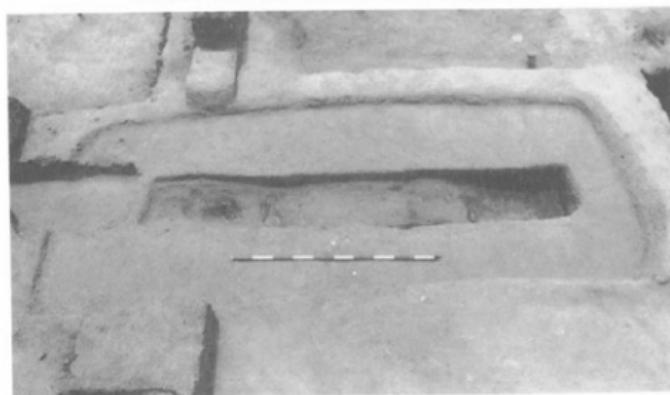
図版 3



1. 第1号墳第1主体土壤掘り方出土状況（北から）



2. 第1号墳第1主体木棺輪廓出土状況（北から）



3. 第1号墳第1主体発掘後出土状況（北から）

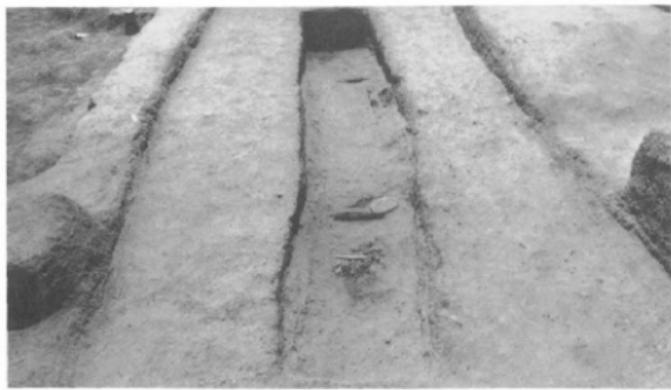
図版 4



1. 第1号墳第1主体土壤掘り方出土状況（西から）



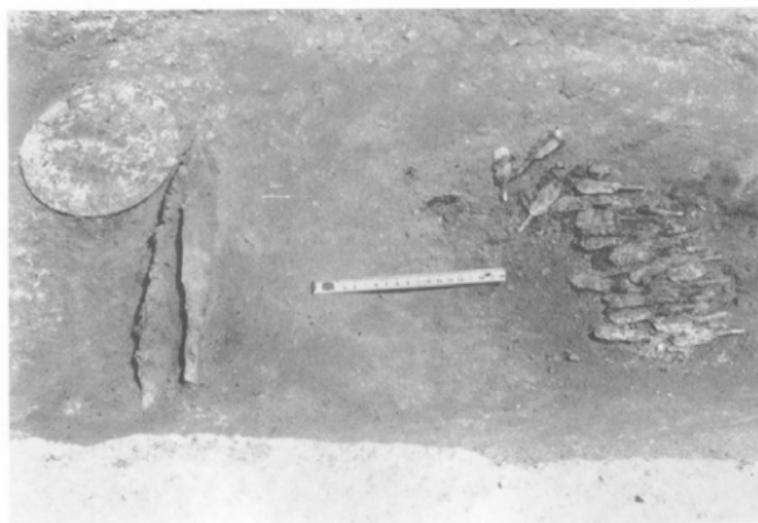
2. 第1号墳第1主体木棺輪櫛出土状況（西から）



3. 第1号墳第1主体遺物出土状況（東から）



1. 銅鏡, 鎮等出土状況（東から）

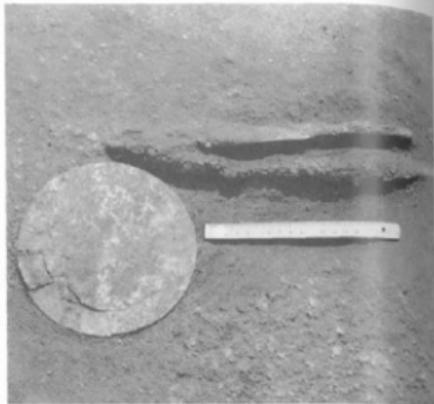


2. 鏡, 剣, 銅鏡出土状況（南から）

図版 6



1. 銅鑼出土状況



2. 鏡、劍出土状況



3. 鉄斧、鎗出土状況



4. 直刀出土状況



第1号墳発掘調査後全景（北から）



2. 第1号墳北溝遺構・葺石出土状況（西から）

図版 8



1. 第1号墳南葺石および墳丘断面（西南から）



2. 第1号墳墳丘断面（西から）



1. 墳丘下土壤および南墳端葺石出土状況



2. 墳丘下発見の複合住居址出土状況

図版10



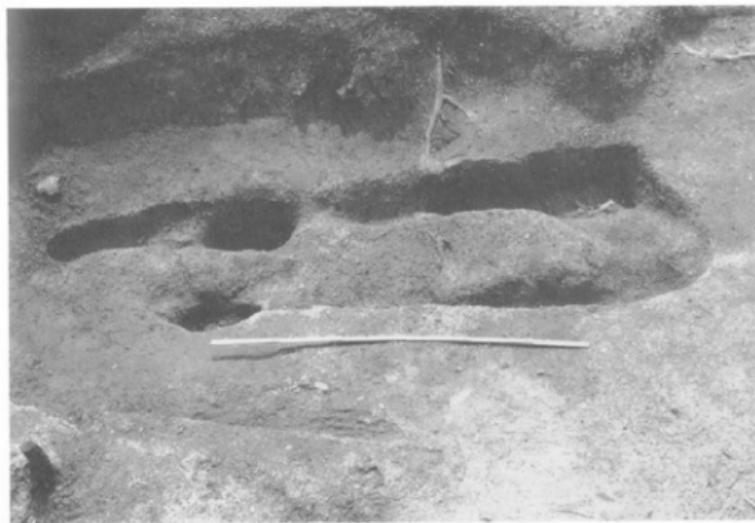
1. 第1号墳第1主体木棺と土壤の関連（西から）



2. 第1号墳第1主体木棺と土壤の関連（西から）



1. 第1号墳第2主体出土状況



2. 第1号墳第3主体出土状況

図版12



1. 第2号墳調査前外観（北東谷から）



2. 第2号墳調査後外観（手前・第5号墳から）



1. 第2号墳第1・2主体出土状況（北から）



2. 第2号墳第1主体出土状況（北から）



1. 第2号墳第2主体出土状況



2. 第2号墳第3主体土壤掘り方出土状況

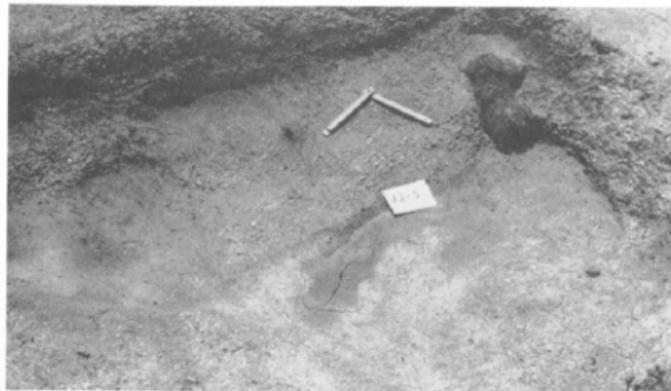


1. 第2号墳第3主体出土状況



2. 第2号墳第3主体鏡出土状況

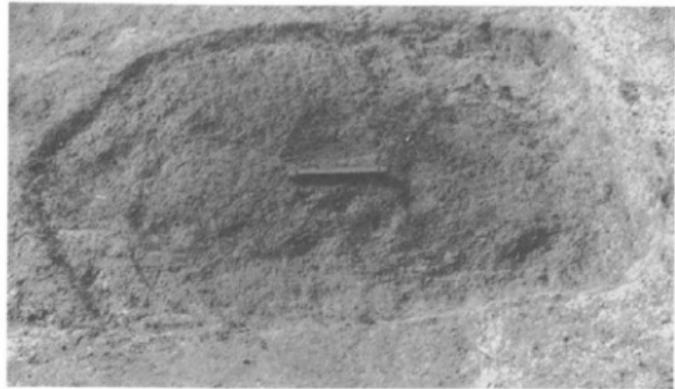
図版16



1. 第2号墳第5主体出土状況



2. 第2号墳第7主体出土状況



3. 第2号墳第8主体出土状況



1. 第2号墳第4主体発見状況



2. 第2号墳第4主体出土状況



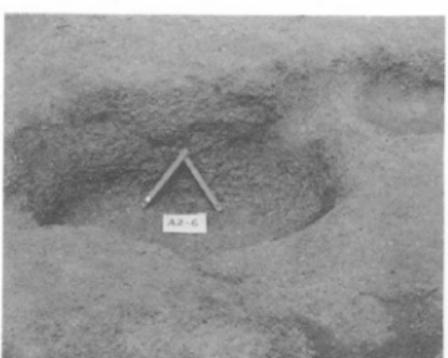
3. 第2号墳第6主体発見状況



4. 第2号墳第6主体蓋取りはずし後の状況



5. 第2号墳第6主体棺身部出土状況



6. 第2号墳第6主体土器棺取り上げ後の状況

図版18



1. 第3・4号墳調査前外観（右3号墳・左4号墳）



2. 第3号墳調査前外観（前方部正面から）



1. 第3・4号墳調査後外観 (左3号墳・右4号墳)



2. 第3号墳調査後外観 (前方部正面から)

図版20



1. 第3号墳前方部前面葺石（西から）



2. 第3号墳後方部端葺石（東から）

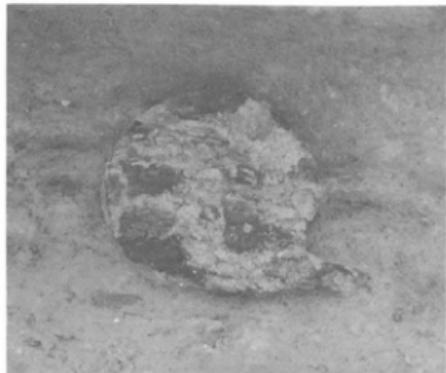


1. 第3号墳第1主体発見状況（北から）

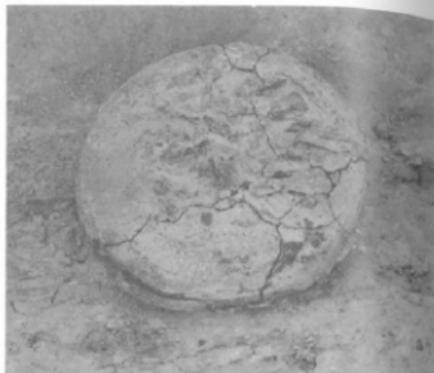


2. 第3号墳第1主体粘土管出土状況（北から）

図版22



1. 第3号墳第1主体鏡出土状況



2. 第3号墳第1主体鏡出土状況



3. 第3号墳第1主体鉄斧出土状況



4. 第3号墳第1主体鉄斧出土状況



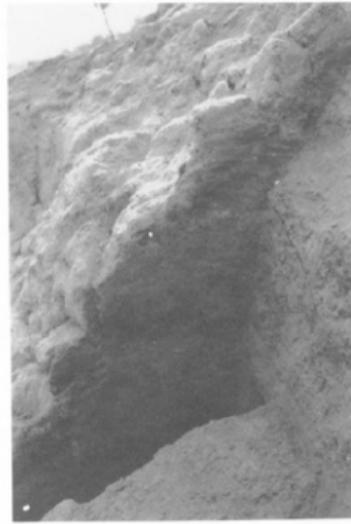
5. 第3号墳第1主体鏡出土状況



1. 第3号墳第1主体土壙と粘土櫛の関係



2. 第3号墳粘土櫛構築断面

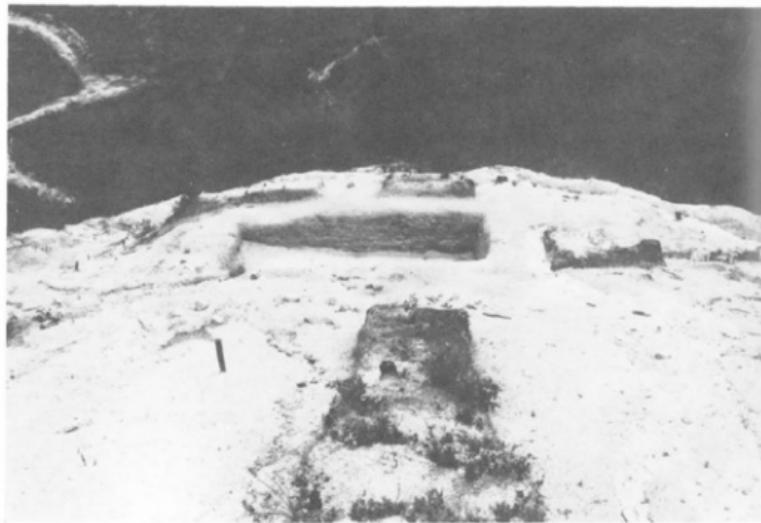


3. 第3号墳粘土櫛構築断面

図版24



1. 第3号墳第2主体出土状況（北東尾根から）



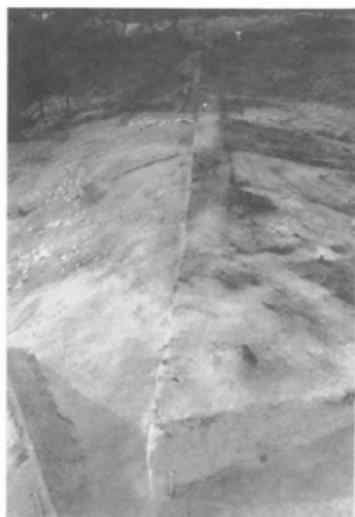
2. 第3号墳第2主体出土状況（墳頂から）



1. 第3号墳第2主体床面出土状況



2. 第3号墳第2主体枕石・鉄器出土状況



3. 第3号墳前方部（後方部頂から）



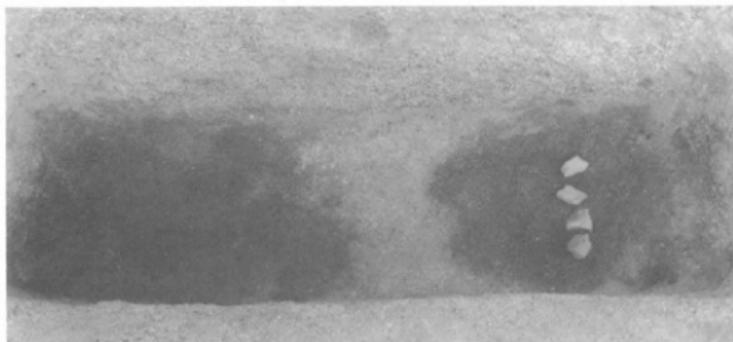
1. 第4号墳調査前外観（第3号墳から）



2. 第4号墳調査後外観（左方）



1. 第4号填第1·2主体出土状况

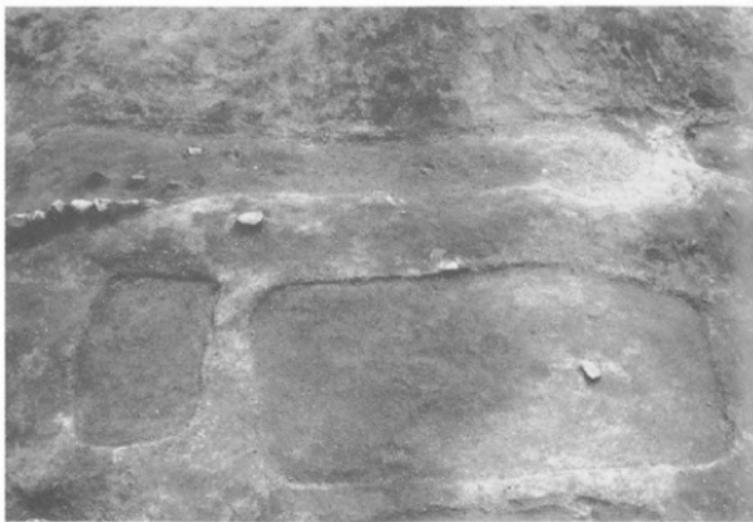


2. 第4号填第1主体出土状况

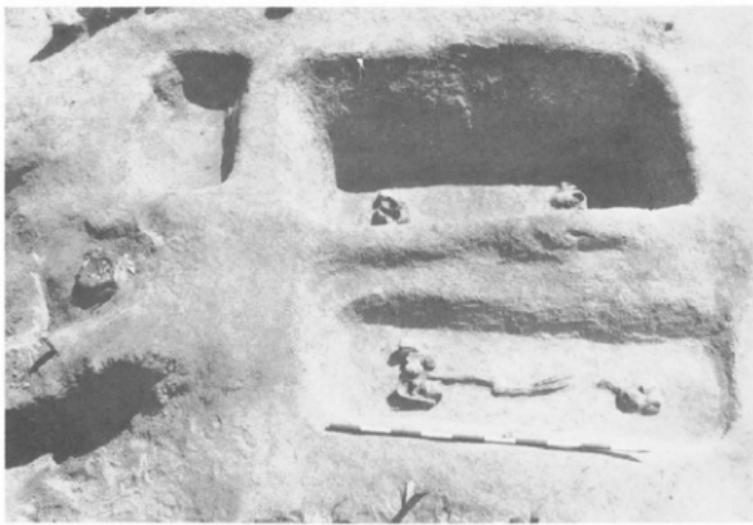


3. 第4号填第2主体出土状况

図版28



1. 北造り出し溝および第4・7主体発見状況



2. 第4号墳第4・5・7・14主体出土状況

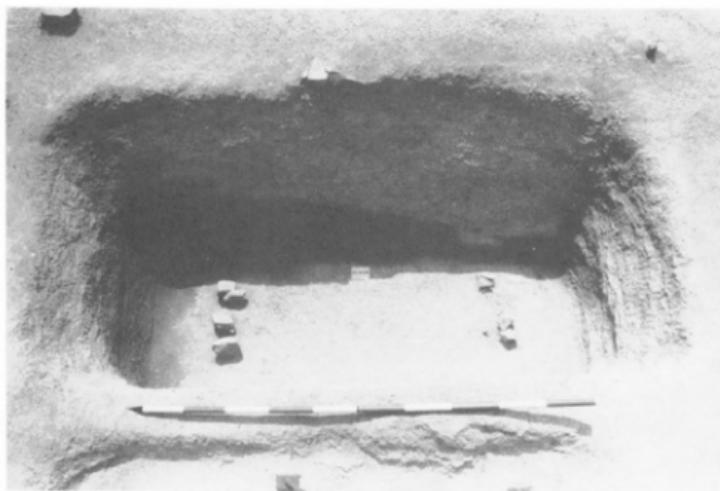


1. 第4号墳第4主体出土状況



2. 第4号墳第5主体出土状況

図版30



1. 第4号墳第4主体床面出土状況(遺体取りあげ後)



2. 第4号墳第5主体床面出土状況(遺体取りあげ後)



1. 第4号墳第6主体出土状況

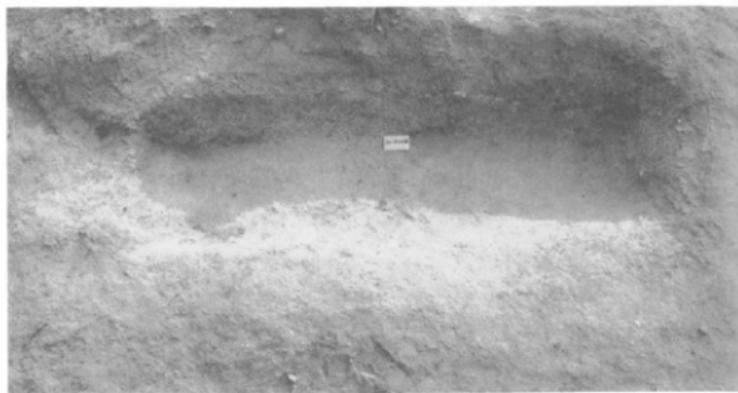


2. 第4号墳第7主体出土状況

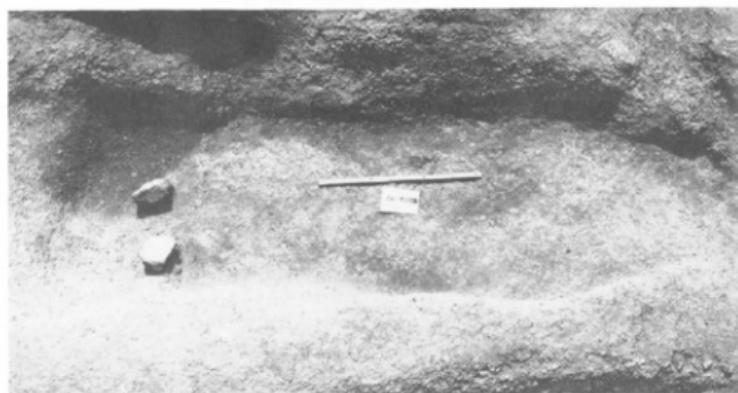


3. 第4号墳第8主体出土状況

図版32



1. 第4号墳第10主体出土状況



2. 第4号墳第11主体出土状況



3. 第4号墳第12主体出土状況



1. 第4号墳第3主体出土状況



2. 第4号墳第13主体出土状況

図版34



1. 第4号墳第8~10主体出土状況



2. 北墳端部溝出土状況



3. 第4号墳第14主体身部出土状況



4. 第4号墳第14主体蓋部出土状況



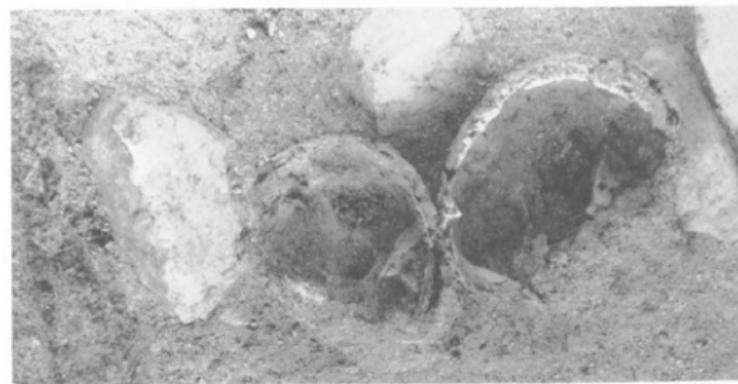
1. 第4号墳第11主体遺体出土状況



2. 第4号墳第2主体鉄器出土状況



3. 第4号墳第5主体遺体出土状況



4. 第4号墳第4主体遺体出土状況

図版36



1. 第5号墳発掘調査後外観（4号墳から）



2. 第5号墳外観（南東から）



1. 第5号墳調査後外観（南西から）

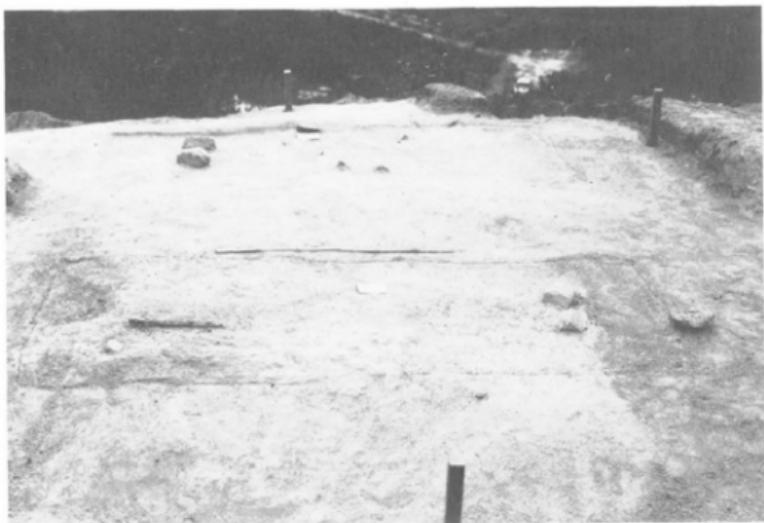


2. 第5号墳調査後外観（北東から）

図版38



1. 第5号墳第1・2主体出土状況（北東から）



2. 第5号墳第1・2主体出土状況（北西から）



1. 第5号墳第3主体出土状況



2. 第5号墳北溝および葺石出土状況

図版40



1. 第5号墳第1主体玉類出土状況



2. 第5号墳第3主体土師器出土状況



3. 第6号墳外観（北方第7号墳から）



1. 第7・6号墳外観（北方谷から）



2. 第7号墳調査前外観（南第6号墳から）